へると腹が立つて忌々しくつて溜らないから、左の顏筋をビリ〳〵動かしながら、氣を急いてをります。

其内におくらは又もや姿を隱したが、今度は手で吾が口を押へながら現て來て、又猶少し待てといふ。

『御待遠でございますが猶少し、御辛抱を願ひます。』

神村は今はは早足も折れさうになつたから、壁のところへ倚りかゝつてゐる。

四邊は段々夜になつて參る、おくらは虫の這ふ音さへ聞洩さじと、耳を戸へ着けて澄してをります。

やがて薄暗がりの裡からおくらが手を出して、神村の腕を探つたので、神村は心得て、彌といふ時に渡す約束の金子七十圓の狀袋へ入れたのを無言で手渡しすると、おくらは受取つて、其まゝ先へ立つて物置室へ入つて、遂に夫人と相良の居る室の、いつの間にか鍵を開けて置いた戸を、内部の方へと押入つた。

愕いたのは室内の醜光景、神村は開いた口を塞げもやらず、言句も出でず宛然雷にでも打たれたやう、呆れて了つてをります、室内の二人も愕いたの愕かないの沙汰ではない、唯もう茫然としてをりまする、此から男二人の間に激烈なる罵詈雜言、聞くに堪へない言葉爭ひがあつたが、それは暫らく御預りと致して、トゞの果、神村は足音暴く此室を出て參る、其跡で女のコツ〳〵とした足音が聞えたが、それはおくらが此間にと、逐電したのでございました。

庄兵衞は跡に殘つて夫人に、

『サ最早宜しい、何も心配せんで宜い、馬鹿々々しい事だが、何豈何でもない、氣に懸けるには及ばんさ、私は又明後日くる、宜ござんすか、私は今日は之から由利に逢ふ約束があるから行かんけりやならん、ぢや今日はこれで御別れする』

と此で二人は別れていつた。

四

恰度これと同時刻、かつ子は己のが室の卓の上へ突伏したまゝ、潸然として泣いてをつた、圖らずも車夫長吉の口から洩れ聞いた殘酷な事の次第、今迄も薄々悟つては居たものゝ、爾うと聞いては流石女氣に、今迄心の裡へ藏めてゐた嫉妬の念が燃立つて、疑心暗鬼も生じてくる、樣々な憂慮が夫から夫へと殆ど遣瀨がございません、萬國銀行に關する事も亦然うで、庄兵衞は成たけ云はぬやうにし此方からも餘り立入つて聞出さず、云聞かされる丈けを聞いて默つて、希望を以て大人しくしてゐたが、今考へると何事も後悔の種子になる、過般株主總會後兄へやつた手紙にも、何事も心配の廉はないと細々と書いて送つたが、今になると飛んでもないこと、嫉妬といふことが更にかつ子に、眼と耳とを開けてくれた、其眼と耳とで見渡すと、庄兵衞の爲る事に後影い事が續々現れる、阪谷名義の勘定はドシ〳〵增してくる一方だが、銀行は此名義の下に、虛の株を作らへて投機の賣買を盛に行つてるに相違ない、一々洗ひ立をしたならば銀行の基礎は何うあらう？　外見は巨大な此銀行も、軟弱い溝泥や砂の上に、必定築かれてあるに相違ない、第一株の騰り方が疾過ぎて、殆んど人間業とは思へない、何んな事があるか判らない、どんな風になつてるか判らない、嬉しいどころの沙汰ではない、恐ろしくつて溜らない、抑も此大銀行の出來上が疾過ぎる、俄ごしらへは毀はれやすい、一朝此夢幻的大厦高樓が瓦解し始めたら如何だらう、其慘害は怖ろしからう……。

かつ子は決して木偶でない、他人に瞞される女でない、そりやア銀行の事務なんど全く專門の事は知るまいが、併し聞けは理屈は解る、他人よりも多く萬國銀行の內部に關係はつてゐるそれ丈け多く、惡い善いが能く判る、銀行が種々の細工をして、公衆を欺き得意を瞞着してゐることが、考へれば段々と眼に見えてくる、株の相場が毎朝騰る、又何か吠え立てて騰るやうな噂を擴める、態と店先を賑はせる、應接室を立てこませる、それが段々見え透いてきた、ア、可憫想に、兄は斯んな事は露知らずに、人の事を輕信して、誘惑されて抱込まれて、遙々と東歐で一生懸命に働いてゐるだらう、今自分は是等怖いことを見知つてゐながら、默つて、兄を渦中に入れて、捲込まれさして置かれやうか、今にも襲つて來やうといふ大嘯水に、共に溺れさせて置かれうか、如何したらば斯うしたらばと、詮術なさにかつ子は只だ絶望の淵に悶えるばかり。

其內に日も暮て、四邊も暗くなつてきたが、せめて暖爐でも燃えてゐれば其火光だけでも陽氣だが、それが消えたまゝにしてあるのだから室の中はいとゞ暗い、刻一刻暗黑が增してゆくそれ丈け、かつ子の哀愁も增してゆく、何故彼女は斯う泣くだらう、銀行に數々の不都合が行はれ、夫を心配して哀しんで泣くのかといふと爾うでない、かつ子の泣くのは、相良が他に女を拵へた其事に就いてゞある、かつ子は負惜みに爾う思ふまいと、心を抑へてはみるけれ共、心は依然其方のことで涙を流させられてゐるのだ、彼女が弱虫の子供のやうに斯んなに泣くのは、銀行の事に段々の不正が發見つて終局には飛んだことになりはせぬかとそれを嘆くからではなくつて、相良を思つて、惚れて了つて、其愛の人

たる庄兵衛が他の女と關係したそれを知つたからである、然う思ふと、自分は如何して其樣に心弱くなつたか、心が亂れたか、意氣地が無くなつたか、口惜しくつて溜らない、口惜しい涙と嫉妬の涙と、此二つの原因から涙が湧いてくるのである、終には我知らず、

『噫どうして斯う意氣地が無くなつて了つたらう、吾身で吾身が判らなくなつて了つた！』

と溜息ついて獨り言。

暗闇裡でかつ子は獨り泣ける丈け泣いてゐると、此時誰だか知らぬ人の聲がした、かと思ふと其人は暗い室内へヅカ〳〵と入つて來た、ヅカ〳〵入つて來た筈、其人は餘人でない政治郎、聲をかけて、

『オヤ、かつ子さんぢやないの、如何したんです、燈火も無い眞暗なところで、而して貴女泣いておいでゝすね？』

かつ子は吃驚した、吃驚してドギマギして、泣いた容子を見せまいと取繕つたが、政治郎は無頓着に續けさま、

『イヤ突如入つて來て御免なさい、僕は親父は最早場から歸つてゐるかと思つて來たんです、或婦人が晩餐に親父を招くといふので、其言傳を賴まれて來たんです。』

此へ女中が洋燈を持つて來て、卓の上へ乘せて其まゝ引下つて了つたが、廣い此一室は洋燈の穏かな火先で悉皆明るくなりました。

かつ子は辯解しやうと、

『何でもないんでござんす、只一寸した事なのです、生來厚顏やでござんすから氣になることはありやしません。』

見るとかつ子は何時の間にか、眼を乾かして、身體を整然として、顏に微笑さへ浮べてゐる、其雄々しく立派な容體、相も變らぬ健氣さだ。

政治郎は暫らくの間かつ子を凝視つてをりましたが、直ぐと父の事を考へ出して、而して顏に嘲蔑と憐憫の色を見せて、

『又親父でせう、親父の事で貴女は心配をしてお在のでせう、エ？』

かつ子は圖星を指された、然うでないと辯明をしやうとしたが、哀しさが籠上げて、涙が自然に眼瞼へ湧く、言葉さへも直と出ない。

五

『眞に御氣の毒です、だから私が平常から云はぬこッちやないんです、全體貴女は親父を買被り過ぎておいでなさる、終局には飛んだ業に遇ひなさるよ、親父の喰物にされて了ひなさるよ、屹度請合だ。』

政治郎が斯う云つてゐる内に、かつ子は幸吉を引取るに就いて金が要つたときに二千圓政治郎から借りたことを思ひ出した、而していつか一度相良家の、庄兵衛の今迄の身上に就いて聞いて見たいと思つて居たことを考へ出した、さうだ恰度宜い、今日は一つ悉皆訊かう、第一訊いて置かなければならないと、かつ子は口を開かうとしたが、聞出すのが餘り面白い事でない、それに庄兵衛と政治郎の間柄が如何なつてるか判らないから、餘り他人の事に立入つてもと、明白地に言出し兼ねて、寧そ話を遠廻しにと、先づ借りてる金子の事から話出した。

『そりや然うと、日外御借り申したお金も未だあの儘になつてゐて、誠に何も濟みません。』

『何豈ありや決して御心配には及ばんです、都合の好い時でよろしいですよ、そりやさうと僕の小弟は如何なりました、化物小僧君は？』

『そのことでござんすが、實は私も幸ちやんには困つてゐるのでござんす、未だ幸ちやんの事は親父さんには一と言も御話仕ませんが、第一仕やうッたつて出來ませんあの風では、ですから些と身邊でも好くして、氣質も少し直して人並にして、人に愛想をつかされないやうにして、そして親父さんに御目にかけやうと、然う思つてゐるのでござんす。』

政治郎はかつ子の云ふことを聞きながら、ニヤ〳〵と笑つてゐるので、かつ子は氣になつてしやうがない、眼容に不審の色を見せたので政治郎は、

『僕は貴女は無用なことをしてお在だと思ひますね、そんな馬鹿骨を折つたつて、それを買つてくれるやうな親父ぢやござんせんわ、今迄家族の人間のことが始終ゴッタクサをやつてるんですもの、大概な事は屁とも思ひませんや。』

家庭の事でゴッタクサがあると云ひ總て政治郎の言ひやうがそれと推しられたので、徐々庄兵衛の身元の話に立入つて聞出さうと、かつ子は話の端緒を切出した。

『アノ貴郎は早く阿母さんに御別れなすつたのでござんすか？』

『然矣、左樣さ顔も碌に覺えて居ませんね、母が巴里で亡くなつた時に僕は福山に居て、中學校に入つて居たんです、福山には加藤ッて醫師をしてゐる伯父が居て、僕の妹のきみは其伯父の厄介になつてゐるんですが、其後僕は妹には纔一遍逢つたきりです。』

『ぢやアなんですか、親父さんは其後再緣なすつたんでせう？』

此問に政治郎は少し躊躇して、平常は光澤があつて何にも考へてゐないやうな眼の色を、此時は少し曇らせた、

『然矣左樣、左樣再婚したんです、或官吏の娘で名はてふと云ひました、だが僕に取つては母といふのは名ばかりで、宛然仲の好い友達でした。』

政治郎は此時馴々しい風になつて、かつ子の方へ身體を寄せるくらゐにして、

『ねエ御覽なさい、貴女大概解つたでせう、親父の親父たるところは……、僕の親父は別に人並外れて惡い人ぢやない、ないがだ、金錢の事となると、肉身の女房にしろ子供にしろ、身邊のもの一切合切、親父は之を犧牲に供するのを敢てするです、金錢に比べると外のものは第二に置くです、エ？解りましたか？　尤も親父が金錢を好くのは、世の所謂守錢奴のやうに好くのぢやない、穴藏へ仕舞つておいて悅ぶのぢやない、親父の好くのは金錢の力で、其力で贅澤や愉快や其他有ゆる權力能力が振舞へる、其力を有つてるから好くので、而して然うなると其金錢の出どころや此を作る方法には別に厭目はつけないです、何でも金さへ作らへれば宜い主義なので、要之先天的稟性ですね、どうもはや仕方が無い、金錢の爲には眼中人間なし、僕であらうが貴女であらうが、誰彼構はず賣ることは屁とも思つてをらんのでさ、人間を品物と同樣に心得てるのですから、金の爲には良心も無くなるんでさア、分別を忘れるんでさア、片時も金の夢想から離れない、要之一種の金錢狂ですね……。』

今政治郎に話されたことは、かつ子も成程然うだと思つてゐたことで、政治郎の云ふ通りだ、かつ子は一々點頭いて聞いてゐた、噫矣金錢！　人を腐らせる金錢！　世を毒する金錢！　人を刻薄にし頭腦を凋萎せしめる金錢！　他人の善心好意を驅逐し親愛の情を傷ける金錢！　人間界の總ての殘虐の事汚穢の事有らゆる罪、それは皆金錢が誘惑して來るのだ、何といふ恐ろしいものだらう！　厭ふべき惡むべきものだらうと、物事に眞直で心膽の高尙なる女丈夫かつ子、今更ながら金錢を呪ふのを禁じません、噫矣若し自分に力があるならば、金錢といふものを悉く破毀し盡して、此世界から絕滅させて了ひたい、此世界の健全を保たう爲めには、此の一擧より外はないと、かつ子は熟々と思つてみた。

六

心裡に茫然といろ〳〵の事を想出しながら、少し沈默に陷つてゐたかつ子は、更に又勢ひの無い言惡さうな聲音で問返した、

『では親父さんは再緣なすつたんでござんすね？』

かつ子が斯う政治郎に確かめるのは、誰からだか覺えてはゐぬが其樣な話を耳にしたことがあるからだ、山屋町に住んでゐた時、同じ建家內へ新規に引越して來た相良の身に就いて、種々なことを聞込まぬではなかつた、相良といふ人は金の爲に結婚したのだとか、亂倫なことがあつたとか、姦淫を行つたとか、いろ〳〵な風說を聞いたことがあるから、それで今政治郎に念を推したのだ。

政治郎は少し小聲になつて、不本意らしい色で續けて、

『おてふといふのは僕よりなんでも二つ三つ上の女でしたよ。』、

とこれから、云ふともなく云はぬともなく、順序も立てず纏まりもせぬ、不得要領な談話をポツポ

ッといたしたが、かつ子は聞きながら前後を照り合せて、考へては合點をする、政治郎の云ふことは庄兵衛の過去の惡い外聞の事ばかり、宛然他人の事を話すやう、嘲けるやうな誹るやうな、それを平氣で喋つてゐる、して見ると庄兵衛父子の間柄は全く面白くないのだなと、かつ子は思つたのでございます。

斯くしてかつ子は遂に庄兵衛の身上話を政治郎から引張り出したが、聞く事毎に怖ろしい恥づべき不倫無道のことばかり、淫慾と金慾、其中にも金錢の爲に働いた事の猛烈なのには、流石のかつ子も言ふところを知りません、噫矣金錢！　帝王的金錢、神的金錢、金錢の前には血も涙も廉恥も人道も無いのか、何たる惡魔、何たる鬼、何たる蛇かと、かつ子は只管に驚き呆れて、其大惡魔の爪牙にかゝつてるのを思つて、思はずも悚然、身裡に粟の生ずるのを禁めません。

政治郎は言葉の終りに、

『御話すればマア其樣なもんです、考へると、貴女が御氣の毒でならんから、實際を御耳に入れて置くこと仍つて件の如しです、だが貴女、親父に對して腹を立つちやア不可ませんよ、腹を立つたところで損をするのは貴女ばかりです、泣かなくつちやアならないやうになるのは貴女で、親父は平氣でをるんです、宜うございますか、これで能く御了解になつたでせう、何故僕が親父に一文の金だつて貸すことを好まぬといふ理由は。』

かつ子は返事をしやうと思ふが、咽喉が扼められ胸が詰つて一ト言も口へ出せません、政治郎も永居は恐れ、こゝが切上げ時と起上つて、傍にあつた姿見鏡に向つて、容振を直して、それから又一寸かつ子の前へ立戻つて、

『此樣な事を餘まり心配すると、それこそ疾く年齡をとりますせかつ子さん、僕なんかは最早チャンと決めて事を行つてるから安心ですわ、女房が死んでからといふもの悉皆悟つてゐるから、愚な眞似はしませんや、ところが親父に至つちやア何にも斯うにも仕樣がない、頭腦に道德の觀念といふものが皆無なのだから、矯りッこはありやしませんハ、、、。』

これで政治郎はかつ子に握手して行かうとしたが、握つたかつ子の掌は大層冷たうございました、

『ぢや御暇します、親父は又何處か彷徨歩行いてゐるんだから、待つてゝも駄目だ、左樣なら・・・、併しかつ子さん、貴女決して哀しいと思ひなさいますなよ、心配したつて駄目ですわ、一體健固した御氣質なんだから、嘆くのは虚でさア、最早斯う御話をしたから騙されることはなし、其御意で御在たら宜ございます、騙されないやうな事實を知らせて上げたのだから僕は貴女に禮を云つて貰はんけりやならんアハ、、、。』

政治郎は歸りかけて戸の所で又立留つて笑ひながら、

『爾う〳〵、肝腎の用向を忘れてゐた、十條夫人が親父に今夜晩餐に來てくれといふことですから、

親父が歸つたら爾う告つて下さい、貴女御存じでせう十條夫人を、ソラ、さるやんごとなき君（譯者云ふ奈翁帝）に一夜の愛を十萬圓で捧げたといふので有名な女でさア、其女の所へ招ばれて行くといふと御心配のやうだが、親父には其樣な金は出せないし、有つてたつて出すやうな親父でもあるまいから心配は要りませんわ、、、、。』

政治郎は到頭行つて了つた。

七

跡にかつ子は只一人、靜まりかへつた此廣い室に、身動きもせず茫然自失、只眼を大きく開いたまゝ、洋燈の光りを見詰めてをります、宛然蔽せてあつた幕布が今日一時に取除けられたやう、今迄成たけ明瞭知りたくないと思つてゐた事實、如彼か如此かと打震ひながら心に疑つてゐた事實、それが今一時に遠慮會釋もなく有の儘酷たらしくも眼の前にさらけ出されて了つたのだ、今かつ子の前には相良庄兵衞の正味正體が顯された、唯金錢より外に魂の底に何にも無い人といふことが判つて了つた、彼れ庄兵衞は子を賣り妻を賣り、其他手裡に落ち來るものは何物を問はず、賣ることを厭はぬのだ、彼は己の身さへも賣らう、此自分も賣られるに相違ない、兄も賣られるに相違ない、總て斯う賣つた人々の心と腦漿を材料にして必定金幣を鑄つだらう、彼は唯只金幣の製造者、あらゆる人あらゆる物をドシ〳〵熔解爐へ打込んで、金銀の貨幣を造らうとする人間に相違ない、噫矣金錢！　恐ろしの金錢！　人を汚穢にし物を呑滅する金錢！　とかつ子は熟々思案して、恐怖と憂悶に堪へません。

聽てかつ子はいかにも腹立たしげに起上つた、ア、可厭だ、怖ろしい、最早終了だ、此上片時も彼んな男とは一緒に居られぬ、此上愚圖々々してゐては恐ろしい目にあふは定、疾く此家を逃げねばならぬ、一時も猶豫はならぬ、逃げるのも近所は駄目だ、遠方でなければならぬ、さうだ急いで東歐へ駈つけて、兄に逢つて話をして、兄にも手を退かせやう、夫よりも先づ以て自分の姿を隱さにやならぬ、爾うだ少しも猶豫は無い、急ぎに急いで出てゆかう、今時計は六時前だから、馬港行七時五十五分の急行には間に合はう、斯うと判ると顏を見るのも不快の沙汰、是非此汽車に乘らねばならぬ、馬港で乘船前何かの買物は出來やう、荷造りといつても何にも要らぬ、着替の一二枚もあれば可い、さうだ、大急ぎに仕度をしやうと、アタフタ荷物を集めたが、もの〻十五分とかゝらぬ內に、仕度は悉皆出來上つた、が卓の上を見るといふと、調べ物の仕懸けたのが其まゝになつてゐる、鳥渡其方は見はて見たものゝ、イヤしかし些の事でも起つ鳥跡を濁さずだと、良い世帶持の癖があるかつ子は一々叮嚀に書類を揃へ始末して、卓の上へ取纏める、このために、數分間暇取つたが、此間に初めの熱情とした熱情は稍々落着いてまゐりました、そこでかつ子は全くの自分に立復つて、心を落着けて室に最後の

一瞥を與へて、さて愈々此室を出懸けやうとしてゐると、途端にやつて來たのが書生、新聞や手紙の一と束にしたのを持つて來て、かつ子に差出した。

手ッ取早く表書を見てゆく内に、手紙の中に兄からのが一通入つてるのを發見した、其手紙は今兄が銀行支店を設ける用で逗留してゐる玉津から出したものだ、かつ子は後で汽車へ乘つてから緩くり讀むつもりで、今はザッと大略丈けを讀んでおかうと、洋燈の側へ突立つたまゝ、大急ぎで目を通すと、手紙の文句が緊要な言ばかりで、宜加減に讀んで了はれない、そこで卓の前へ座を占めて、罫紙十二枚もある兄の手紙を、心を入れて讀んでみた。

敏之の手紙は景氣の好いことばかり書いてある、先づ妹から寄越した過日の手紙に向つて禮を述べ、それから東歐に於ける事業は萬事着々と運んでゐること、即ち共同汽船會社の第一回營業成績は非常な好果を現はしてゐること、新規に開始した航路からも速力の疾いのと設備の好いので十分な收入を得てゐること、カルメル銀山有望のこと、附近及沿岸未開都市の勃興及其發達のこと、人口增加のこと、新道路開設のこと、新鐵道敷設のこと、新石炭山發見のこと、其他萬事非常な盛況、然らざれば有望は疑も無いと記述して、終りに、斯く萬事好都合に運んで來たのも、おまへの助力と引立が預つて力がある、有難い事は片時も肝に銘じて忘れないと、斯ういふ文言でございます。

サア少し違つてきた、どうしたら宜いのだらう？

All mighty dollar!!

八

かつ子は手紙を讀み終つて卓の上へ擴げたなり、眼を再び洋燈の方へ向けて、默想に沈んでゐたが、次いで其眼は機械のやうに、壁に懸けてある以前兄と東歐の未開地に旅行中書取つた荒果てた景色や作らへたいと思つた道路や家や其他の計畫の圖案に回はつて、熟々とそれに眺め入つてをりました、兄の手紙に由るといふと、是等の荒はてた地は今は文明の曙光に浴するに至つたのだ、盛に開發されてゐるのだ、自分が旅行の時眼のあたり視た是等の未開地は今悉く開發されて、何の位の慶福となつたらう、自分が夢想してゐた丈け其光景が眼に見えるやうに思はれる、種々の工夫や勞働者が働いてゐる機械の音が耳に聞えるやうに思はれる、今迄永い眠に就いてゐた是等の古い國土に、今漸く文明の曙光が導かれたのだ……と、かつ子は如此なことを思つて、そんならそれは何の力で出來たかと考へてゆくと、それは一に此金錢といふものゝ力だと、急に合點せぬわけにはいかなかつた。

成程金錢が唯一の肥料となつて、振蒔かれて、明日の人道界が發芽して來たのだ、成程考へると庄兵衛さんも屢く云つてゐたことだ、何事も投機が原理だと言つてゐた、投機といふことが無ければ日進月歩の大事業も生れ出ぬこと恰も淫慾といふことが無ければ子供が生れず人種が繁殖せぬと同一理だと云つて居た、此人間情熱の迸るところ、この下卑な性慾、畜生的の情慾、それが無ければ實際人

間の種子は絶滅して了ふだらう、兄敏之が遙々東歐に在留して孜々として事業に忙殺されつそれで成功を謠ひ愉快を覺えてゐるといふのも、由來巴里に金錢が雨のやうに降つて湧いて、投機・企業熱を發奮させて、萬事萬物を發醸せしめる、それが原因となつたのだ、其種子から作物が生てくるのだ、一方金錢は人を荼毒し世を破壞するものではあるが、他方では總ての社會的耕作の誘發物となつてゐる、成程金錢は糞土同樣、不潔物には相違ない、併し此不潔物が無かつた日には、如何大事業を耕作しやう、如何立派な花實を結ばせやう、人と人との距離を近づけ世界を平和ならしめ得やう！……。

金錢を呪つてをつたかつ子、今は同じ金錢の前に、嘆稱を禁じなくなつて了つた、噫、山を開くのも海を埋めるのも、此地を人間を住むやうに開拓するのも、一にも二にも金錢の力だ、一方總ての不幸と罪惡を生む金錢は、他方には幸福を生む唯一の代物となつてゐる……、とつおひつ考へ出した彼女は、今は如何して可か判らない、否東歐での事業の成功が兄の手紙の通り斯くも疑ふべからざるものとなつた以上は、最早此巴里を去るに及ばぬ、善い方にも惡い方にも、戰ふ場所は此巴里だ、然うだ依然此地に留まらうと、かつ子は遂に決心を飜へして、新らしい覺悟に心を定めたが、胸の動悸は容易には鎭まらないでをりました。

かつ子は起上つて、隣りの芳村家が見える窓の硝子戸の前へ來て、額を硝子へ押着けて熱くなつたのを冷しながら、芳村家の庭園を見下ろした、最早今悉皆暮れて了つたので四邊は眞暗、見ると相變

らず使ひ惜しんでゐるのと燈火を儉約する爲とであらう、芳村の住居の室は何の間も此の間も悉く締立てられて、狹い懸離れた纔た一ト間だけ火光がさして居る、が其光力も至つて弱く、薄い唐縮緬の窓布の影に映つて見えてをるばかりだ、母子は何うしたかと見るといふと、母夫人は手づから何やら繼ものをしてゐるらしく、娘有子は水彩畫みたやうなものを繪どつてゐたが、其手つきは疾くつて粗略で、成丈け早く餘計作らへやうといふ鹽梅、之は定めて內職にして秘密で世間へ賣らうといふ、わけかと推しられまする、此頃母子に取つて不運なことは、無けなしの馬車の馬が病氣に罹つてゐることで、病氣だから仕方が無いのに、虛飾一方の母子は步行いて市中へ出るのを外聞が惡いと思つてか、

又他から馬車を借りるのも好まぬといふ爲か、半月許り禁足同樣、外出をせぬでをりまする、外飾を飾るとは云ふ條斯んなに强い痩我慢をするといふ、寧ろ感心の外はございません。

さて斯んな不運不幸の中に、夫人をして唯只便りにして由て以て勇氣を保たしめてゐるのは外でもない株券、萬國銀行の株の騰貴、昨今の相場で所有株の代價を勘定してみても、最早大分の利得になつてるのだから、此上騰つてゆく內に直頃を見計つて賣つたなら、何んな高になるか知れない、雨のやうに黃金が降つてくるは必定、然うなつたら悉皆新らしい衣裳も作らへやうし、月に三四度は客招待も催ほさうし、さうだ香物と茶漬飯ばかりで居なくともやつてゆけると、夫人は都合の宜いことを當にして考へてばかりをりまする、有子も、今迄は自分は良人などは有たぬと諦めてをつたのが、此頃は母が結婚の事を話出すと澄して聞いて、先時の景色は何處へやら、好い良人を有ちたいし、子供を有つてみたくもあり、此樣子ではそれが出來ると、嬉しいのか心配のか、少し手を顫はしはしてゐるが、默つて母の云ふことを點頭いて聞いてをります。

九

御話は芳村母子のことになつて了つたが、さてかつ子は、小さな洋燈の下に稼いでゐる母子の容子を熱々と視てをつたが、ア、可憫相に、あの母子も如彼やつて神妙に稼いでゐるが、それも矢張金の爲め、株の騰るのを當にしてゐるに違ひない、未だ金の顏を見たのでなく、株が騰つて大金が入ると いふ當だけで、既に如彼やつて幸福らしく暮してゐる、本當にいぢらしく可憫相だ、若し株が騰つて其爲に少しでも彼の人達が金滿家になれるなら、相良さんは福の神、二人に取つて功德である、と斯んなことを考へながら、猶ほ芳村家の庭の方へ眼をやると、もう其邊は暗がりで、何一つ見えません。

此時かつ子の腦裡に、養育院の事が偶然浮んだ、昨日は庄兵衞の誕生日なので、相良の名前で養育院へ玩具や菓子やを寄附したが、之を受けた兒童の喜悅、其騷がしさッたら無かつたのをかつ子は思出したので、獨り笑ふのを禁じません、それから又幸吉も此一と月來評判が少し好いといふことなので、かつ子も嬉しい心地がする、幸吉で思出したが、自分が今しがた考へたやうに、若し此家を逃げて行けば、幸吉も其まゝにしなければならなかつたが、其處に氣がつかなんだは失策、今迄折角苦心して此迄になつたのに、若し自分が居なくなつたら如何だらう、それにつけても自分には重い責任があるのだと、彼れ此と思ひながら、暗黑の裡に眸をやると、大な樹木の陰森としたのが目に見える、其光景がいかにも靜寂だ、芳村母子の一間には貧弱な洋燈が其まゝ點いてるが、宛然遠くの星光のやう。

かつ子窓のところを動いて又元の卓の前へ來たときに、寒いと思つて思はずも身顫ひした、オヤ如

何したんだらう、風を引いたかしらん、冬だつて火が無くつても居られると自慢してゐる自分が、意氣地が無いと、かつ子は自分で笑つてみる、それでも暖爐へ火を熾さうと、見るといふと火種が無い、女中を呼ぶのも可厭だと思つて、自分で焚きつけやうとかゝつたが、これが中々の骨折だ、第一生憎焚付木が無い、仕方が無いから古新聞を取出して焚付木代りにして、どうか此か火を熾した。

此んな事をしてゐる内に、かつ子は先刻來の事を全く忘れて、又更に新しい希望が出て來たやうに思はれた、此から熟々と過越方を考へる、將來を考へる、庄兵衛の事を考へる、二人の間のことを考へる、彼女は暫し暖爐の前に默想に耽つてゐた。

やがて戸外から歸つて來た庄兵衛、見るとかつ子は側目も觸らず兄の依頼の調物に從事つて、筆を執る其手も確に、將に出來上る迄になつてゐる、庄兵衛の戻つて來たのを見て頭を擡げて、至つて落着いた風をしてニッコリと笑ふと、庄兵衛は美しく且つ白く輝いてゐるかつ子の頭髪に口唇を接けました、かつ子は、

『方々御廻はりになりましたか？』

『イヤ幾ら駈けづり廻つても最早宜いと云ふことなし、實に閉口極まる！　今日は工務大臣に逢ひ、其から到頭由利と一緒になつて、そして再び大臣のところへ行つたところが、大臣が居らぬで秘書官ばかり、併し此方の願出の一件に就いては確たる約束をしてきたから、先づは好都合さ。

庄兵衛全く今日は忙しかつた、三田夫人に別れてから彼處此處へ奔走し通し、其仕事に熱心なのは、全く感心の外は無い。

かつ子は敏之から來た手紙を渡して見せたが、庄兵衛は固より大喜び、もう遠からぬ内に萬事大々的成功を見るといふのだから、雀躍をせぬばかりだ、かつ子は戯談半分に、

『これからは私が側に付いたきりで、貴郎が餘まり圖に乘つて飛んだ事でもなさるといけませんから確固監督つてをりますよ、よござんすか、しかしそんなに嚴しくは致しませんから御安心。』

と、それと云はねど一の警告。

『そりやそうと今しがた政治郎さんが御入來になつて、十條夫人に言傳を頼まれたが、貴郎に今晩々餐に御入來になるやうにと申して居られました。』

『さう〳〵、手紙を貰つて居つたつけ、忘れてゐた、これから私は行つてくる、併し斯う忙しくつちや行りきれない、全くだ！』

庄兵衛は又もやかつ子に接吻して出掛けて參る、かつ子は送り出して元の座へ戻つて、又も調べごとに取かゝつた、見ると顔にはいつしか屈託の色も無く、笑さへ含んでをります、あゝさうだ、考へて見れば何でもない、ほんの友達の間柄、其友達が他の女に關係しやうと何うしやうと、搆ふことは無いのである、それを嫉妬らしく兎や角う考へる、これは此方が惡いのだ、惡いどころか此身の恥

辱だ、自分はもつと心を大きく、もつと高く留らねばならぬ、肉慾といふことを離れて忘れて、精神上の博愛でもつてゆかねばならぬ、自分は相良を思つて居る、思つてるどころか愛してゐる、併し其愛してゐるのは、淫慾の爲ではない、其剛毅其勇敢、其慈悲其熱誠のためである、相良が奮鬪活動の人物で、現に東歐に新世界を開發し、生を作る其事業から、寧ろ心に慕つてゐるのだ、惡いところは無いとは云はぬが、それは見るには及ばない、善い側面を見ればいゝ、又しても愚であつたと、かつ子は心に思ひ復した。

俄景氣

一

千八百六十七年の萬國大博覽會が稠人歡呼喝采の裡に燦然たる光輝を以て開會されたのは其年の四月一日でございました、佛帝國の隆盛が頂上點に達したのも其時で、此時の巴里といつたら眞に世界の燒點となつたのでございます、市中は何處へ行つても眼覺るばかりに美しく裝飾され、彩旗提灯幔幕飾物、至るところに歌舞音曲、家々には宴飲饗應が催ほされる、從つて淫樂の街ともなつたのでございます、凡そ此時ほど世界から多くの人が集つたことはない、各國の帝王、皇族、貴族、紳士、淑女、堂々と鹵簿を造つて、燦爛たるチユイレリ宮指して乘込んで參る偉觀壯觀、形容に言葉がないのでございます。

相良庄兵衛が兼て着手してゐた萬國銀行の大建築の竣功式を威儀堂々と執行つたのは、恰度此大博覽會開會後十五日目でございました、英町なる銀行の建築は、棟上げにかゝつてから俄々六箇月で造上げたので、日に夜を續ぎ一時一刻も休まず、職人を督勵して、遂に此かる短日月に工を竣へたので、こんな殆んど神業とも思はれる早業は巴里でなければ出來ぬ事、何時の間に出來たかと思ふ其巍々堂々たる外側面は、費を盡し華を競つて、寺院か大音樂堂かと惑ひさうな壯觀、通りかゝつた人は誰一人立留つて見上げぬものはないのでございます、內部へ入つて見るといふとこれが又一段と驚くほどの偉觀、壁から鴨居、見渡す限り黃金色づくめ、正面の名譽大階段を上つて二階へ行くと、其所は大會議室、これは總紅と金色で、恰度國立劇場へ行つたやう、それから何の室も何の室も美事な絨氈、見る眼も眩い程の窓布家具裝飾品で充滿て、田舍漢ならば全く腰を拔かすだらうと思はれるくらゐ、下の方地下室へ行くと此室は總體金庫になつてゐて、ビカ〳〵した大小の金庫がヅラリ並んで、一々錠前が下してあるが、金庫の戸口の眞中には小さな窓口みたやうな深い口があつて、其處は厚い硝子になつてゐるから、中に入つてゐる無數無量の金銀貨幣が誰にも見えるやうになつてゐる、これが本當の無數無量なら大したものだが、樂屋を破つていふと表面見えるところ丈けへ積並べて

あるのだから見懸丈の無數無量だ、第一場所柄だし博覽會への道筋だから、有ゆる國人は其帝王と共に必定銀行の前を通つて參る、此方は是非通つて貰ひたい、通つて大した景氣を見て貰ひたい心だが、其實これが陷穽が作らへてあると同樣、外側は立派で中は伽藍洞、實は中々怖ろしいのでございます。

庄兵衛のと定めてある一室は就中美事なもので、路易十四世式の、金泥置いた木材で出來て、伊太利製の天鵞絨で張つめてある器具造作、其處に彼れ庄兵衛は帝王のやうに氣高く大容に陣取つてをりまする、銀行の使用人數は其後大變增加して、今日では四百人以上になつてるが、何しろ給料や手當を割好く與へてあるから、庄兵衛の人望は大したもの、此一軍隊を統率して專制國の王樣のやうに振舞つてるが、皆能く敬ひ尊んで職務に就いてをります、庄兵衛名義は支配人に過ぎないが、實際からいふと重役以上の威權を有つて居つて、取締役や頭取は只盲判をつき唯だ員に備はつてゐるといふだけ、何でもかでも庄兵衛一人で自由勝手に仕てゐるといふ姿だから、心配なのはかつ子、側に見てゐて片時も安い心が無い、一人勝手にさせて置いたなら何んな事をするかも判らぬ、間違つたことがあれば直に突込まなければならないから、庄兵衛の爲ることなすことかつ子は油斷なく注意して居ります。

一體かつ子は銀行の店を此樣に立派に大業にすることは好まなかつたので、方針に於ては立派にするだけ夫丈け宜いことは認めて居るが、此樣に度を外れて不眞面目に立派に過ぎるのは信用上反つて宜くないと、かつ子は云つてるのでございます、で其事を庄兵衛に話すと、庄兵衛は答へて、此職業も醫師と同じで、玄關の飾が必要、立派なところを見せつけて客の度膽を潰させ眼を晦ませて、尊敬をさせれば信用も增してくる、五圓預けやうといふものも自然に十圓出すやうになる……と、云はれてみるとそれも然う、鍍金でも天麩羅でも、キラ〳〵光つた方へは人が向く、實際それに相違はない。

庄兵衛の言つた其通り、銀行が新しい建物になつてから、來るわ〳〵千客萬來、今迄矢野が「希望」新聞紙上筆先をすり切らして書立てた其効能を千萬倍にした程に客がやつてくる、巾着錢を溜めた田舍の婆さん、胴卷を肌身離さぬ地方の爺さん、毎朝市中の各停車場へ下車する老若男女、新銀行大戸の開くのを遲しと待兼ねて押して參り、歸途には此樣な大銀行に自分は金を預けてあるといふことを故郷への自慢がてらに、いそ〳〵として歸つてゆくといふ有樣でムいます。

二

實のところかつ子に取つて困つたことは外でもない、銀行が別の場所になつては、今迄の、住んでる家と店と一緒になつてゐた時のやうに、始終側に居て氣を付けることが出來ない、これには少し當惑したが、仕方が無いからかつ子、何とかかとか言前を拵らへては、時々銀行の方へ出懸けていつてい

ろ〳〵氣をつけて見てをります、此頃は一日の大部分を、唯一人で山屋町の例の繪圖室で暮してゐるから、晩方にならなければ庄兵衛に逢ふことが出來ない、庄兵衛も、山屋町の家に自分の居間を舊の通り定めてはあるが、階下の間は殘らず締めたきりにしてあり又二階の室々も大概は使はないで置いてある、家主の織戸公爵夫人は自分の所有家に在つた忌はしい金錢商賣の銀行が外へ引越していつて了つたので、ノウ〳〵して其からといふもの又再び人に貸さうともせず、あとは其まゝにしてあるが、金が有り餘るとは云ふ條貸せば大層な收入になるのに、誠に勿體ないことでございます、さて大きな家が全空虛になつて了つたのだから、小さな音響でさへ家中へ響くほどの靜かさで、宛然墓場へでも行つたやう、此が昨日迄賑かな銀行であつたかと考へると、大變な變りかたでございます、其樣な工合であるからして、かつ子は何となく時間が永く、捗々しく經たぬやうに思はれてならないが、併し相變らずの勉强で、瞬時も手を明けてはゐず、始終兄から送つてくる書類を始末し集錄し、又は調べ物をいたしてをります、ツイ氣が付かずに時々仕事の手を止めて階下の方へ耳を澄して聞いてみる、依然銀行があると思つて、それとなく模樣を聞かうとするが、其寂寞森閑として人の咳聲一つ聞えず、室は悉皆締切つて眞暗になつてゐることを考へ出して、然うだつた銀行は引越したのだつたと氣がついてみるのでございます、四邊が靜閑なので頭腦は自然と英町の銀行の方へ行く、英町へ引越したは宜いが何んな風にやつてゐるだらう、何か又不正な事を行つては居ぬだらうかと、かつ子は今更に心配ばかり。

此頃又一つの風評が廣まつた、未だ茫然した眞の噂丈けに過ぎないが、相良庄兵衛又もや銀行の資本を增加しやうとしてゐるといふ風評、卽ち現在の一億圓を一億五千萬にしやうといふ計畫でございます。

前申上げた通り、大博覽會開設と云ひ當時佛蘭西帝國は那翁三世陛下治世の下に隆盛の頂上點に達した時で、人の心は悉く刺戟されてをります、官民各種の大工事大事業は續々と企畫される、巴里の市區は大規模を以て改正される、金融は非常な勢ひで活動する、奢侈は著しく增進する、彼れは是一般投機熱は非常に高まつて參つたる狀況、かういふ風潮には猫も杓子も浮れ出さずには居られません、各自何か一ト儲と、負けず劣らず噪戲ぎだす、有金をさらけ出して一か撥かの骰子の目を振つて見る、一攫千金を夢みてばかり、天空を見ると大博覽會の旗幟は其處此處に太陽にきらめき渡つて翩々としてをりますし、イルミネーションは滿天を焦がすばかり、音樂は至るところに人の心を醉はせてゐるし、全市の町々は何處へ行つても此處へいつても、蠢爾と人の洪水で漲るやう、市人は老若男女御祭酒に陶然歡喜、譬へばこれは寂光の都喜見城の樂みもかくやとばかり、所謂千貨萬貨の御寶の數をつらねて、天に色めき地に響くといふ容體、金なんぞは幾干でも湧いてくるし、榮耀も榮華も此上は有るまいと思ふばかりの光景で厶います、斯うなると人間は皆程度を外して、狂亂的にな

つて隨分淫樂の風も盛に行はれたが、巴里が世界の天國的歡樂土と世界中の人々に云はれるやうになつたのも、實は此時からなのでございます。

此の如き趨勢に乘ずることを知つたる庄兵衞、こゝ大に利用すべき機運、懷中を空にしても借金を拵へてもやツつけやうと、有らん限りの金を廣告に使ふ、ヤイ〳〵矢野を鞭撻しては新聞へ書立てさせる、諸新聞へ金を振撒いて提灯を持たせる、博覽會の開會の當日から巴里市中の諸新聞は寺の鐘が鳴るやうに萬國銀行の爲に筆を揃へて書立てる、それも成たけ人の注意を惹くやうに、奇拔極まることを雜報にまで書立てる、それから矢野は豫てから計畫の廣告案内的小冊子を編纂して、何百萬となく撒布する、市中は勿論國中はおろか、世界各國へ撒布いたす、其から又社の支局を增設する、出張所を新設する、凡そ市といふ市には社の看牌を見ぬところの無いやうにする……、といつたやうに、非常に巧妙な廣告の行法、遂に「希望」新聞は大變な勢力になつて、政治上財政上日一日と國中に重きを致して參りました、さて重きを致してくると、今迄の通り內閣や大木の御機嫌ばかり伺つては居られない、それどころか今は漸次、反對の側に立つ、「希望」に反對に立たれては大變だから政府も自然氣が氣で無く、注意を拂ふやうになつてきた。

こんな優勢な機關を有つてゐるのだから溜らない、銀行が資本を增すといふ噂は忽ちに四方八方に廣がつて了ふ、サア取引所社會は大騷ぎ、株熱は彌〳〵增長する、高いも低いも尊きも卑しきも相場に手を出す、萬國銀行株は常態を逸した氣配を顯はす有樣、斯うなると人々は銀行が設立匆々好成績を擧げたことを喋々する、意外の好配當のことを口にする、其他銀行が着手した共同汽船會社といふ有望な事業のこと、既に額面以上百圓の高價になつてゐる同會社の株、カルメル銀山の殆んど信ずることが出來ぬ程の莫大な發掘高、新石炭山の發見のこと、リバンの大山林のこと、新土耳其國立銀行創立のこと、其他いろ〳〵のことを囃し立てます、こんな事が氣勢を添へて、人々は彌が上にも狂せんばかり、此んな有樣だから資本の增加は怪しむに足らぬ、道理あることだ、未來は非常に有望だと、何處へ行つても此處へいつても談話は萬國銀行の事で持切り、殊に恐ろしいのは婦人達までが夢中になつて歡迎をすることで、裏店の山の神まで、寄ると觸はると此話「アラ貴方は萬國銀行の株を知らないの？　何うして？　これより好い株は世間にありやしないわ、銀行は大層儲かるのよ、是非買つて有つといでなさい、私の云ふことを信用なさるなら是非工面して買つときなさい……」と顏を見さへすれば人に勸める。

三

昨今庄兵衞は少し落着いて仕事をしたいと、人が來ても斷れと命じて、銀行內の例の贅澤な支配人室に引籠るやうに致してをる、此節庄兵衞の忙しさッたらない、朝未明から夜遲くまで、來訪客は引きも

きらず、門前市をなすといふ有樣、客の種類は固よりさま〳〵、各種の事業家、依賴者、嘆願者、媚を膝下に呈せんとするもの、眷顧庇陰を得やうとするもの、入り代り立代り、人間時めくときは皆一樣でございます。

七月の初旬の或朝のこと、庄兵衞殊更に仕事が忙しくッて溜らぬので、受附係に命令けて、誰に限らず其日は堅く面會謝絶といふことにした、然うとは知らないから、面會を求める人はいつもの通り黑山のやうに、受付のところへ詰めかけてゐる、庄兵衞は吾室に二人の主任書記を相手に、資本新規增加の方法に就いて種々と調査をいたして、彼れ此れと研究の果が、斯ういふ工夫にして新增加を實行したらばと、大略を考へた、其法方は外でもない、今度は一億を一億五千萬にしやうといふのだから、株數にすると增株數は十萬、此新規增加株の發行價格を一株に付八百五十圓として、今度は全額拂込、卽ち五百圓は額面に、三百五十圓は割增として受入れる、割當方は舊株二株に付新株一株……とかういふ風にすると、從來の株二十萬株は四分一卽ち百二十五圓拂込になつたまゝだから新株割增一株に付三百五十圓を二十萬株の未拂額の方へ向ければ、二十萬株は夫で全額拂込濟となる道理と、庄兵衞いろいろに考へてくると、段々腦髓が過敏になつて錯綜つて、解らなくなつてきた、イヤ〳〵未だそれでは足りなかつた、ハテナ如何したらばと、獨り頭腦を惱ましてると、前房の受付の所の非常な客の騷擾しさが益〻耳へ入つてくる、猶々頭腦がムシヤクシヤする、平常ならば有難い御得意樣も、今日は全く邪魔になつて癇癪が起つて溜らない。

すると偶然此處へ、小使の米本が一方の小戸を開けて入つて來たのを發見けたので、米本こそ惡いところへ打突つて好い面の皮、未だ何にも言出さぬのに、頭ごなしに怒鳴りつけられた、

『チヨッ、何だ、誰が來ても今日はいかんと斷わつて置いたぢやないか、解らん！　皆追拂つちまへ！』

米本は一向無感覺、平氣で言葉を打返して、

『ハイ、でございますが旦那樣、アノ、芳村伯爵夫人が御入來になりましたので、是非何卒取次いでくれと、私へ强つての御賴みで、他ならぬ方と存じまして ハイ。』

『芳村でもヨカラヌ村でも今日はいかん。』

庄兵衞不愉快にまかして此うは云つたが、又思返して不承々々、

『仕方がない、何の途何時迄も樂をしてゐるわけにはいかぬから逢つてやらう、併し正面の口から入れると人に譯るから、秘密で汝の入つて來た其小戸から案內しろよ、それでないと有象無象が宜いことにして、ゾロ〳〵後に跟いて入つてくるから。』

夫人を引いて逢ひは逢つたが、庄兵衞甚だしい不愛相、仕打も言葉使ひも暴々しい、殊に夫人今日は娘有子をも連れて來てゐるのだが、平日ならば妙齡の娘の前などでは笑顏をして優しく作る其庄兵

衞、今日は何處までも慳貪な顏容をして打解けない、漸く一緒に居させた二人の主任を側へ外させる事だけはしたが、依然佛頂面をして、腹裡には疾く母子を返して調べごとを續けたいと夫許りを考へてゐる。

『夫人、今日私は非常に用事が立こんで居りますから、御用は疾く仰有つて頂きます。』

平日と容子が變つてゐるから夫人は不審でなりません、元氣の無い夫人はいとゞ悄れて、オヅオヅと口を開く、

『オヤ、誠にとんだ御邪魔を致しまして、濟みません。』

いくら忙しいと云つても眞逆に起たせたまゝでも置かれないから、庄兵衞椅子を薦めると、娘の方が度胸がすわつて心に斯うと決してゐる爲か、第一に腰を懸けたが、母夫人は其まゝに言葉を續けて、

『貴方他ではございませんが、少し御相談を願ひたく上りましたわけあひで、手前一人では只々心配許り募りまして、如何いたしたら宜いかと、途方にくれまして、それで何卒御智慧を拜借いたしたく、出ました理由で……。』

と夫人はこれから、御承知の通り萬國銀行創立の時百株を買つたことから、第一回資本增加の時同株數を割當てられて所有株が二百株となつたこと、それが又第二回增加の時割當てられたのも取つて置きたいと引受けて、今日では所有株は都合四百株となつてるが、之が爲に拂込んだ額が割增も入れて八萬七千圓になつてゐる、最初百株申込んだ時には貯蓄の金の二萬圓を拂込に向ける積りであつたから勿論差支はなかつたが、此段々の增加に應ずる爲め、仕方なく大府の所有地所を抵當に入れて七萬圓を借入れて、其方に當てたといふことを話して、さて、

『ところがソノナンでございます今度其大府の地所を買はうといふものがございますので、で承はりますれば、今度又々銀行の資本を增加なさるといふことで、然うなりますと、私共の家產有ッ丈けは銀行の株に注込んで了ふといふやうな譯になりますので、實は其新規の增加のことは如何いふ事でございますか、一應承りたく、それで出ました譯なので……。』

四

不機嫌であつた庄兵衞、思ひもかけぬ芳村夫人の語り出に澁面を和げて、ア、可憫想に、古い名門の末路も此うなつては氣の毒千萬、かうやつて自分を信用し便りにして心配してゐるのかと、急に言葉づかひも優しくして、數字を擧げて說明した、

『御仰の通り、資本の新規增加を實行する積りで今其準備に取かゝつてをるのでございます、今度增加の資本は一株に付割增共八百五十圓で發行致します筈でございます、コーット、貴女は四百株を御所有になつてをるから割當株數は其半額卽ち二百株で、之に要する金額は二五の十、二八十六の十七と、

都合十七萬圓となりますです、けれども今度之を御拂込になれば最早それで從前の株共悉皆拂込濟となる勘定で、都合拂込濟六百株は貴女の御所有、確實なものになるのでございます。』

庄兵衞の說明は夫人にも有子にも判らない、そこで庄兵衞は重ねて說明して、割增の金額を從來の未拂込へ當てゝ、殘らずの拂込を終へしむる方法だと話しをすると、母子は大きな金額を並べ立てられたので吃驚して、少し顏色を蒼くした、庄兵衞の行法は例に由つて隨分無鐵砲の大ざッぱい、それをべラ〳〵說付けられたのだから、二人は只ハラ〳〵するばかりでございます。

遂に母夫人はオヅ〳〵と、

『今丈けの金子はマア何うか此うかなるだらうと存じます、大府の地所は先時には四十萬位の價値があつたのでございますが、今度の買人は二十四萬圓迄は出さうと申すのでございますから、前に其地所を抵當にして借りてをる金子を返すと致しましても、其殘金で今度の新規增加株に對する拂込を致すのは十分でございます、でございますが、然うするといたしますと、何しろ私の家の資產は殘らず萬國株に卸して了ふことゝなりますので、身上有ッ丈けを、言はゞ投機三昧に卸して置くといふ譯で、考へてみますと、心配にもなりますので……。』

見ると、夫人の手は震へてゐる、夫なり寸時默つてゐたが、其默つてゐる胸の裡に、夫人は種々の事を考へたのでございます、一番初に貯蓄の金を出して株を買つてから、增株の爲に地所抵當に七萬圓といふ金を借りた、それが今は地所を殘らず金にして、有ッ丈け株へ入れねばならぬ成行となつたのだが、それで宜いものか何うであるか、今迄は世襲財產として大切にしてゐた其地所を、今は全然手離すことになるのだが、之も成行で仕方がないか？　自體金錢に係かる職業は猶太人かなにかのする仕事で、我々貴族たるものゝ干與はるべきものでない、卑しい業であるのだが、それに今有ッ丈けの資產をさらけ出して干與はるといふ、考へると厭な氣もすると、夫人は胸の裡に此んなことを往來させてをりまする、母が默つて思案してゐるので、娘も矢張無言のまゝ、其他意ない鋭どい眼で、母を凝視てをりまする。

庄兵衞は相手を勵ます積りで、少し笑顏を作つて、

『イヤ御道理、併し夫人、貴女私を信用なすつて頂きたいですね、決して御心配は要らんですよ、只だ口で言ふのぢやござんせん、數字が何よりの證據でござんす、其數字に由つて御覽なされば、躊躇なさる必要は無くなつて了ひますです、マア貴女が私の云ふやうになさるとして考へて御覽遊ばせ、御所有の株數は六百株で、今度の拂込で全部拂込濟となるのですが、即ち初から御買求めに御仕拂になつた金額即ち元價の代金が合計二十五萬七千圓でござんせう、それが今日の平均相場は一株千三百圓でござんすから、それでもつて勘定すると、六百株に對する總代金は七十八萬圓となります、即ち貴女が御卸しなすつた金額の三倍以上になつてる勘定でございます、宜ございますか、ね、それで相場

は今日では千三百圓でござんすが、中々其んなこッちやア濟みません、資本增加はまだ此上、相場の騰貴を促すに定つてますから、年內に御所有株が百萬に達するのは明白な事實で、私は正に請合つて差上ます。』

默つたまゝでゐた有子、此時思はずも叫んだ。

『アラ阿母さん！』

母も我知らず。

『アラ百萬圓！』

百萬圓！　百萬圓！　百萬圓あれば山屋町の家邸抵當の借金も返へせて綺麗にすることが出來るといふもの、貧窶の垢も全く淸潔におとされるといふもの、詰らない癖我慢もするには及ばぬといふもの、娘も相當の準備をして良人を有たせて、往來を彷徨いてゐる乞食でさへ生へて喜んでゐる子供も出生、家庭の娛樂も得られるといふもの、羅馬で惡い氣候の爲に身體ばかり損めて碌に出世も出來ず詰らなく伸びずにゐる侭も伸びられるといふもの、其他生計向のこと何くれとなく、身分相當にいけるといふもの、それも金錢、此も金錢、百萬圓あれば自由自在、それは救世である、復活である、日頃の夢想の實現である……、と段々こんなことを考へて來た母夫人、心に何となく嬉しくなつて、それと同時に娘も定めて然う思つてゐるだらう是非然う思はねばならないと、有子の方を顧みて、

『有子や、和女は如何御考へだえ？』

五

母に問はれた有子、否告げられた有子、心中の滿悅に、輝く眼の色を態と消さうと、靜に眼瞼を合はせたまゝ、何言をも返事しません、すると、少し考へてゐた母夫人は笑ひ出して仕たり顏、

『然う〳〵忘れて了つた、和女は此事に就いては何でも私まかせにしておくと御言ひだつたッけね、マア和女の心も大概譯つてる積りだから、宜いやうに計ひませう。』

で恭しく庄兵衞に向つて、

『相良さん、斯う申しては失禮でございますが、貴方樣のことは世間でも大層な評判になつてゐて、誰一人御手腕に感服して居らぬものはないのでございます、然う思つてゐるのは織戸公爵夫人ばかりではございません、私の懇意の方は皆一同貴方樣の御事業に就いて感服いたしてをるのでございます、私が萬國銀行創立の時に、人に遲れず第一回の申込をいたして株主に加はつたことに就きましても、友人など皆私を羨ましがつてをりまして、私も何んなに鼻が高いかしれません、本當に彼の時に、他の品物を賣拂つても、猶且買つて置けば宜かつたと、思ひますばかりでございます……、娘も始終貴方樣のことを御噂申して、相良さんて方は何て偉い御氣特な方だらうッて、蔭ながら申上げて居り

ますので……。』

大變に褒立てられて、庄兵衞惡い心持は致しません、眼を自づと此若い娘の方へ向けたが、見ると此時の有子の風情、平日と異つて活躍して、元氣が面に溢れ出て、色こそ黄ばみ首筋こそ細過ぎ總體に色褪はしてゐるが、平時の有子でなく見えた、これも心の爲かもしれぬが、併し自分が骨を折つてやつて金が出來て、此憫れな娘が年頃日頃心の裡に欲しいと思つてる亭主を有つことが出來るならば、それは大な功德といふもの、自分も心持が好い譯だと、庄兵衞心に思つてみた。

こゝで双方寸時談話が途絶えてゐたが、母夫人は遂に起上つて、

『では相良さん、私は決めました、宅へ歸りましたら直に公證役場へ手紙を送つて、大府の地所を賣ることを承知いたしてやりませう、そして銀行の新株を頂くことに致しませう、マア運でござんすから、心配することも要りますまい。』

庄兵衞も起上つて、殊更に眞面目くさつて、

『運だつて、神樣が其運を向けて來たのですから、貴女は御安心なさるが宜いです。』

正面の入口から出すと押かけてゐる群衆が居るから、庄兵衞は第二の小戸から兩女を送り出した。

さて、引戻して室へ入らうとすると、其處に米本が、物を憚り〳〵、迂路々々してゐるのを發見けたので、庄兵衞、

『何だッ、又誰か來たのぢやあるまいな？』

『否々然うぢやアございませぬ、さうぢやアございませんが旦那樣、私些とばかり旦那樣に伺ひたい事がござんすので、御手間は取らせませんどうか少々……。』

庄兵衞室の内へ入つてゆくと、米本は入口のところへ起つたまゝ、恭しく腰を屈めてゐる。

『何、汝が用？　訊きたい事がある？　然矣々々違えねえ、汝も株主の一人だつたッけな、新株ならば取るが宜いよ新株は、金が無けりやア古道具を叩き賣つても引受けて置きなさい、折角割當てられた株だ、金が湧いてくるのだ、己は誰に向つても然ういふ意見を述べてゐる。』

『誠に御道理樣で、私も頂きたいのは山々でございますが、些と何うも荷が勝過ぎて齒に適ひませんで……、私も娘も其樣な大望は締めてゐるのでございます、最初頂いた八株は死んだ妻が遺した貯への四千圓で何か此か買求めたのでございまして、其後二度程資本が倍に增加の時には、折角割當られた株だと思つて買つて置きたかつたのでございますが、何分御金が自由になりませぬので、今日まで最初の八株のまゝ有つてをる次第でございます、此上最う慾張つたつて仕方がございません、私が貴方樣に伺ひたいと申すのは其事ではございません、實はソノ、所有いたしてをる八株を、今度賣却致したいと思ふのでございますが、如何なものでございませうか、一つ御考へを伺ひたいので……。』

『ナニ賣るッ！』

米本は戰々恟々最も丁寧に最も言葉を巧にした積りで、之から自家の都合を述立てる、昨今の相場は千三百圓だから、賣れば八株で一萬四百圓といふ金が入る、然うすれば其金の内からなみの婿が要求する六千圓を持參金として優に仕拂ふことが出來るから、此邊で株を賣つて、早く娘を喜ばせたい、……と斯う申すのでございます、米本は銀行株が益〻騰つてゆくのを見てから實は大それた野心を描いた、といふのは、株を高くなつたところで巧く賣つて、娘に付けてやる六千圓を拂ふと同時に自分も一年六百圓ぐらゐの收入を得る丈けの元金を拵へて、樂隱居をば致したいと、斯う考へたのでございます、卽ち六千圓と、外に五分の利息を見込むとして六百圓の年收には元金一萬二千圓要る勘定だから、合計一萬八千圓を拵へなければならない、中々の大金だ、然う心に描いてみたが、それには株が二千三百圓に騰らなければ不可ぬので、そこまでは到底ゆくまいと諦めて、今度千三百圓の相場のとこで思ひ切つて賣つて了はうと、考へついたのでございます。

『ねえモシ旦那樣、此上株が騰らなければ私は此で賣つて了ひたいと存じます、何を差置いても、娘の身上といふものを考へてやらなければなりませんのが親の義務でございますからハイ、併しでございます、若しか株が此上騰りつゞけてゆくといふやうなことなら、此で賣るのは大損でございますから、何とか考へなければなりませんので、エーそこで御伺をいたすのでございますが、御見込は旦那樣、如何なものでございませう？』

庄兵衞は猛り立つやうに怒鳴りつけた、

『何を云つてるんだ米本、愚言は止せ止せ！　汝は株が千三百圓限り騰らんと思つてるのか？　己も賣ると思つてるのか己が？　今汝の云ふ一萬八千圓は瞬く内だ、相場が下るなんて云ふ奴があつたら己の所へ引張つて來い、判るやうに言つて聞かせてやる、箆棒な！』

一言の下に叱り飛ばされて返す言葉も無く、米本はコソ〳〵といつて了つた。

庄兵衞は纔とのことで一人になつたから、直と又二人の主任を呼寄せて、續いて調べものに取かゝる。

六

そこで愈〻臨時株主總會を八月に開會して資本金新規增加の事を議決することになつたが、彼の濱野敏之は頭取として總會に出席しなければならんから、七月の末に東歐から馬港へ歸着した、實はかつ子は銀行の事が何かにつけて不審で心配で溜らないから、二箇月前から手紙の度に、敏之に一時も早く歸國するやうにと、ヤイ〳〵書き送つたのでございます、庄兵衞の爲ることは表面では誠に大成功を以て日一日と進んでゐるやうだが、かつ子は進むだけ夫丈け何だか危險が潜んでゐるやうに思ひ、其危險が今にも破裂しさうに思はれてならぬので、けれども此れと云つて明かに指示する點がないの

だから、口へ出して云ふことは出來ない、何しろ早く兄に歸つて貰つて、側に居て直接に監督つて貰ふのが一番だと、心に念ずるばかりでをりました、此節は庄兵衛が圖に乘つて了つてるから、かつ子の云ふことは中々聞かない、そればかりか、事に由つては隨分かつ子の目を晦ましもしてゐるのだから、然うと覺つたかつ子自身は、實に氣が氣ではないのでございます、今度兄が歸つて來たら寧そ自分と庄兵衛との關係を悉皆と打明けて了はうか、兄は學問に凝る正直一方、邪心の無い人であるから、其んな事を夢にも思ひては居まいけれど、然ういふ罪の無い人の前にわが罪惡を默つて隱して置くといふこと、之は中々辛い事だ、然うかといつて之を自白する、これも矢張辛いことだ、庄兵衛の身の上に就いても同じこと、庄兵衛が斯ういふ人だといふことを兄にも世間にも一應知らせて、用心をさせるのは德義上の義務だらう、考へると默つては居られない、が併し今日では深い關係が結び付て了つてるから一概にそれもならない、大事業をするには多少の無理も仕方は有るまい、又兄の身の上も考へて置かねばならぬ、一方庄兵衛は深切な人でもある、心から惡い人ではない……、如何しやう此うしやうと、かつ子は女氣の思案に餘つて、分別も出なくなつたが、何も兄が來さへすれば相談が出來やうと、かつ子今は敏之を大に待兼ねてをりまする。

敏之は到頭東歐から歸つてきたが、庄兵衛が敏之の歸つた其當日の夜匆々例の繪圖室へ敏之を引込んで、重役會にかけて其から臨時總會に提出しやうといふ資本增加案を說明して一議に及ばず承諾をさせやうとする景色が見えたので、言合はさねど敏之もかつ子も、前以つて二人丈けで一遍逢つて、熟く內幕の話を纏めておきたいと、種々と工風をいたし、庄兵衛との會見を引張る算段をいたしました、幾と少しの時間を拵へることが出來たので、二人逢つて話を交したが、第一に敏之の話は、東歐に於ける事業の進行は悉く滿足すべきことのみで、今迄政治上財政上樣々の支障の爲に永らく放擲かしにしなつてゐた鐵道事業も今度は首尾よく決定して、既に工事も始められるばかりになつてるから、巴里で會社の設立手續さへ盡せはそれで宜い、此鐵道の將來は有望なのは固よりのこと、利益は立どころに擧つてくる、實に今のところ大成功だと、得意滿面に頗る元氣なので、事業の不安に就いて思ふ存分言つてのけやうと思つてゐたかつ子は、折角兄の元氣になつて喜んでるのを、氣を挫くことも致し兼ねて、言ふことも言へなくなつた、が考へれば戰慄乎とするほど怖ろしくも思はれるので、そこで思ひ切つて種々と不審の廉々を並べ立て、庄兵衛が餘り圖に乘つて世人を瞞着してゐる容子があるそれへ一緒になつて釣込まれては恢復のならぬことだから、用心が肝要と、樣々と諫めると、敏之は言葉を遮つて、眞正面から妹の顏を覗き込みながら、それは一體如何いふものか、何か突留めた證據があるか、明白地に言つたらといつたが、改まつて問はれては、かつ子も偖て斯うと言ひ兼ねて、遂に又默つて了つた。

ところへ入つて來た庄兵衛、久しぶりの面會に飛かゝるやうに敏之の側へ寄つて、一別以來の挨拶

を致す、敏之も嬉し氣に庄兵衛に握手しながら、最後に出した萬事首尾宜く進行てる報知の手紙のことを話をすると、庄兵衛滿悅の色を顏に顯して、

『イヤ僕も實に嬉しい、今度こそ巴里は我々の手裡物、我々は巴里市場の金權を掌握し得るといふものだ、僕も又其後大に勉强した、大に骨折つて實は一の非常特別新考案を案出した、それは外でもない此ういふのだ……。』

とこれから庄兵衛、萬國銀行の資本一億を一億五千萬に增加すること、其方法としては新に十萬株を發行いたし、同時に從來の新舊株殘らずを拂込濟にする、其爲に今度增加の株は表價五百圓の割增三百五十圓即ち八百五十圓で發行して、此三百五十圓は直に從來積立て來つた準備

金に組入れる、然うすると銀行の準備金合計が二千五百萬圓になるが、從來の四分一拂込株數二十萬株を全額拂込濟にするには五千萬圓なければならぬから、あと二千五百萬圓は今度或方法を以て拵へる、其方法といふのが所謂非常特別の新考案、それは如何いふのかといふと、當期營業一年間の利益は少くとも三千六百萬圓に上る見込だから、資產負債對照豫算表を然ういふ風に作製する、さうして其內から二千五百萬を取つて前の準備金二千五百萬に加へて、優に五千萬が生み出せるから、之を在來の廿萬株未拂込金の支拂に振替る、然うすると千八百〇十〇年十二月卅一日以後の萬國銀行は、一株五百圓全額拂込濟の株數三十萬株の、一億五千萬圓といふ大資本の會社となつて、金融界に於ける威力は此上もないものとなる、而して株は殘らず無記名にして、市場の流通取引に便にする、斯くして萬事安固なる大成功、何と巧妙な案ではないかと、庄兵衛得意になつて說立てた。

『なんと面白い案だらう、面白いといふくらゐでは言葉が足らぬ、所謂妙案といふものぢや、我輩は自慢のつもりぢや……。』

七

庄兵衛一人定めの、乘地になつて喋り立てられて、敏之少しドギマギして、返答さへも出ぬでゐたが、庄兵衛の並立てた言葉を繰返し考へ數字を胸で當つてみて、敏之遂に口を開いた、

『何も君の資産負債對照勘定には私は贊成は出來んですね、三千六百萬の利益が有るッたつてそれは今期のことで、未だ勘定を了へぬ詰り豫算に過ぎぬのだ、それを確實的に考へる譯だから、言はゞ未成案といふもの、配當すべきものを配當とせずして銀行の當局者勝手に拂込金に充用するといふ、それも此も私は不當だと思ふが何うだらう、夫も宜いとしたところで、其配當なるものが、未だ確定的のものでない、未收入のものであつて、それを現實のものとして勘定の表面上振替へるといふことは、詰り虛僞假想の配當額を設けて人を欺くに等しいもの、不法と云はれても辯解の辭が無いではないか。』

『何虛僞假想的！　何故か？　虛僞假想的かも知れんが僕は勘定を餘程內輪に見積つた積りだ、三千六百萬といふのは極少い見積りだ、何故といつてみたまへ、汽船會社と云ひカルメル銀山といひ、新土耳其銀行と云ひ、萬國銀行が經營する總ての事業は一として有望ならざるなしではないか、豫定以上の收利を見てゐる譯ではないか、君の我輩へ寄越した通信は即ち徹頭徹尾其事を說いてゐる、然るに君が今のやうな言語を發するといふ、それは自身で自身を欺くといふものだ、御互の成功途上に不吉の言を弄し給ふな。』

大に激した庄兵衞の言に、敏之は微笑しながら、相手を押鎭めて、僕は事業は悉く有望でないとは云はぬ、將來の有望は必ず期して待つべしだが、只だ物事には順序がある、緩急秩序があるからして、それに從つて行きたいと思ふのだと、弱い口調で說明すると、かつ子も此時物優しく口を出して、

『さうです、私も然うかと思ひます、一體何も其樣に急ぐには及ばぬではございませんか、此資本の增加も今營業一期の途中でせずとも、來る四月の決算期迄待つてしても宜しいではございませんか、夫とも貴君は二千五百萬の不足があるから夫丈を拵へたい御考へでござんすなら、未だ定らない配當の方は、全然勘定を別にして置いて、新株を一株八百五十圓でなしに、千圓か千二百圓で發行したら宜しいでござんせう、さうすれば未だ定まらない配當を見越すやうな危險は無く、安心といふものです。』

かつ子に道理のある事を云はれて、庄兵衞一寸困惑しながらかつ子の顏を見詰めてゐたが、軈がて、『成程さう云へば八百五十圓でなく千百圓で發行すれば、十萬株だから合計二千五百萬圓出來る道理は道理だ。』

『然うでござんせう、さうすれば宜いでせう、然ういふ風にすれば何も株主達や世間から兎や角云はれる心配もありません、株主に取つては八百五十圓であらうと千百圓であらうと、大した相違はございますまい。』

『そりやア然うだ、出せッてば株主は此方の云ふ通り幾らでも出すに違ひない、違ひないどころかバッチラがつて餘計出して株の奪合に競爭して、此方が扱ひに困る位だ……。』

庄兵衞慢心に留度が無く、斯んな言を云つて了つたが、急に我ながら思返して、

『だが不可ん〳〵、何を云つてるんだ君達は、何うしたつて新株に千百圓を拂込ませる譯にはいかん、そりやア餘り面白くない、拙い簡單な方策だ、總て此金融の問題には、想像といふことを利用してかゝらなきやいかぬ、悧巧に立回はらうとするには、懷中へ入らぬ內から入つたやうな感じをさせて而して金錢を取る算段をせんければいかぬ、入つて仕舞つちやいかんが、入らぬ先だと贈物でも貰つたやうな氣になるもんだ、それにだ、此必ず好成績であるべき次期の資產負債勘定三千六百萬を下らざるべき利益があることが、一ト度各新聞紙上に現はれて看給へ——假令豫評にしろ風評にしろさ——世間に公になつて看給へそりや大變だぜ、取引所は火が付いたやうになつて騷出す、相場は二千圓ドタを拔くは必定、騰りに騰つて殆んど底止するところを知らざる有樣になる、と我輩は思ふのだ！』

庄兵衞は意氣軒昂、其短い脚を高く突張つて、大抱負を述立てる、何でも疾く成功しやう無理にも疾い成功を見やうと、これが彼の慾望であるから、總て熟さない內に前へ前へと進んで參る、幾か三年の其間に、萬國銀行が增資を行ふこと三回、最初二千五百萬圓のが一足飛に五千萬になる、一億になる、一億五千萬にする、これで見ると、さも銀行が非常不可思議の隆盛を極めて、殆んど底止するところが無いやうに思はれる、利益配當も同樣で、最初の一年は無配當だつたが、二年目には一株に付十圓を割賦し、次期には三十三圓となり、今度は總計にして三千六百萬圓を配當とすることが出來て、其金を前の積立と一緒にして、殘らずの未拂資本の拂込に充用するといふ、誠に大した勢だ。

それが實際は何うかといふと、全然眞實の進行でなくして、嘘で固めた遣繰手段、煽りにあほり、虛僞の申込引受を拵らへて、無いものを有るやうに見せかける、所謂幽靈的、阪谷なんといふ名義人を設けては、申込引受を誤魔化して置くが、實は銀行自分自身に自家の株を有つといふ法律に觸れたことをやつてるのだ、其樣なことをして全額否全額以上申込があると吹聽し、拂込が濟んだやうに拵へ噺し、資本の增加を矢繼早に實行して事業をいかにも有望に見せかけ、株の相場を釣上げて、一攫千金をやらうといふ、これが庄兵衞の策略魂膽。

八

敏之は依然默つて、資本增加のことに就いて胸算用をしてゐたが、此時頭を擡げて更に細かく、『君の說はいかにも道理のやうだが、僕に於ては到底贊成は出來ぬ、君の豫算的の資產負債勘定を基礎に置くことは僕は飽までも不正と思ふ、未だ判りもせぬ勘定を、確實のものに見て計算したり、利益を此位だらうとだらう主義でやるそれは大會社の眞面目に行ふべき事ではないのだ、僕は東歐に於て銀行が經營する事業は一として有望ならざるなしとは云ふが、萬一何んな事があつて豫期の如くに効果を擧げ得ぬとも限らぬ、總て人事は常なきものである以上、未必の事は當にはならぬのだ、今

『だが不可ん〳〵、何を云つてるんだ君達は、何うしたつて新株に千百圓を拂込ませる譯にはいかん、そりやア餘り面白くない、拙い簡單な方策だ、總て此金融の問題には、想像といふことを利用してかゝらなきやいかぬ、悧巧に立回はらうとするには、懷中へ入らぬ内から入つたやうな感じをさせて而して金錢を取る算段をせんければいかぬ、入つて仕舞つちやいかんが、入らぬ先だと贈物でも貰つたやうな氣になるもんだ、それにだ、此必ず好成績であるべき次期の資産負債勘定三千六百萬を下らざるべき利益があることが、一ト度各新聞紙上に現はれて看給へ――假令豫評にしろ風評にしろさ――世間に公になつて看給へそりや大變だぜ、取引所は火が付いたやうになつて騷出す、相場は二千圓ドタを拔くは必定、騰りに騰つて殆んど底止するところを知らざる有樣になる、と我輩は思ふのだ！』

庄兵衞は意氣軒昂、其短い脚を高く突張つて、大抱負を述立てる、何でも疾く成功しやう無理にも疾い成功を見やうと、これが彼の慾望であるから、總て熟さない内に前へ前へと進んで參る、纔か三年の其間に、萬國銀行が增資を行ふこと三回、最初二千五百萬圓のが一足飛に五千萬になる、一億になる、一億五千萬にする、これで見ると、さも銀行が非常不可思議の隆盛を極めて、殆んど底止するところが無いやうに思はれる、利益配當も同樣で、最初の一年は無配當だつたが、二年目には一株に付十圓を割賦し、次期には三十三圓となり、今度は總計にして三千六百萬圓を配當とすることが出來て、其金を前の積立と一緒にして、殘らずの未拂資本の拂込に充用するといふ、誠に大した勢だ。

それが實際は何うかといふと、全然眞實の進行でなくして、嘘で固めた遣繰手段、煽りにあほり、虛僞の申込引受を拵らへて、無いものを有るやうに見せかける、所謂幽靈的、阪谷なんどいふ名義人を設けては、申込引受を誤魔化して置くが、實は銀行自分自身に自家の株を有つといふ法律に觸れたことをやつてるのだ、其樣なことをして全額否全額以上申込があると吹聽し、拂込が濟んだやうに拵へ噺し、資本の增加を矢繼早に實行して事業をいかにも有望に見せかけ、株の相場を釣上げて、一攫千金をやらうといふ、これが庄兵衞の策略魂膽。

八

敏之は依然默つて、資本增加のことに就いて胸算用をしてゐたが、此時頭を擡げて更に細かく、『君の說はいかにも道理のやうだが、僕に於ては到底贊成は出來ぬ、君の豫算的の資産負債勘定を基礎に置くことは僕は飽までも不正と思ふ、未だ判りもせぬ勘定を、確實のものに見て計算したり、利益を此位だらうとだらう主義でやるそれは大會社の眞面目に行ふべき事ではないのだ、僕は東歐に於て銀行が經營する事業は一として有望ならざるなしとは云ふが、萬一何んな事があつて豫期の如くに効果を擧げ得ぬとも限らぬ、總て人事は常なきものである以上、未必の事は當にはならぬのだ、今

銀行の帳簿で見ると、阪谷の名で三千何百といふ澤山の株を有つてをる、金高にすると二百萬からだ、此金額を君は貸借バランス上貸方へ計上してゐるが、それは正に借方へ計上すべきものと僕は思ふが何だらう、何故なれば、阪谷なるものは只單に名義人で、其實、株は銀行の手に有つてゐるのだ、固より此樣な事は他人には云へぬ、ホンの內輪の事ではあるがだ……、獨り阪谷の名のみでない、銀行の使用人の名前で有つてる株も、使用人のみか重役名義をさへ使つて有つてる株も、中々莫大な數のやうに見受けられる、否說明せんでも解つとる、僕には大概解つとるが、其の事は考へると實に恐ろしい事であつて、僕は竦然たらざるを得ぬのだ、銀行自身が自己の株を斯くまで多數に秘密に所有してをることは、恐ろしいと共に危險千萬の事共で、終局には自ら死地に陷るやうになりはすまいかと、僕は考へられてならぬのだ。』

かつ子は、自分が心に思つてゐた事を悉皆兄が察して、庄兵衞の前で言つてくれたので、嬉しくつて溜らないから、側から顏容で兄に勇氣をつけて、自分も思はず口を出す、

『本當に思惑といふものは危險でござんす。』

庄兵衞は聞咎めて、

『思惑つたつて我輩は何も思惑を行りはせぬ、銀行が自分の株を有つとるといふのは、夫は株の値が下るのを拒ぐ爲だ、相場を支持してゆく都合上止むを得ず所有するのだ、若し彼の郡代などが、弱氣を振舞して賣りに出て、我輩共に戰鬪を開始してくる時などに、夫に對して防禦の方法が無けらねばならぬぢやないか、今日迄未だ其んな景色は無い、景色は無いがぢや、併し今後必ず其樣な方法を盡してくると、我輩は斷定する、卽ち此の如き場合に處する爲に、我銀行の株の相當數を所有すると、我輩は之を得策と思ふのだ、否それどころぢやない、必要があれば我輩は此上にも猶且々々買つてゆく、もつと幾らでも買附る、買附て、相場が一錢でも、否一厘でも下らんやうに我輩は務めてゆく！』

庄兵衞は此終の一語に極く力を籠めて、負ける位なら死ぬと云つたやうな決心の色を現はして、憤然になつて言張つたが、嬶て心を取直して、無理からに笑を作つて、

『何も我輩は君達に不信用になつて來たやうだね、一體銀行のこと事業經營の事に關しては委細御互に相談を遂げて、萬事我輩に任してくれた譯ぢやなかつたか、萬事任せたなら任せたで、我輩に行らせて置いてくれんければいかん、我輩の欲するところは要之君達の利益のみだ、君達の幸福を思ふばかりからだ、君達の爲に大々的利益と幸福を生みたいと思ふ其爲ばかりからなのだ……。』

と云つて又鳥渡考へたが、餘り自分の氣が立つて了つたので、ハッと思つたのか、今度は少し聲を低く、

『君達は我輩の考へてをることを知るまい、我輩は銀行の株を三千圓までゆかせやうと思つてるの

だ……。』

庄兵衛の目には、此三千圓といふ大相場が、遙の取引所地平線上に、キラキラ輝いてるやうに思はれるのだ。

餘りの大言にかつ子は、

『アラマア！』

とばかり、敏之は搏はず自白する、

『相場は二千圓を超えるだらう、併し一と度二千圓ドタを拔けば、其以上の騰貴には僕は危險を伴つてくると信ずる、だから僕は前以て斷つて置く、其樣な愚な場合に至らぬ以前に、僕は僕の所有株を賣るかも知れぬ！』

此言葉を聞いて庄兵衛、小聲で獨り言のやうに、

『誰も賣る〳〵と口には云ふが、偖賣るかと思ふと然うでもない、論なんぞ何でも宜い、今に屹度高くして儲けさして見せるから。』

と云ひながら少し愚弄した調子で笑つて、

『マア〳〵僕を信用して置き給へ、兎に角今日迄僕は別に失策をして居らぬ積りだ、君等にも利益になつてる積りだ、サドワ事件の時君等は百萬圓を儲けたことを忘れちや不可んぜ。』

成程敏之は思はなかつた、サドワ事件で市場が混亂したときに、錯雜の裡に庄兵衛の方寸に由つて百萬といふ大儲けを取引所の濁つた水から漁し得たのであつた、餘り大言は吐かれない、敏之も默つて了ふ、かつ子も默つて了ふ、兩人とも固より曲つた事は嫌ひな人間であるから、此時揃つて顏を少し蒼白くしたが、これは良心に恥ぢたやうな心地がしたからであるかもしれぬ、遂に敏之は辯明がましく、

『然う云はれゝば然うだが、併し僕が君し此方に居たならば……。』

言懸けた言葉を庄兵衛は云了はらせず、

『今になつて其樣な事を言ひ給ふな、宜ぢやないか、此方が取つた金は不潔な猶太人の手から奪返した金なのだから、搏ふことは有りはせぬさ……。』

遂に三人は笑つて了ふ、かつ子も到頭讓つて了つた、成程人間は大人しく默つて、人に食はれてばかりは居られぬ、此世に立つてゆかうとするには、此方も人を食はねばならぬ、それが人間の常態だ、若其が出來ぬと云つて、慾も得も捨てゝ了つて、高尙に搏へてゐれば、人に食はれるばつかりだ、存在が危くなる、然うするには僧侶にでもなつて此世から懸離れるより外はないと、かつ子も心中に考へた。

九

庄兵衛は猶も元氣に、

『ねエ、解りましたかね、金錢を不潔物のやうに考へて唾を吐きかけるやうな風をしたつて不可ぬ、そんな事をするのは第一愚だ、金錢を輕蔑して、汚いとか不潔だとかいふのは、金錢の何たるを知らぬ實力の何たるを知らぬ否之を作る能力の無い無能者の負惜みに言ふことで、取るに足らぬ迂遠論だ、只だ他人の爲に務めてばかりゐたつて仕樣が無い、他人の爲に身を殺して働くといふこりやア第一論理に適はぬ、人間は各自分から富の分配を求めんければならぬ、それを欲せぬといふならば、ゴロリと横に寢てゐる方が、宜い理屈といふものだハ、、、、、。』

庄兵衛は悉皆兩人を呑んで了つてゐるので、兩人は最早一言も挿み得ない、庄兵衛は益〻大言、

『ねエ待つて居給へ、君達は今に宜加減纏つた高を拵へるに宜いから、一寸見せやうか、ソラ、勘定は如此なる。』

と云ひながら、宛然小學校生徒の性急元氣なやうに、かつ子の卓の方へ一散に馳寄つて、鉛筆と紙片とを持つて來て、數字を並べて見せながら、

『待ちたまへ今計算を見せて上げる、何豈わけはない、コーット、先づ最初創立の時に君達は五百株を引受けたのだから、第一回の資本倍額增加の時には夫が倍になつて一千株、第二回目には更に又それが倍になつたのだから、今日では二千株の所有株だ、それへ今度半額增加といふことになるとすると合計三千株になる、ね。』

言懸けた途中へ、

『併し。』

と口を發す敏之をおさへつけて、

『マア聞き給へ、君は拂込に困るといふのだらう、宜ちやないか一方に於て君の伯母さんだか伯父さんだかから繼承した家產の三十萬圓と、それから後の不足はサドワ事件で儲けた百萬と、それを加へれば優に拂込には足りるぢやないか、宜しか、之を見給へ君は君の最初の二千株に對して合計四十三萬五千圓を拂つた勘定で、而して之からの千株に對しては一ト株八百五十圓の合計八十五萬を拂ふのだから、此二タ口を加へると百二十八萬五千となる、所へ前の百三十萬圓ある譯だから此を減いても跡へ一萬五千圓殘る勘定だ、猶其外に此勘定へ入らない頭取の年俸が三萬圓ある、よしか、それも今度は倍の六萬圓に增すやうにする積りだ。』

巧に並べ立てられた大な數字に、兄妹二人は茫然自失の態、しかし成程と感服して、一方嬉しい氣も起つて、猶も一生懸命聞いてゐる、庄兵衛は益〻得意、

『ソラ解つたらう、何にも苦しむことはないのだ、不正な事をするのぢやない、君達は君達の取るもので拂込をするので、眞直だ、立派なものだ、だがだ、是丈けぢやア何にもならぬ、詰らない、斯う來なくちや不可ん。』

とこれから庄兵衞は起上つて、手に持つてゐる紙片を振廻しながら、

『株の値が三千圓になると、君の所有株三千株は一躍九百萬といふ價格になるのだッ！』

三千圓と聞いて餘り思切つた言ぐさに、兩人は吃驚して打叫んだ、

『何ですつて三千圓の値が出る？』

『勿論ッ、それを今賣るなんて、我輩は極力反對する、三千圓に達する迄は斷じて賣るべからずだ、我輩は飽迄も留める、腕力に訴へても留める、人は友人が愚な行爲をするときは之を留めるのは權利だ、義務だ、三千圓の相場は必ず現る、請合つて現る、我輩は屹度出さねばおかぬ！』

誰が此猛烈な人に反答が出來ませう、宛然雄の鷄の聲のやうに、耳を貫く鋭い聲音で、大捷利大成功を主張するところ、誠にすさまじい光景でございます。

仕方が無い、兄妹は其儘の泣寢入、苦笑して了つた、而して、三千圓の見込は中々難かしい其樣に行かぬでも可いといふと、庄兵衞は何處までも言張つて、そして今度は一人で卓に就いて、何か鉛筆で紙へ書きはじめたが、これは自分の勘定をしてみたので、何を書いたか知れないが、庄兵衞自身の名前になつてゐる三千株も實以て怪しいもの、屹度拂込まぬであるに相違ない、又拂込まうとも思はぬでをるに相違ないのだ、自分の名になつてる株は三千丈けだが、未だ此外に他人の名で澤山仕舞つてあるに相違ない、それが何の位になつてるか、幾らも名義人を拵へてあるから判らぬが、どうせ少からぬことである、要之株は樣々の山師的機關細工をしてあるのでムいます。

一人で鉛筆で紙へ書いて頻と勘定をしてゐた庄兵衞、此時急に鉛筆で紙面を塗抹して、而して反古紙のやうに丸めて衣囊へ入れて了つた、大方種々の遣繰算段を書いてみたものでございませう。

庄兵衞は軈て立上つて帽子を取つて、

『僕は之から行く約束のところがあるから此で御免を被る、だが能く解つたらう？　可かね、さうすると一週間内に重役會を開いて、それから其後で直ぐ臨時總會を催して、資本增加を議決させる、其積りでゐてくれ給へ……。』

庄兵衞は行つて了つた。

十

再び兩人限りになつた兄妹、庄兵衞に煙に卷かれて、茫然して、顏を見合つたまゝ暫らく無言でゐたが、妹の意中を推しやつて、敏之遂に口を開いた、

『どうも斯うなつては仕方がない、も少し行つてみるより外仕方がない、成程相良の云ふ通り、巨額の金が入るといふのに、それを嫌つて避けてゐて、取らぬといふのも馬鹿々々しい、餘り子供的に正直過ぎるといふものだ、僕は固より學者側の人間で、金儲の事は知らぬで居た、他くまで學者の本分を守つて生涯を送つてゐた、それが爲には正々堂々、隨分勉強もして來たつもりだ、其勉強が預つて銀行今日の急速な進運を來したので、僕は何にも人達から言はれることはないつもりだ、後影いことはないつもりだ、だから安心してをるのだ、自分さへ惡い事を仕なければ搆ふことは何にもない、ドシ〳〵進んで行らうぢやないか、働いてゐさへすれば、何にも云はれる事はないのだ。』

かつ子も起上りながら、

『ア、それも金、これも金、しかし思ひも懸けない大金が手に入るといふのは……。』

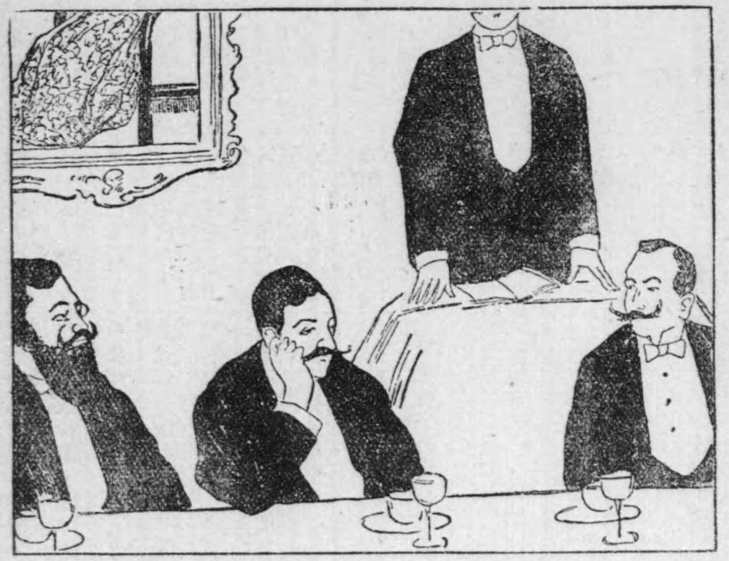
其まゝ深く考へてゐる彼女の眼には露の滴が宿つてゐた、抑もこれは何の涙か？　夢に等しい金の入るのを喜んでの嬉し涙か、それとも或苦痛を思ふ哀しみの涙か、局外者には解らぬが、固より喜悅の涙もあらう、今迄大に勉強して來た其の努力に對しての報酬を得るのだから、嬉しいとも思つたらうが、又一方には或る苦痛を感じての涙かとも思はれる、然らば其苦痛は何が原因か、これはかつ子自身も明言することは出來ないが、大金を得るにつけ、何となく惡い事を仕たやうに良心に咎めて、淨まないやうな怖いやうな感が去り兼ねてをるのでございませう。

敏之は妹を勵まして、いろ〳〵と元氣をつける、其癖自分も元氣がない、兩人無理に元氣を粧つてみたけれども、不安の念は何うしても腦裡を去らない、不滿足の感が胸に在る、何だか淸淨潔白でない氣がする、一つの罪に從犯の咎めがあるやうに思はれる、かつ子は勢の無い聲をして、

『矢張相良さんの云ふことが道理かも知れません、洗へば人間は皆其樣なもの、そこが生涯といふものでせう……。』

重役會は遂に銀行內の例の壯麗な新重役室で開會された、今迄は隣の芳村家の大木の蔭がさして靑い薄暗いジメ〳〵したやうな室で行つたのが、今日は往來の方へ沿つて大窓が四つもあつて明るい室、天井は高く、四方の壁を飾つてある大額からは黃金が流れるやうにギラギラと光輝いてをります、此室の中央に眼も覺るやうな緋の天鵞絨で蔽はれてある長方形の大机があつて、其周圍には美事な重々しい肘懸椅子がズラリと並べてある、言ふ迄もない此席の最上席は頭取の座席、正面の肘懸大椅子がそれで、さながら王座とでも云つたやう、一段高く他の重役席を見下すやうになつてをります、一方の壁の中央には純白な大理石で出來てゐる煖爐があつて、其上には精巧に出來てゐる羅馬法王の半身像の莞爾やかな顏をしたのが置いてあるが、氣の爲か斯んな所に置かれては迷惑だといふやうな苦笑の顏に見えてをります。

庄兵衞は今日の會議を開く前に重役を悉皆手に入れて、其多くは買收して了つた、第一には福岡侯



爵、此頃或る詐僞取財的の事件に關聯して既でのことで法網に觸れるところを、庄兵衞の御庇で免れたので、それからといふもの庄兵衞には皆無頭が上がらない、無理でも何でも聞く始末、其癖自分は相變らず何處迄も華族といつたやうな顏をして、氣位を高く留まつて、重役中でも耀々たる名譽の飾となつてると、自分丈心得てるのでございます、第二には代議士由利、卓の上に在つた威尼斯割讓一件の電報を偷見をして洩したことが露顯つてから、大木に見離されて了つて、夫からといふもの仕方が無い悉皆萬國銀行隷屬の人間になつて了つたが、代議士の肩書を利用しては政治界の泥水の中で破廉恥厚顏な譎詐を行ふのを屁とも思つてをらぬから、終局には監獄へ送られべき代物だ、それから副

頭取の重野子爵、此人は頭取濱野が永らくの留守中、幾つも盲判を捺して其報酬として秘密に十萬圓をせしめたといふ人物、それから銀行家小部、此人も亦銀行を利用して、內に外に我職業上莫大な腹を肥した人間、それから生絲屋の瀨藤、此人は或時の大受渡に金に詰つて庄兵衞に少からぬ高を融通して貰つて、それを未だ返せぬでゐる男だ、あと一人殘つてるのが醍醐久一郎、此男丈は庄兵衞とは何の關係も無く、獨立の態度で居るので、庄兵衞も醍醐には少し憚つてゐるのでございます、尤も之とても交際上隔意も何もあるのでない、晩餐にも招んだり始終打解けて、書類を提出されゝば別に檢めもせず、捺印をしてゐるといふ巴里ッ子の穩雅な行法、儲かつてる內は行らしておいても宜いといふ、別に難かしい人物ではございません。

此日の議案は資本金半額增加といふ大問題たるに拘はらず、會議は平時と些とも異はず、スラ〳〵と運んで了つた。

十一

これから重役會が開かれやうといふ時に、室へ入つて來た醍醐、濱野を發見けて、濱野が屹度好い事業の報道を東歐から齎して來たと思つたから、飛つくやうに側へ寄つて、

『ヤア濱野君其後は、私は貴君に向つて大に萬歲を稱へんければならんです、御目度たう。』

醍醐を始めとして、諸人は濱野を圍繞いて、御目出たうを浴せかける、庄兵衞も自分は濱野が歸つてから幾度も逢つてゐるのに、未だ一度も逢はぬやうな顏をして、同じやうに祝意を述べる、さてこれから會議は開かれたが、濱野は頭取として、株主總會へ提出する報告を朗讀して聞かせたが、其實最早解りきつてゐる事柄だから、諸人は只義務のやうに默つて聞いてゐるばかり、何の役に立つ譯でもございません、報告には元より各事業の非常な好成績であること、有望極まりなきこと、必然の結果として資金の增加を要すること、新增加の方法に由つて在來の未拂込を殘らず拂込濟たらしむることなんぞ、巧に說明してあるので、諸人は絕對に大贊成、寧ろ感嘆と驚喜を以て歡迎して、只默つて首を縱に振るばかり、說明を求めるものなどは人ッ子一人ございませぬ、完全無缺、御膳上等、只瀨藤が一寸した數字上の過誤を訂正したが、滿場一致議決といふ目出度い議事にしたい爲に、諸人は揃つて相談の上、議事錄には其事を載せぬで濟すことに相成つて、遂に一同一瀉千里に、議事錄に署名捺印をいたし、御目出たう、萬歲など、歡呼の裡に重役會議はこゝに結了と成りました。

議事は了ふ、戲談話も出る、諸人大元氣、福岡侯爵は袋井へ狩獵に行つた話をする、由利は羅馬へ行つて法王に洗禮を受けた土產談をいたす、小部は約束があるから失禮するとて行つて了ふ、其他の伴食重役、庄兵衞から小聲でそれ〴〵總會で執るべき態度方針に關する訓示を承はつて、おのがじゝ退散した。

が、此時迄重野子爵にさん〴〵濱野の報告を褒めそやすのを聞かされて弱つてゐた醍醐は、行きかゝつた庄兵衞の腕をつかんで、斯う耳打をした、

『餘り大風呂敷を擴げ過ぎはせぬかね？』

庄兵衞はピタと留つて、醍醐の顏を覗くやうに見た、一體庄兵衞が醍醐を事業の仲間に入れるときには、醍醐といふ男は事業上大した味方には出來ぬ人物だと思つて、少し躊躇したのである、だから何うしても憚かる氣味がある、そこで、わざと人に聞えよがしの大聲で、

『吾輩を宜いと思ふものだけ、一緒に跟いてくれば宜いんでさア。』

それから三日經つて、遂に臨時株主總會はルーブル館の大廣間に開會致された、定數に由ると、總會に出席し得る資格は二十株以上の株主といふことになつてるが、此日出席の株主總數千二百人餘、其投票箇數四千幾口といふのでございます、株主が順次總會席上に入場する、それから成規の通り株主たる權利を調べられる、總會簿へ各自記名調印する、此仕事に彼是れ二時間を費したが、軈て彼方此方で話聲がザワ〴〵と聞える、皆喜ばしさうな會話でございます、遂に重役もやつて參る、上席の行員も大分見えて參る、阪谷も群衆の中に來てゐたが、勢ひの無い聲を出して御國自慢、己の國へ行けば金も銀も棄てゝあるやうに轉がつてると話をすると、此六月に相場が屹度騰るだらうと見込んで萬國株五十枚を千二百圓相場で買はうと思つてゐる毛利は、頻りと其談話に耳を傾けて、口も開い

たまゝ夢中になつてをります、此方には又矢野龍吉、此頃は急に工面が好くなつたので、大分惡所入りをやつてるが、今日も昨宵氣の爲かして腫ぼッたい眼に重苦しさうな頭をかゝへて、出席してをりまする。

さて彌々頭取濱野は開會を宣告したが、第一に監査役に再選された佐々田景連は麾かれて、此十二月三十一日に於ける銀行の財産狀態に關する報告を朗讀することになりました、これは定欵の規定通り、此から議さうといふ資産負債豫算を、前以て監査役に於て檢査したといふことを示す方法でございます、さて佐々田監査役の報告は、第一に去四月の通常總會に提出された前期の財産狀態から說出して、其資産負債勘定に於て純益は一千一百五十萬圓に上り、株主に配當する五分を引去つて、殘額の内一割を重役報酬に、一割を準備積立金に、殘額を以て第二の利益配當に當て、それが三割三分であつたことを說いて、次いで種々樣々の數字を擧げて、本期の純益見積りは約三千六百萬で、此額は非常な高に見えるが自分には決して誇大の見積りとは思はれぬ、否寧ろ内輸に見積つたものであると、かう論結をいたしました、有つても無くつても同じ人間、何事も知らないで庄兵衞から宛がはれた報告を讀上げる、誠に御苦勞な譯でございます。

一生懸命になつて讀上げた佐々田の報告には、誰も正直に耳を傾けるものはございません、只毛利と外に二三の眞律な人達、其他一株か二株を後生大事に有つてる連中が、議場の喧噪な中から數字を一々腦裡に入れやうと務めてゐたばかりでございます。

議場はガヤ〳〵やつてをつたが、濱野頭取が座長席に起上つたので、宛然寺へでも行つたやうに、場内ピタリと鳴を靜めた、濱野もしばらくは只茫然。

十二

濱野が座長席に起つたまゝ、未だ口を開かぬに、ハヤ既に拍手喝采の音で騷がしい、御苦勞といふものがある、感謝と叫ぶものがある、萬歲と呼ぶものがある、要之敏之が遙々東歐に滯在して、熱心に調査に從事し開拓に腐心し、其結果金の搖樹を巴里へ振向けてくれたといふ廉で、之を感謝するのでございます、前期の勘定報告は先刻佐々田監査役が讀上げたが、誰も聞いてゐたものが無かつたので、又濱野の口からそれを聞きたいと請求するものが現てくる、其大略を更に濱野が說明をいたすと、議場は大變の喝采歡呼、が更に進んで次期の損益勘定豫算を說くに至つて、拍手喝采は絕頂に達して、滿場雀躍せぬものはございません、共同汽船會社から擧がる利益が何百萬、カルメル銀山が何百萬、土耳古國立銀行が何百萬、曰く何百萬、曰く何百萬いつの間にか容易なく三千六百萬圓といふ純益が成程自然のやうに出て參つた、現在が斯樣でそれから將來が又大變、第一新計畫の東洋鐵道會社の鐵道といふもの、これが著大なる効果を其地方に與へる、之に開發される國土利源の發達は非常なもの、

つまり一の新國土を出現させると同じこと、世界の幸福を增すこと如何ばかりであらうかと、濱野の說くところに人々は狂せんばかりの有樣、濱野は此迄說いて偖て諸君、此の如き有利有望、日月と共に明かなる次第であつてみれば、資本を要することの多大なるは此れ亦明かな事である、卽ち此に殊に本會を開いて資本增加の決議を諸君に諮らんとする所以で、現今一億圓のものを增して一億五千萬圓とし、增加株十萬株を今回は一株八百五十圓で發行し、之に由りて在來の株の未拂込分を拂込にする、卽ち其金額は割增に由つて得る金と次期の報告に出づる多大なるべき利益配當金とを以て之に當つると、斯う說明を致して壇を下つた、此說明を聞いた出席株主一同、誰一人異論を立てるものはない、妙案々々と叫んで雷の如き拍手喝采、其中で一番目立つて人の頭の上に見えたのは、力一杯に拍手してゐる毛利の大な手でございました、それから前の方の席に居る重役連、行員達、皆騷ぎ立てる、阪谷も直ぐ側に突立つて、宛然劇場にでも來てゐるやうに「偉い、巧い」など〻褒立てる、此の如くにして增加案と此に伴ふ案は、歡喜の裡に結了となりました。

飽までも理智に長けたる庄兵衞は、此場合又もや小細工を施した、それは外でもない、庄兵衞は世間で自分が銀行內で思惑や投機を行つてると云つて、非難してゐるものがあるのを知つてゐるから、こいつ一番態と此事を此方の手から公の此席上で素破拔かせて、綺麗淸淨と言說いて置いてやらう、些と險呑な藝當だが、併し餘り波瀾が無く總會が終つても、反つて物へ事のやうだから、一つ其裏を廻つていつて、疑を有つてる株主の腹へ一本棒を刺しておかうと、斯う細工を運らしたので。

そこで、無事に濟みさうになつたところへ起上つたのが矢野龍吉、これは固より庄兵衞に言含められてをるのでございます、粘つたやうな聲で發言、

『會長、一寸御尋ね致したい事がございます、多分多數の株主諸君に於ても御同感だらうと存じて、其方々に代つて念の爲御伺ひいたしたいと思ふ、それは他でもございませぬ、我銀行は自行の株を所有してをることは無いかといふ其事を一言御質問致すのでございます。』

ところが會長濱野は前以て庄兵衞から何の話もないのだから、一寸返答に困つて躊躇して、目を自づと庄兵衞の方へ持つてゆくと、此時はハヤ既に故意と人目に立たぬやうに座に小さくなつて坐つてゐた庄兵衞は、急に起上つて、其小さな體軀が出來るだけ大きくなるやうに背伸びをして、人を刺すやうな聲で答へた、

『會長、私から御答へ致します、銀行自身は一株も銀行自身の株を所有致してをりませぬ。』

何の爲にだか判らぬが、庄兵衞の此返答に、又拍手をするものがございました、庄兵衞が殊更に斯う云はないでも、表面は夫に相違はない、銀行が銀行の名で有つてる株は一株も無いのであるから、言ふことは眞實だ、が、銀行の名義の代りに、阪谷や其他の名義で有つてるから何にもならないのでございます、これで遂に總會は散會と相成つたが、解散しがけまでも諸人は拍手喝采、顏の色も元氣

に光り輝いてをりました。

十三

翌日から數日の新聞には總會に關する記事が事明細に現はれたが、其評判は取引所内は勿論、市中一般大變なもので、非常な感動を與へました、彼の矢野龍吉はこゝぞと全力を籠めて書立てる、金があつたら萬國株を買へ、無かつたら工面しても買へとは、彼が新聞の一行毎に吹立てた言でございます、矢野は兼々財界に堅い信用のある「財政時報」といふのを買收しやうと描いてをつたが、今度彌〻それを斷行した、此時報は創刊以來十二年も經つ好評を博してゐる財政金融新聞で、其讀者は中上流の眞面目な金持や財界人士、其樣な好い新聞である代りに、買收には隨分な大金を拂つたのでございます。

さても庄兵衞の策略は旨々と圖に當つて、半月經つか經たぬかに萬國銀行株は到頭千五百圓といふ相場になり、それからトン〳〵拍子に騰つて、八月の終りの週間には、遂に二千圓の高値を現した、相場界の立者たる萬國株が此樣な風に上景氣になると、他株も一般に景氣づく、サア熱度は大變、至るところ株の話、相場の話、誰が儲けた、彼が當つた、激烈な傳染病が日一日と蔓延するやうでございます、萬國株を買はぬものは無い、誰も彼も買ふ、もつと騰るだらう限りなく騰るだらうと、平時用心深い人達までも一緒になつて騒立つて、買ひ立てる、斯うなると附景氣が又大變、那翁の大雄でさへ其劍を以てしてだに如何ともすることが出來なかつた東歐西亞を、今單に一箇の財政的會社であるものが殆んど徒手空拳で起つて征服する、其無盡の富源を開發する、百萬は億萬になつて返つてくるなどゝ、一犬虚を吠へて萬犬實を傳ふ的に言囃す、平時職業にしてゐる人でさへ、夢中になつて買ふ氣になる位であるから、殆んど其日暮の人間は褌を質に置いても買ふ有樣、一株二株の小株主はもつと增さうと考へる、最早樂隱居をしやうといふ門番爺も、猫を相手に遊んでゐる老令孃も、一日數十錢の日當を貰つてゐる村役人も、人の惠に生命を繋いでゐる田舍僧侶も、猫も杓子も株熱に浮かされぬものはございません、が併し考へると如何でせう、一朝不信の聲が叫ばれる日には、慘害立どころに至つて、是等人衆は一擧にして掃滅されて了ふので、恐ろしとも怖ろしい事なのでございます。

萬國銀行の此んな大騰貴大景氣は庄兵衞等の圖が當つたのは固よりのことであるが、又恰度時機が好いのに打突つたのも事實でございます、前申上げたやうに當國では今萬國大博覽會が開かれてゐる、人間はシャンドマル原上の音樂に浮されてをりますし、諸々の鮮かな旗幟に心が動かされてをりますし、日となく夜となく御祭騒ぎや饗宴に人の心はさんざめいてをりますし、不夜城的のイルミネーションに目も眩んでをりますし、夜も日も別かぬ極樂世界に、人は端目を外して狂喜して、亂行淫

行をも行つてをります、博覽會開會の五月からといふもの、世界の四隅から帝王や皇族や貴族が集まつてくる、行列は絶間が無い、巴里は陛下や殿下の飽食をしてゐるといふ有樣、帝王の内でも殊に目立つたのは露西亞皇帝、墺太利皇帝、土耳古帝、埃及王、其他普魯西王もやつて來たし、王から離れたことのない大忠臣ビスマークもやつて來てゐる、會場の祝砲は時を選ばずドン〳〵と四方へ鳴響く、群衆は競つて會場へ押寄せる、鐵砲の音に因んで獨逸のクルップが出品した大砲が非常の喝采を博するといふ仕合、帝國劇場には毎週盛大華美な公式演劇が催される、其他の大小劇場寄席料理店、どれもこれも人で一杯、大概の人道は淫賣婦と其を素見かしの客で所狹きを感ずるばかりだ、博覽會褒賞授與式は那翁三世陛下親臨の上執行されるといふので、六萬人の出品者の集つたところで古今未曾有の盛大な儀式が開かれたが、席上歐洲大陸の實主權者たる帝は、いとも剛毅沈着の態度で平和を說いて、演說を結んだのは喝采でございました、恰度式の眞最中墨西哥に於ける大慘劇の報道――同國皇帝マキシミリアンの死刑執行――佛蘭西の血と金は全く無効に濺がれたのだつた――が達したが、折角目出度い祝祭の折柄とて、之が發表は見合はせられた、併し此目出度い、太陽の光りをも奪ふ程の今日の盛會の最中に、斯樣な緣起の惡いことのあるのは、之も因緣事でございませう。

十四

此の如き明皎々たる時世に打突つたのは實に相良庄兵衞の大幸運、庄兵衞も昨今は其最も全盛な其最も光彩を放つた時なのでございます、今日は今迄に於けるやうな見懸け倒しの資產でない、空虛の金庫でない、正味正眞の金持、自分で自由になる現金持、嘘の無い正物を有つてをる身分である、卽ち相良庄兵衞兼ての大願を達したのでございます、サア斯うなると何でも勝手、何事も、何人も、自分の足下に見えてくる、現金なものでございます。

しかし庄兵衞も滿更昔時を思ひ出さずには居られない、嘗て三方軒へ午飯を食ひに行つた時であつた、成功をしたともあつたが、其以來さん〳〵の失敗を重ねた揚句の果に、種々の事を胸に浮べ、忌々しさに取引所の方を瞰みつけて、怨んでみたこともあつたのだ、其時自分の心の裡に、更にさらに再擧を圖つて、是非新規の成功をし、自分を輕蔑してゐる奴原に、大鼻を明かしてやりたいと考へてみたこともあつたのだ、其自分は今何うである、悉く本願を達して今日の返り咲、最早斯うなれば思ひのまゝだ、氣にくはぬ奴原はドシ〳〵追拂ふに若くはない……。

何うしやうと此うしやうと出來ぬ事はないと見極めがついたから、庄兵衞は第一に由利を追拂つて、それから矢野に命じて大木攻擊の筆鋒を振はせ、羅馬問題に就いて大木が首鼠兩端の說を持してゐると書立てさせた、卽ち今度は兄に向つて、斷乎として戰を宣したのだ、それから段々筆を洗つて、攻擊の矢を猶太人經營の高等銀行に及ぼして、遂に年來の仇敵たる郡代一家をも攻擊するに立至つた、

萬國銀行は今日殆んど不可思議的に、大々的勢力ある銀行となつた、此總ての耶蘇教徒に由つて支持される銀行は、何故に金界の覇者たり得ぬか、三年五年の内には郡代一門の銀行を全滅せしめて、取引所界金融界唯一の主權者たるに何の難きことやあると、庄兵衛は大の得意、頻りに郡代を相手に取り對等の競爭者として戰爭を開始する積りでをります。

然るに肝腎の郡代は何うかといふと、三郎右衛門は至つて平氣、庄兵衛がヂタバタ騒がうと、萬國銀行が日の出の勢ひに見えやうと、蠅が頭の上へ留つた程にも思はず、彼は飽迄耐忍と論理に全力を使つてをりますから、何豈今に見ろと只默つて、時機を窺つてゐるばかり、萬國株が騰るのは誠に以て結構千萬、否不思議で面白いと、一つの手品でも見てゐるやうな考でをるのでムいます。

庄兵衛の性格は前申上げたやうなものであるが、偖て彼れ庄兵衛は、かゝる性格の爲に、好い位地も拵へ得るが、又一方此が爲に、悉く失敗を致すやうな機運をつくりまするので、要之短所長所と申すのでございませう、今彼は金は自在、何でも腹一杯にすることが出來るやうになつてるが、さて斯うなると、又他の慾念が生じて來て、何か珍らしい新しい、人の出來ぬことが行つてみたい、中々凝乎としてゐられない、そこで、何方へ其慾が向いたかといふと、御多分にもれずこれが女色の方へ向つたのでございます、其後彼のかつ子の方は如何なつてゐるかといふと、彼女は此頃は心に傷ましい厭な事があつても、顔には務めて笑を見せて、凛々しく庄兵衛に對してゐる、庄兵衛もかつ子は恐れ憚つて、相談相手の友人にしてゐるといふ風で、其以上の親愛はございません、それから三田男爵夫人にも、此節は倦きが來て、宛然氷のやうに冷たくなつてる、尤も此頃庄兵衛は只もう金錢の慾の方にばかり頭腦を使ひ、非常に忙しくつて些々たることには心を向けず、只だ何かなしに、一つ大きな事をして心持を晴らさうと考へてをりますので……、そこへ女といふ考が生てくると、自分は今何百何千萬といふ金が自由になる身だから、一つ極高い價の女を買つて、巴里中へ自慢をしてやらうと、宛然襟飾へ大きなダイヤを着けて自慢にしたい考へと、同じ淺墓な考へを拵へたのでございます、第一然うすることは一つの大きな廣告になる、一人の一番立派な女に、大概の人の出せない大金を出せば、夫れ丈が既に廣告になつて、自分の實力も富力も人に確認させることが出來るのだと、愚なことを考へたもので。

そこで庄兵衛、彼れかこれかと撰つた末、札を落したのが十條夫人、十條夫人とは夫人の家へ侍政治郎と一緒に招ばれて、二三度晩餐を食つたことがある、年齡から云ふと最早三十七の姥櫻だが、見たところ重々しい如何にも立派なところがあつて、美しいことは勿論だ、殊に同夫人が非常に世間の評判になつてゐる其仔細は外でもない、同夫人から一夜の愛を買ふ爲に那翁現皇帝が十萬圓を擲つたといふ珍事實、そればかりか、夫であるといふ役目より他には能の無い亭主殿十條芳麿も、女房の御蔭で高等の勳章を授かつたといふ事があるので、それからいたして夫人は大變な世間の注意を惹いて

をるのでございます、此夫婦は樂々と此世を過してをり、始終方々へ顔をだし、貴顯紳士は勿論宮中へも出入して、相手の好いのを見つけては内々持かけるやうにしてをりますので、亭主殿は一ケ年に三晩か四晩で滿足するといふことなのでございます、此女が庄兵衞に相手になつたのだから、庄兵衞は恐ろしい高い値段を拂つたに相違ない、庄兵衞は皇帝の喰かけといふところで、一層氣を苛つて詰らない妄念を起したので、交渉が始まつたところが、夫人の亭主殿、庄兵衞が兎角の評ある金界の人物で身分が餘り高くなく、又隨分不德義千萬な素性の男だといふので、大に値段を釣上げて、纔と二十萬で手を打つたといふ、虚か實か判らぬが人の取沙汰でございます。

十五

恰度此れと同じ時でございました庄兵衞が豫て心を燃やしてゐた彼の小山のおすぎが斷然と庄兵衞の意に從ふのを斷つたのは……、庄兵衞は幾度となく笛田町の小山の小間物店へ出入りして、いろいろの買物をしたり、物を與つたり、切々と心を運ばして居つたのだが、今度到頭斷然と跳けられて了ひました、

『私は嫌、どんな事があつても貴郎は御免。』

おすぎが一度嫌と言出すと、それで事は極つたも同樣で、何んな事があつても思ひ返さない、

『だつて何故？　ハ、ア然うだ、私は看た、和女が一日林町の一軒の家から、或男と一緒に出て來たところを見た、それでゞすかね？』

素破拔かれておすぎは颯と顔を紅らめたが、それでも依然庄兵衞の顔を見詰めたまゝでをりまする、此林町の家といふのは庄兵衞の云ふ通り、おすぎが取引所の滿更でない若人や何かと密會をするときに使ふ場所で、おすぎの懇意の或婆さんが有つてゐる家でございます。

『瀨藤團吉といふ若い人、それが和女の情夫なのだらう！』

おすぎは何處までも嘘だと言張つた、否自分は情人などは有つたことはない、二度と一人の男に逢つたことはない、只仲の好い友達交際……と、どこまでも言張つた。

『ぢや何かへ、私が年齡を取つてるから嫌だと、斯うお云ひのだね？』

と問懸ると依然おすぎは笑ひながら、

『御戯談を、もつと年齡を取つてる人でも、又もつと醜男でも、私は言ふことを聞くかも知れません、お金の無い貧乏人でも場合に由つては私は惚れます。』

『ぢや何故私は嫌なの、何故嫌なのだか云つてごらん。』

『何故ッて貴郎、他に理由はありません、何だか貴郎は私氣が向かないから、嫌だと御斷り致しますの、何んな事があつても私はいや。』

斷然と斷つたが、夫でも氣の毒らしい顏容をしてゐる、庄兵衞は堪らず何處までも、

『御禮をする、御禮は幾らでも出す……、千圓てば千圓でも上げる、二千圓なら夫でも宜しい、纔た一度、只纔た一度限り……。』

段々値段を糶上げていつても、おすぎは何しても諾と云はない、笑つて相手にしないでをります、さうなると此方も意地、

『ぢやア何うだ一萬圓、二萬圓出さうッ。』

おすぎは自分の手で庄兵衞の金高を示す手を遮つて、

『一萬でも五萬でも十萬でも、山程積むと仰有つて下すつても、私は御免を被ります、もう御止しなすつて下さい、御覽の通り私は指輪一つ有つてゐない貧乏人でございます、他人樣が種々の品物だのお金だの、何でもかでも欲しいものは望次第與ると仰有つて下さいますが、私は今此世を幸福に暮して行けてるのでございますから、別に何にも欲しいものはございません、私共は今別に薄命といふ程の身でもなし、これでも末始終は纏つた御金を溜て、樂に暮したい考へでをりますんです、マア御蔭さまで旦那樂も御贔員にして下さいますし、其日の生計も不自由はございません、此が私が獨身者とでも申すのなら又考へてもみませうが、何しろ貴郎の御意に從つて、十萬圓頂かうと、百萬圓頂かうと、良人へ見せることも出來ませんし、良人だつて夫を承知して取るやうなことは致しません、誠に御氣の毒樣でどうも……。』

おすぎは飽迄も言ふことを聽きません、庄兵衞も意外、これから一と月許りの間、寄ると觸るといろ〳〵に口說いたが、女は笑つたまゝ巧く外づして、それも誠に氣の毒らしい風をしてをりまする、流石の庄兵衞も考へた、ア、金錢の力でも儘にならぬか、おすぎの奴、他の男には一文なしで身を任せるといふのに、此自分は馬鹿々々しいほど金を積んでも、まゝになることが出來ぬ嫌だといふ、苦手か、本意か、其意志を抂げさせるのは、我が力にも及ばぬか、金の力でも出來ぬのかと、金の力なら何事をも爲し得ると思つた庄兵衞、心に猛り立つてみたが、どうも此上仕方が無い、到頭おすぎの事はそれなりで泣寢入になつて了つた。

其飛沫もありはするが、金の猛力で是非一つ偉い大きな女を手に入れて虛榮心を遂げやうと、考へついたのは卽ち十條夫人、こゝに庄兵衞、遂に人の出來ぬ人のせぬ事をやつて、相良一生の最大虛榮心を充たした、といふのは外でない、一夜外務大臣が、博覽會で集まつてゐる各國名士の爲に、官舍に大夜會を開くことになつたが、庄兵衞は此日こそ思ふ存分のことを行つて見せやうと計畫んだ、當夜の、時刻もハヤ十二時になん〳〵とする頃には、大臣官舍の大舞踊室は、皎々たる各種の火光の下に燕尾服やデコルテーで押かへされるやうな盛であつたが、そこへ乘込んで來たのは庄兵衞、左の腕には十條夫人を携へてをります、で其後方を見るといふと、夫人の良人十條芳麿がノタリ〳〵と踉い

てゐる、誠に御苦勞な譯でございます、二人が入つてくるのを見ると、人々は皆遠ざかつて、道を開けて通します、二人の關係は知れてゐるから、目ひき袖ひき注目を致す、二十萬圓の女！　そんな金を一夜の慾望の爲に惜氣もなく擲つ男！　それが今臆面もなく斯うやつて人中を此見よがしに練つてゐる！　實は一大恥辱だが、本人は至つて得意、人々は終には、コソコソと笑ひ出す、低語く、餘り眞面目を外れてゐるから怒る値打もなく、面白半分に素見しはじめる、

女の匂や香水や麝香の香に、樂隊の囃したてる音が交つて、人々は打興ずるのでございます。

が、此時舞踊室に續いてゐる一室の奥の方を見ると、白い軍服を身に纏つてゐる體軀の大い立派な一人の男を、多勢の客が圍繞いてガヤ〳〵とやつてをります、誰かと思つて見るといふと、其人は名におふ獨逸のビスマーク伯（譯者云、當時は鐵血宰相ビスマークは未だ若い伯爵であつたのです）身高が高くつて、頭部だけ諸人の上へ出てゐるから能く判るが、例の大きな眼玉に厚い頑丈造りの鼻、力の籠つてゐる腮容に嚴めしい無作法の髯があるので、猶々それとよく判る、近づいた人が何か笑戲話を仕懸けたものと見えて、大口を開いて笑つてをります。

庄兵衛が、意氣揚々と十條夫人と手を打組んで亭主を尻に隨へて室の中央をビスマークの居る方へ行くと、人を輕侮したやうな大きな體軀のビスマークは、笑つてゐたのを一寸止めて、不思議さうに二人を視てをりました。

成金

一

かつ子は又もや一人になつて了つた、十一月の初めまで敏之は銀行の資本增加に伴ふ種々の手續を盡す用向で、巴里に滯在いたしてをつたが、用事が濟んだので再び東歐の起業地へ引還したので、で此銀行資本增加に伴ふ手續と申すのは卽ち法律上の申告、增加の株が悉く引受けられたこと、資本が

拂込濟になつたこと等を、例の船越役場で登記をすることであるが、實は株が悉く引受濟にも拂込濟にもなつてゐないのを、誤魔化して登記を致すのであるから、庄兵衞自身は其樣な場所へ出たくない、そこで又しても敏之に行かせて、手續をさせたのでございます。

此んな用事を了つて、敏之は先づ以て伊太利の羅馬へ向つて出立したが、羅馬には二ケ月程滯在した、羅馬での用向は何かといふと、豫てから夢想に抱いてをる羅馬法王廳を東歐ジエルサレムへ移すといふ論を鼓吹することゝ、猶一つは、もつと實際的の希望卽ち、萬國銀行を耶蘇敎專門の大銀行にして全世界の同敎信者の味方を作り、宗旨の力を利用して賴つて以て彼の猶太人の銀行に對峙し遂には彼等銀行を掃滅して了はうといふ、此二つの目的を以て行つたのでございます、羅馬で此んな用向を足して、それから一先づ東歐へ立歸らなければならない、それは其處ではブルス、ベイルー間の鐵道工事に關して敏之を待つてるからでございます、敏之は今度巴里へ歸つて來て萬國銀行が非常な進歩をし隆盛を極めてゐるのを目の前にして、最早これでは總ての基礎も定まつて此上心配することは無いと思つて、悅んで巴里を立つたのでございますが、併し餘り成功が疾過ぎ且つ大き過ぎるので、それが一方危險な心配なやうな氣も起した、であるから出立の前夜、妹と種々の話の時に、若し庄兵衞が圖に乘つて馬鹿々々しい事でも仕さうな場合には、側から極力注意し諫止することゝ、それから株の値が二千二百圓の上へ出るやうな事があつたら、そんな騰貴は理不盡不自然な相場で、危險な意味を含んでゐると斷定して宜いから、直と賣つて了ふと、こんな事を妹と申合せて、而して出立を致したのでございます。

二人の時は宜かつたが、一人となると周邊の火がついてゐるやうな熱い空氣が餘計感じられて、かつ子は苦勞になつてならない、十一月の初めの週間には萬國株は到頭二千二百圓の相場に達して了つた、周圍の人々の容子を見ると、誰も彼も歡喜感謝に充ちてゐる、例の米本は嬉しくつて體軀が溶けさうになつてゐる、芳村家の母子は御蔭で復昔しの家產の家柄になれるといふので、庄兵衞やかつ子を神のやうに思つて蔭膳を据ゑてゐる、其他上等社會中流人士、嫁入の準備金に困つてゐた姫達、急に金持になつた貧乏人、金持は金持で資產が又殖えるといふので、四方八方有難い々々といふ歡聲だらけ、前申上げた通り、博覽會で巴里の人心が浮立つてゐるから、此頃は諸公債諸株券は悉く騰る一方、平時棄てゝ顧みられない不人氣の株券さへも、買人が現るといふ有樣、何しろ常識にも道理にも外れてゐる昨今の株式界である、只さへ其樣な風だのに、山師的に出來上つてゐる萬國銀行の株が斯うトントン無茶苦茶に騰つてゆくのだから、事情を知つてゐるかつ子は內心氣が氣でない、今日まで未だ何の可厭な風評は立たずにゐるが、一朝不信の聲が立たうものなら、大破綻大倒潰は必定、其慘害の及ぼすところ甚大なものであらうと、思ふとかつ子は胸を轟かさずにはおられない、毎日ビク〳〵してをりまする。

かつ子は此んな心配で時を送つてゐる其一方に、猶一つ心に懸かる事がある、それは養育院に入れてある幸吉のこと、此頃幸吉は少し陰險にはなつたが大層物靜になつて、品行も幾分改良し人々も滿足してゐるといふことで、かつ子も少しは安心してをるのであるが、庄兵衛には幸吉の事は未だ話出さない、何だか話出しにくい、滅多に話をして恥をかゝせても惡いと、日一日と延ばしてゐるのでございます、幸吉をおせんから引取るに差當り要つた金子の二千兩は政治郎から借出したが、其金は先達て自分の懷中から返して了つた、政治郎は、未だ殘金四千圓を間齋とおせんが請求するだらうが彼奴等は貴女から金を强奪しやうとかゝつてるので、其事を父が聞いたら怒るだらうが貴女は此から如何すると云ふと、かつ子も、爾う思つてゐるのだから固より拂ひたくないつもりと、返事をいたしてをりました。

果して間齋は默つてゐない、幾度となく殘金請求の催促をかつ子へ寄越したが、かつ子は馬耳東風と閊流して、相手にせぬでをりました、間齋も到頭怒つて了つた、殊に庄兵衛其者の昨今は昔時と違つて位置も高まつて全盛を極めてゐるのに、知らぬ顏をさせては置けない、こんな好地位に坐つてゐるのだから脅迫すれば恥辱を顯すのを好むまいから金を出すに相違ない、こんな好い儲口を打棄つては置かれぬと、こゝに間齋意を決して、直接に庄兵衛へ談判を持出すことにして、先づ以て書面を送つた、其書面には突如幸吉の一件を書くのも反つて善惡だから、原居町の或家で如此いう古い書付を發見けたから序のせつ御足勞ながら事務所へ寄つて頂きたいと、極不得要領の文言で、暗に相良の舊時の素狀や品行を仄めかして、是非來なければ飛んだことになるぞと云はぬばかり、それを書留で送りました。

二

此間齋の手紙が山屋町へ配達されたときに生憎庄兵衛は不在で、手紙はかつ子が受取つたが、かつ子は間齋の手蹟を知つてゐるから、手に取る匆々胸にギックリ、今迄隱しておいたことが知れるのは面白くない、これは大急きで間齋の所へ行つて金を拂つて、落着をつけて了はうと、鳥渡思案をしてみたが、イヤ待て、此手紙は他の用事の手紙かも知れぬ、露顯たらばれたとして兎も角も成行に任せやうと、知らぬ顏をしてゐると、夕方になつて歸つて參つた庄兵衛、かつ子の前で手紙を開封いたしたが、見ると、顏の色が少し變つて眞面目になつたきり、別に大した驚愕の色を見せない、そこでかつ子は、こりやア大方、何か他の金の錯雜事でゝもあるのだらうと、思つて了つたのでございます。

が庄兵衛其人は何うかといふと、內心非常の驚愕で、咽喉を扼められるやうな感じかた、夫も其筈、拙くすると舊時の身の素性が悉く世間に暴露されて了ふので、殊に間齋のやうな穢ない人間の手にかゝつたら何をされるか判らないから、愕からざるを得ないので、が表面は何處迄も落着いた風をして、

手紙を其まゝ衣嚢へ入れて、これから何處か約束のあるところへ行くのだと、再びプイと出懸けて了つた。

其後幾日か經つて、十一月も半ば過ぎとなつたが、庄兵衛は未だ閒齋の所へ參りません、實は毎日毎日行かうとは思ふのだが、攻めかける來客にッイ妨げられて果さない。

此方に萬國株は遂に二千三百圓といふ高値に達した、庄兵衛は大滿足、嬉しくつて溜らない、が、併し此頃は株式界の何處かに、値が騰る度毎に何か奥齒に物が挾まつてゐるやうな感がする、必定賣屋の一團が密々策略を運らしてゐるに相違ない、弱氣の連中が萬國銀行攻擊の準備をして、豫備的の行動を仕始めたものかもしれぬと、斯う考へたから庄兵衛は、二度に他人の名義を使つて、萬國株の多額を買はせた、正當防衛と云へば其れに相違ないが、銀行が自分の行の株を買ひ自分の株で相場をいたすといふこれは卽ち一箇の犯罪、此犯罪的の所業は庄兵衛そろ〳〵此時あたりから行りだしたのでございます。

餘り此事を考へ過ぎて腦裡を煮くら返さした庄兵衛、或夕かつ子に漏して了つた、

『何うも反對の連中ヤキモキ溜らなくなつて來たと見えて、種々行動をやつてるらしい、我々の勢力が餘り大きくなつたので彼奴等は大に我輩共が幅ッたくなつてきたのだらう、どうも此本尊は郡代のやうだ、郡代の策略に違ひない、彼奴これから漸次手勢を揃へて賣始めるに相違ない、今日は幾干明日は幾干といふ風に漸次枚數を增して賣つて、終局には此方を陷落して了はうといふ計畫に違ひない、かつ子さん和女然う思はんか？』

此時かつ子は更めた言つきで、

『そりや然うでございませう、ですが郡代さんが萬國株を有つてゐなさるとすれば、御賣なさるのはそりや當然と申さなければなりません。』

『エ當然？　何故？　何故賣るのが當然？』

『何故ッて、御道理でござんすわ、兄も貴方に申上げたでございませう、相場が二千圓を超えればそれは最早不自然不條理の相場だと申したことがございませう？』

此言葉を聞いた庄兵衛、少し呆氣に奪られてかつ子を見てゐたが、赫として我を忘れた、

『ナニ不條理の値だッ、何が不條理！　宜しい、宜しい、そんなら賣りなさるが宜い、勝手に賣りなさるがいゝ、僕に反對して賣るがいゝ、到底僕は何うなつても構はんのだ、僕の失敗を和女方は喜ぶのだらうッ。』

かつ子は顏を赤くしない譯にはいかない、何故かといふと、實は昨日、現に兄の意に隨つて所有株の內の千株を賣つたので、自分も內心マア〳〵宜かつたと思つて居るところなのだからでございます、何といふかとかつ子待構へてゐると、庄兵衛は別に其上を訊ねないから、かつ子も賣つたことを話さ

ぬでゐると、庄兵衛が此んな事を云つたので、かつ子は胸を轟かせた、

『昨日も斯ういふ事があつた、萬國銀行の纏つた千株といふものが賣りに出た、幸にして僕が聞付けて下落を喰止める策を講じたから宜かつたが、さもないと相場はグッと落ちたのだ、誰が賣に出たのか判らぬが、確に郡代ではないと考へる、郡代の行法は然う急激にはやつてこぬ、細く長くやつて、敵を惱ます筆法だ、マア安心はしたものゝ、考へると生命よりも金を守る方が難かしい……。』

庄兵衛は全く知らずに云つたことだが、謂はゆる前日に於ける纏つた千株の賣は自分なのだから、かつ子は黙を指されて胸にギクリ、こたへぬ譯には參りません。

三

庄兵衛は實際此時から、全く金錢といふものにとらはれて、自分といふことを忘れて了つた、自分自身がこしらへた何百萬といふ金の奴隷となつて了つた、今は兎も角當つてゐるから、意氣揚々として居てもいゝのに、矢張身を忘れ心を忘れて、其金に滅ぼされて了ひはせぬかと、頭腦は金を支持することに增殖することにばかり齷齪してゐる、金の慾は一方を滅して、色氣の方は大分御留守、此頃は三田夫人に逢ひにゆく時間も惜しい、尤も三田夫人にも最早大分倦氣が來たのだ、殊に此に夫人に大に愛想の盡きたことがある、といふ其理由は他でもない、恰度神村と自分の間に在つたやうな出來事が自分の番にも回はつてきたのだ、或日のこと、庄兵衛下女の痴鈍なのから、通されるまゝに夫人の室へ入つて見ると、夫人は阪谷の腕に恁りかゝつて何やら睦みあつてゐるところ、夫人が口を酢くして只ホンの珍らし半分巫山戯たに過ぎぬと辯明を致したので、其場はそれで濟みはしたが、庄兵衛夫からといふもの餘り氣乘りがせず、夫人とは稀時にしか出會を致さなくなりました。

こんな事があつた爲に二人の情合も薄らいでくる、サア相場上の相談相手杖柱とも頼む人が無くなつた譯だから、三田夫人は木から墜ちた猿も同樣、何にも此にもすることが出來ない、時稀庄兵衛に相談しても、先時の通り云つてくれぬ、くれても嘘を云ふかも知れない、其證據には一度庄兵衛の云ふ通りにして、損をしたことさへあつた、サア然うなると信用もなくなる、心細くつて溜らないから、誰か新しい相談相手をと、三田夫人此頃は頻と相手に迷つてをります。

夫人は漸くに考へついて、札を落したのが希望新聞社の矢野龍吉、然うだ彼れの位地が位地である、種々聞出すには持つてこいだと、そこで一日新聞社へ訪ると、矢野は早速逢つてくれたが、夫人は當初から本題へ立入つて、

『ねエ矢野さん、萬國株は其後もズンズン騰り續けで、今日も二十圓も飛上りましたね、一體宜いのでござんせうか、其癖、斯うと云つて取纏つたのぢやござんせんが、面白くない噂もチラホラ立つてるやうでござんすが？』

矢野は困つた、何うも御返事が出來ない、自分は斯んな職業だから、世間の風評の出所で、又必要があれば先へ立つて其風評を拵へもするが、譬へば時計屋の親方同樣、何の時計が正確な時刻を示してゐるか判らない事がある、そりや職業柄いろ〳〵な事が耳へ入るに相違ないが、一方のを信ずれば白くなるし、他方を實とすると片ッ方が黑くなる、何方を事實として宜いか判らぬと話して、

『私にやどうも判りません、些とも判りませんですなア。』

『アラ、判つてゝも貴郎仰有つて下さらないんでせう？』

『如何致して、全く知らんのです、嘘ぢやありません、私の方から貴女の方へ伺ひに上らうと思つてる位なのです、だが貴女、相良君は最早御止め？』

夫人は容子で見せて御察しの通りとばかり、兩方で嫌になつた、嫌はれた女、冷やかになつた情交、どうも仕方がないといふ。

矢野はヂロ〳〵夫人を見てゐたが、腦裡に一つの計略が浮んできたから、急に言葉を續けて、

『ねエ夫人、貴女相良君に嫌はれたら、どうです一つ郡代と關係をおつけなすつたら、エ？』

流石の夫人も此意外の言葉に驚いて、少し默りかへつてゐたが、やがて、

『郡代さんと？　何故ですか？　私は郡代さんとは極淺い懇意ですが、識つちやアをります。』

『極宜うございます御存じならば、何とか言前を拵へて、行つて逢つて御覽なさい、ちよい〳〵逢つて親しい間柄になつてさ、宜うがすか、郡代に關係をつけて、一緒に世界を股にかける、愉快ぢやございませんか。』

すると夫人は又繰返して、

『ですが何故貴方郡代と仰有るの？』

此に於て矢野は說明して、昨今萬國銀行反對派があつて、銀行を倒さうとかゝつてゐるが、其發頭人は郡代其人、卽ち郡代は賣方の大將だ、此には確な證據がある、今相良が貴女に對して以前のやうな深切がないならば、一番好い考案は款を反對派たる郡代に通じて、此と結びつくに在る、固より相良との關係は全然其まゝにしておく事、然すれば所謂兩天秤、何の道損

はいかぬ方法、私が貴女なら然うすると、矢野此反逆を大層深切な積りで夫人へ言聞かして、そして、其樣な風に貴女が行つて下されば私の新聞も好都合、私も出來るだけ貴女の御利益になると、言葉巧に說付けた、相良の手下である彼れ矢野、隨分惡黨でございます。

『夫人御解りですかね、御互に一緒に行らうぢやござんせんか、御互に注意し合つて、聞出したことは何でも言ひ合ふ、宜ございますか。』

漸次巧妙に話込んで、矢野は遂に夫人の手を執つて接吻すると、夫人は默つてさせておく、最早慾得の事で力にしやうとなつて了つたのだから、矢野が舊時家來も同樣な身分であつたことなどは忘れて了ふ、それどころか、昨今金の回はるにつれて酒色に荒んでゐることも問題外にして、場合に由つたら身を任せてもと、三田夫人心の裡に思つて了つたのでございます。

四

三田男爵夫人は翌日匆々、郡代を訪れた。

郡代は萬國株が二千圓の相場を超えたと途端に、人の噂の通り全く賣方の態度を執つて作戰計畫を始めたが、其計畫は頗るの秘密を守つて、自分自身で場へ參らぬのは固より、代理すらも出しません、一體彼れ郡代の稱へる商内の理論は斯ういふので……、凡そ株といふものゝ價値は第一に其發行價格が基になる、それから其に伴ふ利分がついて、加はつてゆく順であるが、此利分は其會社事業の盛衰と成功不成功に由つて定まるものだ、かゝる標準があつて後始めて相場は生てくるもので、無暗矢鱈に高低の生てくべきものでない、卽ち騰るにしても道理上夫より上へは行けぬといふ最大制限額があるものだ、而して其制限額を超過すれば、夫以上は卽ち人工虛僞の騰貴で、悧巧に行かうと思ふなら、其時を以て弱氣に回つて、賣方に出ることだ、然うすれば屹度損は無い、損が無いどころか必定儲かる、これが間違の無い理論で、又實驗に徵しても明かだ……、とこれが郡代の守る主義、然るに此に不審しいのは相良庄兵衞の急速な成功、相良は一朝にして偉くなつたが、これは實に不思議千萬、猶太人の銀行は皆舌を捲いて驚いてる、此危險な競爭者はどうしても一時も疾く倒して了はんければ相ならぬ、之を金融市場から驅逐して、サドワ一件に八百萬の大損をさせられた報復をせねばならぬ、先づそれは可としても、此世界金融市場の覇主權を、彼樣な成上り的猪武者の相場師と兩分して有つてるなんど、不見識の極りだ、何しても疾く退治して了はんければ相ならぬ、あんな冒險者は何んな事をするかも知れぬ、理屈にも、善良の習慣にも、逆つて行るのだから、まかり間違つて或點まで成功をするとも限らぬ、が何の途永遠の成功を收める理由は無いのだから、此方が城を堅く守つて持久に出さへすれば宜い、算盤球で進めば宜い、飽迄も冷靜な數字を基礎にしてやるばかりだと、郡代三郎右衞門相場はドン〳〵騰つてゐる一方だのに、平氣でもつて賣つてばかり、受渡日に損する高は

並大體のものではないが、何豈こりやア損ではない、安心な金庫へ貯金をしてゐるのと同じだと、泰然と搏へてをります。

三田男爵夫人は案内されて郡代の居間へ通つたが、例の通り種々の使用人や才取りやが出たり入つたりして大混雑、机の上を見るといふと、種々雑多の文書や電報が、山の如くになつてるかと思ふと、取亂かしたまゝにしてある、此混亂の裡に、銀行大王郡代は、恐ろしい咽喉加答兒で、咽喉を掻むしられるやうに咳嗽で苦しんで、ゴホン〳〵やつてゐる、大層惡いやうだから今しがたでも出勤したのかと思ふと然うでない、今朝も六時といふ疾い時刻から出勤してゐて、咳嗽をせき痰を吐いて苦しんで、最う大分身體も疲れて居るらしい、併し弱つた景色は更に見せない、此日は明日或外國公債の募集を發表するといふので、廣い此一室も其用向の來客で一杯、應接には子息二人と女婿が一人出てをるが、中々緩くり話などは致して居る譯にはいかない、一と言か二た言素通り同樣で、順々に引下つて了ふといふ有樣、そんな所だのに、室の突當りに別に机が一つ置いてある其側の窓へ寄つた方に、幼けない孫娘が二人と男兒が一人、人形の腕も脚も捩取つて了つたのを奪合つてをりまする。

突然此方の思ふ事を云ふのも工合が惡いから何か言前を先へ云はうと、考へておいた夫人は、郡代の前へ座つて、直と拵へ文句を發言した、

『御忙しい中を御邪魔に出まして誠に恐れ入りますが、實は自身上りましたのは、或る慈善事業に就きまして御加勢を得たいと存じまして……。』

郡代は夫人に冗長々々言はせない、慈善は誠に善い事だ、切符の二三枚なら何時でも引受ける、識つてる貴婦人方が態々來て御話出があるときは無論御引受を致してをると、疾く話を片附けて、歸さうとしてゐると、此時書記がやつて來て、何かの事件に關した書類の一と束にしたのを差出したので、郡代は夫人に會釈して、其方へ顔を向けた、聞いてゐると主從二人は、早言で明瞭とは判らぬが、何か大きな數字を云つてる、

『五千二百萬圓だつて？　フム、而して其に對する貸は？』

『六千萬圓でございます。』

『可し、では其を七千五百萬迄にしろ……。』

此話が濟んで郡代は、又夫人の方へ向き直つて、更に話を始めかゝると、此時側で女婿が一人の才取りと話をしてゐた其言葉の内に、默つてゐられぬ事があつたと見えて、急いで起つて其方へ口を出す、隨分用意周到だが、反對に夫人の方は好加減。

それでも、何うも此室にゐると全然話が出來ないから食堂の方へ行つて話をしやうと、郡代は夫人を促して食堂の方へゆくと、食堂には最早整然と午飯の膳立が出來てゐる、郡代もさるもの、今日三田夫人が斯うやつてやつて來たのは慈善の事の爲などではない、本當の用向は他に在ると、チヤンと

見拔いて知つてゐるので、それから、自分の手で探つて知つてるが、夫人は相良と關係してゐるといふから、今日夫人がやつて來たのは、何か重大な利益問題に餘儀なくされた爲だらうと、郡代早速に見て取つた、よしそんなら話を聽取つて此方の使ひ途にしてやらうと、そこで忙しい中を別室へ通し、て、聞かうとしたのでございます、然う思つて了つたから、郡代は最早遠慮をしない、短刀直入にきり出した、

『サア三田さん、御用といふのを承はりませう、何でも宜しい伺ひませう。』

五

サア御用向はと更めて訊かれて、夫人は態と驚いた風を作つた、

『何も別に用程のことはございません、只今しがた御願した其事だけ。』

と折返すと、

『そんなら貴女は人に賴まれて其用でござつた譯ぢやないのですか、ハア然うですか。』

と郡代は少し案外、郡代の考へでは、彼の愚な相良の奴め、屹度何か思ひ付いて、夫人に內密に言含めて、夫人は其使にやつて來たのだと、然う思つてゐたのでございます。

今二人は他に誰も居ぬ差向ひ、玆に於て夫人は殊更に微笑を浮べて、從來多くの男子を惱殺した妖艶の眼容で、郡代に秋波を送りながら、

『否、他に何にも申上る事はございません、只御禮を申上るばかりでございます、が、其御深切にあまへるといふ譯ではございませんが、只今となると少し御願申上げてみたいと存じます事がございます。』

云ひながら彼女は郡代の方へ膝を進めて、談話も共に進めました、虛實取交せての身上話し、自分は早く或外國人と結婚したが、其人と氣が合はず、加之充分の小遣錢さへ當がはれない貧乏家政、身分の體面を保つてゆきたさに、小遣錢取りに仕方なく、相場へ手を出すことゝなつて、それを行つてはゐるものゝ、良人は然ういふ人物だから話相手にもならず、獨身者同樣の物淋しさ、一體取引所の事共は恐ろしいこと怖いこと難かしいこと許りで、到底女一人ではゆかぬから、誰か一人相談相手、監督者となり後見者となり側で自分を見てくれるものがあれば可いと思つてゐると、此んなことを談しをすると、郡代腹の裡で笑ひながら、

『だつて私は貴女に然ういふ人が一人御有んなさると思つてゐました。』

夫人は輕侮の色を見せて、

『私に？　何してあつて宜いものでござんすか、其樣な人は一人もございません、私は、實は私は貴方になつて頂きたいと存じますのです、貴方を主人と仰ぎ神と敬つて、貴方の御命令なら何でも背か

ないでやつて行きたいと存じてをるのでございます、貴方に私の力になつて頂きたいッたつて、何もお金を出して頂かうのどうのといふのではございません、只時々纔か一ト言二タ言御助言を頂けばそれで宜しいのでございます、本當に貴方が御聽屆け下すつて私が幸福な身になりませば、何んなにか嬉しうございませう、御恩は一生忘れません。』

夫人は漸次郡代の方へ體軀を寄せて、總身から外へ出す其生溫かい呼吸や佳い强い香を吹かけて、相手を包んで了はうといたしてをるので。

が此方に郡代は至つて平氣、かと云つて此方から嫌つて身を遠のくことも致しません、宛然肉が死んでるやう、死んでる灰も同じ事、全然冷かでございます、而して夫人が喋つてるのを聞きながら、自分は卓の上に在る水菓子鉢から力の無い指で葡萄を挾んで、一つ一つ拐り取つて口へ吸つてをりますが、其擧動はまるで機械が働くやう、一體郡代は腸胃が持病で、牛乳の外禁じられて、自分も中々養生に務めてゐるのでございますが、葡萄一つ二つ位の不養生は何も差支はなからうと、自分も承知でしてゐるので、それでさへも後になると、胃に障つて飛んでもない苦しみを致すのでございます。

郡代が相手にせぬ色を面に顯して笑つてゐると、三田夫人は何かして男を陷れやうと、心に火を燃やしてゐるのであるから、此時故意とらしくなく自然のやうに、自分の手を男の膝へ持つていつて置きました、細いが執念が籠つてゐる手、宛然蛇が蜷局を卷いてをるやうなものでございます、郡代之を如何するかと見てゐると、揶揄半分でございませう其手を一遍執りは執つたが、折角だが返上する無用な御進物は頂かぬでも宜いとばかり、頭容と眼容で夫人の手を追やつた。

最早此上時間を潰すのは馬鹿げてゐると、遂に又もや單刀直入、

『いや誠に好い御心懸けだ、至極御同感、私も何とか御役に立つやうにしませう、就てはこれから斯うなさい、貴女の方から私へ何か聞込んだ好い話を持込んでいらッしやい、然うすれば私も屹度それに代るべき好いお話をして上げる、可ございますか、世間で何をしてゐるかを探つて、そして其を私に御話なさい、然うすれば私も私がこれから如何するといふことを貴女に話をして上げる、ねえ、おわかりになりましたか、然ういふことにして御約束をしやう。』

夫人が解つたとも承知したとも返事をせぬ内に、獨りで極めて呑込んで、起上つて了つたので、夫人は何うすることも出來ない、一緒になつて元の座敷へ戻つたが、郡代の本意は大概判つた、何くれとなく相良の方の事を內通しろといふのだなと、夫人は悟りは悟つたものの、固より明白地にそれに答へることは出來ないから、好加減に話を濁して、遂に此家を立去つた。

郡代は夫人を送り出す側からはや、既に他の仕事に取かゝる、相變らず室內は取引所や財界の人間で一杯、こゝへ樣々の使用人がやつて來る、周邊では幼兒が遊ぶ、騷ぐ、人形の首を引こ抜いて萬歲を

さけぶ、いやもう中々の喧騒、其中に郡代は小さな卓に就て自分の考案に側目も觸らず、耳には何事も入らぬやうに、泰然自若としてをります。

六

其後三田男爵夫人は郡代と會見の結果を報告しやうと、二度ほど希望新聞社を訪れたが、留守で矢野に逢へません、其次に訪ねたときに、兎も角もと小使米本の案内につれて社内へ入ると、廊下の長床几に、米本の娘おなみと曾根の妻のまる子とが一緒になつて談話をしてゐる。

前日から間斷なしの大雨で、いとゞ濕ッぽい薄暗い古建物の社内は、彌もつて眞暗がり、陰氣なことは夥しい、日中ではあるが瓦斯の光も斯うなると寧ろ物淋しく、哀れ氣を感ずるくらゐだ、さてまる子は夫の悦良が又もや皆崎間齋に攻められて、内入金を入れなければならなくなつたので、其金策に駈ずり廻つてゐる其歸りを、今此社で待つてるところでございますが、居合はせたおなみにつかまつて、其情け無さゝうな愚痴を早生た生意氣な口調で聞かされてをります。

『と云つたやうな譯で、父は賣りたくないと申してをるんございます、なんでも父には、誰か一人智慧をつけて無理に賣らせやう賣らなければ酷い目に遇はせやうッて云ふ人があるんでございます、私は其人の名前を存じてゐますが申しません、ですがあんまり餘計の御世話ぢやございませんか、ねェ奥樣、私は一生懸命になつて父に賣らせないやうにさせてるんでございます、相場がドン〳〵騰つてるッていふのに、賣る奴がありますか、智慧の足りない人でなくつちや、そんな愚は仕ませんや、ねェ奥樣！』

『本當ねェ。』

『今相場は、二千何百圓といふのでせう？　父は些とも字が書けませんから、帳面へ記けたり勘定の事は私が扱つて行つてますが……、私共が有つてる株は八株でございますから、昨今の相場で勘定しますと、最早二萬圓になる勘定です、ねェ奥樣ちよいと可なりの金高ぢやございませんか！　父は最初は殘らずで一萬八千圓になりや賣つて了ふッて云つてたんでございます、私の御嫁入の持參金に六千圓、殘の一萬二千圓を自分の隱居料にする、これを五分の利息で勘定すると、年に六百圓、それでマア何か此か一生安樂にやつてく積りで居たんです、何です幸運ぢやございませんか、それを其時賣らなかつたばッかりで、今日の相場で勘定しますと、それが又二千圓も殖えてるといふ計算、だからさ貴女、此上又騰るに違ひないから、未だ賣らずに、猶且待つ方が宜ございさ、ねェ、父の隱居料にせめて年千圓は欲しうございますわ、千圓の利が入るやうに元金を拵へるのはわけはないと、相良さんは仰有るのですもの、本當に相良さんは深切な人だわね、ねェ奥樣！』

聞いてゐたまる子は笑はずには居られない、

『ハ、、、、ぢや貴女は何時までも御嫁きなさらないの！』

『否、嫁くことは嫁きますのよ、株が最早之ッきり騰らないと定つたときに嫁きますわ、諸人急いでをりますし、私の嫁かうといふ照藏の父などは商賣の都合もあるもんですから眞先がけに急いてるんでござんす、だけど貴女、金が湧いてくるのに、此方から好んで其湧く源を塞ぐこともありやしません、ねエ貴女、然うでせう、照藏だつて知つてますわ、父の方の收入が殖えれば殖える丈け其だけ商賣の方へ回はす金が多くなることは・・・、本當に考へもんじやござんせんか、然う思ふから急がないでゐるんです、六千圓なら最早疾に出來てるんでござんすから、婚禮はわけなしですが、少しでも多くしたい考へでね、それを考へてゐるんでござんす・・・、貴女はアノ、新聞の株の相場のところを御讀みなさいますか、エ？』

訊いておきながらおなみはまる子の返事を待ちもせぬで、

『私は讀みますの、毎晩缺かさず讀みますの、父は自分が晝間社で讀んで、其新聞を私に持つて來てくれますが、私はそれを猶一遍父に讀んで聞かせますんです、そりや本當に是非讀まなくッちやならない好い事だの樂みになる事だの御金の出來る事許り掲てゐますのよ、ですから私が寢にゆくときには餘まり頭腦が其事で一杯になつて、夢ばかり見るのでござんす、父も矢張然うで、夢を見ても好い事ばかり見るッて云つてるんです、一昨日の夜も然うでした、二人揃ひも揃つて或所の往來を掘ると、圓鍬に一杯一圓銀貨の新らしいピカ〳〵したのが出た夢を見ました、本當に嬉しうござんしたの。』

こゝで話に一ト息ついて、又おなみは訊いてみる、

『一體奥樣、貴女は幾株を有つて居らッしやるの？』

まる子は答へて、

『私達？　一株も有つてをりません。』

『アラッ！』

おなみは寧ろ罪の無い、小さな可愛い顏に、大變氣の毒だといふ感を顯はした、マア可憫想な人達、けふ日萬國株を一株も有つてゐないとは隨分ねエと、頻りに同情を表してをります。

すると此時父が出てきて、校正の數枚一緒にしたのを河野町に住んでゐる其擔任記者のところへ持たせてやる使をおなみに命令たので、娘はいそ〳〵として出ていつたが、おなみの心持は今は一廉の資本家の積りだから、愉快で嬉しくつて溜らない、彼女は此頃は大概毎日、新聞社へやつてくるが、これは一時も早く取引所の相場を知りたい爲からでございます。

七

一人になつたまる子、一體まる子は陽氣な堅實した性質の女であるが、今日は悉く物思ひに沈ん

でゐる、オー最う斯んなに暗くなつた、なんて厭な晩だらう、考へると本當に御氣の毒だ、此ドシヤ降りの最中に市中を駈回はつておいでなさる！お金が如彼に嫌ひな人、お金のことに關係うのを考へる丈けで最早嫌な思をなさるのに、それがお金を借りやうとする仕事だから、嘸辛いことだらう、貸した金を取るのでさへ嫌だと御思ひなさるのに、人から素手でそれを借りる！　何んなに切ない事だらう、察しると溜らないと、良人思ひのまる子頻に考へ込んで、もう何にも耳に聞えない、今日朝からのことを考へる、可厭な日だつたことを考へる、まる子の周邊は新聞社の夕方で最も忙しい盛り、大小記者の出たり入つたり、原稿の集散、商人の往返、戸はドタンバタン、呼鈴はチリン〳〵、職工の喧騒機械の音響、そんな

騒がしい音も響も、全然まる子には聞えません。

此日は朝からまる子に取つて誠に間の惡い日であつた、悅良は或る事件があつて自分が其探偵報告を書かなければならないので、朝九時から其方へ出向いたが、まる子が良人を出して寢衣も着替へず其まゝ顏を洗ふか洗はぬに、忽然やつて來たのが皆崎間齋、しかも服裝の至つて穢ない氣味の惡い男を二人迄も一緒につれて來てゐる、此二人の人物は執達吏か又は其代理かとも思はれるが、其服裝からいふと、無賴漢にも見えて、まる子には確とした判斷がつかない、皆崎が今日此家へやつて參つたのは、主人が留守でまる子一人だといふことを知つて其弱味に付込んで來たので、上るが疾いか、卽座に貸金の殘を拂はなければ洗ひざらひ差押へてゆくと、かう申すので、まる子は樣々に辯明した、自分は何にも法律上の手續は知らぬ、主人が留守で判らぬから少し猶豫してくれと、言葉を酢くして主張したが、皆崎間齋聽かばこそ、否執行文は此通り爰にある、入口に執行の札も貼出すのだ、主人が居やうと居まいと其樣なことに關係はないと、威猛高になつて怒鳴るので、まる子如何して宜いか判らない、法律上の手續といふのは、斯ういふものかと、可憫想に何も知らぬまる子、只ドギマギするばかり、がそれにしても默つて見てゐられないから、飽迄も抗辯する、良人の歸るまで待つてくれ良人は今日は晩方でなければ歸らぬから、夫迄は何一つ手に觸れさせぬと、健氣にも一生懸命に言張つた、此ところ一方は三人の荒くれ漢、一方はかよわい然かも服裝も未だ起きたての寢衣姿の、髮も

取亂したまゝの妙齡の女、が皆崎は其樣な事に頓着ない、起つてズン〳〵執行に取かゝつて、有合はせた品を手當り次第書留めて目錄を作りにかゝる、差押への貼札を用意する、まる子は急いで簞笥の抽斗に鍵をかつて其前へ立つて何にも手を觸れさせじとする、此ところ情ない一の悲劇だ、ア、何うこれがムザ〳〵人手に渡されやう、古くから手懸けた品物、子飼から持馴れた道具類、天にも地にも吾家のみは安全だと思つてゐた夫が、今此んなに理不盡に他人に蹂躙されて、平和な娛しい家庭を破られると、まる子は口惜しくつて溜らない、强固と獅嚙みついたまゝ渡すまいとしてゐるから、夫へ手を懸けやうとするには腕づくでなければならない、サアじたばたが始まる、まる子は皆崎を亂暴漢と罵る、盜賊と叫ぶ、正に盜賊と云はれても仕方がないのだ、元金は纔た三百圓、高利に高利を計算して積りに積つた高が七百三十圓と十五錢、外に諸費用までも拂はせやうといふ、加之に此三百圓の證文も因を尋ねると反古も同樣の、一と山幾らかで買つた內からモノにした代物、只も同樣の古證文だが、印が物を云ふから仕方なく〳〵、既に內金に四百圓を支拂つた、假に三百圓の貸が有効であるとしても、最早元も子も濟んでゐる、それを殘金三百何十圓と何錢卽座に拂はぬからと、家具迄も引攫はうといふ、盜賊と云はれても仕方がない、否盜賊に追錢だと、まる子今は氣も狂亂、穢ない服裝の漢が寄つて蒐つて戶棚や抽斗を弄くり回はすので、大聲を擧げて泣叫ぶ、其聲が往來へも聞えるといふ大騷ぎ、かうなつては流石殘忍の猶太人間齋も少し手を緩めぬ譯にはいかない、初めは愚圖々々理屈を並べてゐたが、到頭一歩を讓りだして、仕方が無い明日まで待たう、其代り明日が一日でも間違へば、竈の下の灰迄も掻攫つて持つて行くと、嚴談に及んで立歸つた、ア、何といふ酷い奴等、人間鰍獸、廉恥も親愛も同情も道理も無く、娛しい平和な一家庭に亂暴狼籍至らざるなきばかりか、人の寢所までも犯してゆく、ア、緣起が惡い鶴龜々々と、まる子三人の出ていつた跡の窓や障子を悉く明け放して、惡魔の風を取替へる算段をいたしました。

八

が猶一つ他の、もつと厭な、もつと哀しい事が、今日はまる子を待受けてをりました、漸く明日迄待つて貰ふことにはしたが何とかして金を拵らへなければならない、如何して金策をしやうかと、種々に考へた末、偶然思付いたのは里の毛利の兩親のところへ行つて話をしてみること、大概は何とかしてくれるだらう、幸にして用達てゝくれゝば、今夜良人が歸つて來ても心配させることはない、朝有つた事を笑話に出來る譯と、まる子は最早成功たことのやうに考へて樂觀をいたしてをります。

が詰りは未だ何うなるか判らぬのだから、壁川町の里の家へ一歩足を踏入れるが最期、胸がドキ〳〵して堪らない、里とは云へ嫁にゆけば他人の初まり、可なり裕かな身代でも、金が有らうと何うせうと、氣の爲か空氣が何だが他人らしく、冷かに感じられる、恰度午飯の時刻なので、進められて

兩親と一緒に食べたが、其方があらたまらないで好都合と、まる子は内心思ひました。

そこで食事をしながら、諸人は何んな話をしてゐるかと聞くと、談話は萬國銀行株の騰貴のことで持きり、昨日も相場が二十圓騰つたの何のといふやうなこと許りだ、まる子が驚いたのは外でもない、一體母は物に吝々した、氣の小さい、先時には相場といふ言葉を聞いた丈けで慄へ上つて嫌がつてゐた人だのに、それが今は打つて變つて、自分の有つてゐた萬國株が大層騰つたので圖に乘つてか、反對に父が少し後退りでもしやうものなら、卑怯だとか意氣地が無いとか叱り付けて、大投機を當てることに夢中になつてるといふ始末、今日も食事の初まりから、父の方が、二千五百二十圓ならば寧ろ意外の高値だから有つてる七十五株を此で賣つた方がいゝ然うすれば手に入る金が殘らずで、十八萬九千圓で、買つた値段から見ると十萬圓も儲かつて一寸旨い商法だと、頻りに賣ることを主張ると、母の方は大不足、途方もない賣るなぞとは、貴方が平素から、此新聞なら眞面目だと云つて褒めてお在の「財政時報」でさへ、三千圓は大丈夫だと云つてる位だのに、こゝで賣るなどゝは阿呆の骨頂、賣るどころか自分はこゝで此家を賣つても猶且買ひたいと、中々の乘地でございます。

まる子は此光景に大當惑、口を開く餘地もない、家中が相場で夢中、大きな金高の勘定ばかりして、喧嘩にもなるほどの口論、其邊中株に關した新聞や出版物で一杯になつてるところへ、如何いふ工合に五百圓借用を言出さうかと、腹の裡で樣々に考へてばかりをりました。

食事が終了になるまで到頭言出し損ねてゐたが、終了のころになつて思切つて言出した、急に五百圓金が要ることがある、其金が無ければ無けなしの財産は强制執行の處分に遇ふ、言はゞ災難だから見殺しにせずに、何卒助けて下さいと言放つた、之を聞いた父は、直ぐと首を頂垂れて困つたといふ顏をして、母の方を見やつたが、母は娘の言葉の言ひも終はらぬに、チヤンと返事を定めて云のける、そんな事は出來ない相談、相談する丈け無駄なこと、五百圓といふ大金が何處に轉がつてゐると思ふ、家の身上有つ丈け株に出して了つてあると、これから昔の棚卸しを始めて、第一おまへは自分から好きこのんで、彼樣な食ふや食はずの、書なんぞ書く人のところへ嫁いた、文學者が何が偉い、今お金に困るといふのも、つまりは自業自得といふもの、今更何の面下げて親の家へ助勢を賴みに來られた義理か、彼樣な怠惰者の、金を貶して馬鹿にして、其癖他人の懷中ばかり當てにしてゐる人などには、貸す金は一文もないと、にべもしやゝりも無い挨拶、娘の歸りかゝるのを、其ふゝ默つて歸らせる、仕方がない、まる子は悄々と、ア、彼樣に判つて深切で好い阿母さんだつたのが、如何して斯うも變つたかと、失望しい〳〵出てしまつた。

往來へ出は出たが、まる子は全然無意識になつて了つたやう、若しや其邊に金が落ちてゐはせぬかなど、下らね事も本氣に考へて、漸次歩行いてゆく内に、偶然と思ひ出したのは伯父の城大尉、伯父へ賴んでみる氣になつた、疾く行かぬと伯父さんは取引所の場へ出懸て了ふと、歩を早めて野見町の

小かな寓居を訪れて、やがて入口を開けて中へ入ると、伯父大尉は唯一人、煙管で煙草を燻らして居る、まる子が早速頼事を話出すと、伯父は自分で自分に腹を立つて、ア、俺も全く駄目だ、此頃は百圓と纏つた金を手に持つたことがない、場の利得が哀れなほど鮮いのだから、取れば取つた丈け其日に要つて了ふ、實に殘念だが仕方が無いと、大に萎れ返つたが、まる子から毛利で斷はられた話を聞くと、又大に腹を立つて、何だ蔑棒な、そんな法が何處に在る、鬼や蛇ではあるまいし、纔た一人の娘ぢやないか、偶々有つてる少しばかりの株が騰つたからつて、然ふ逆上せかへるにも當るまい、過般も然うだつた、己が妹の爲を思ふから此邊で賣る方が宜からうと忠告をしてやると、其言草が癪にさわる、何だ、餘計の世話燒だ、そんな小つぽけな金額を溜めて喜んでゐるとは譯が違ふと、急につけ上つた言をぬかした、全然本氣の沙汰ぢやアない、可し今に見るが宜い、相場がウンと下落して飛んでもない端目に陷るから、後の後悔前に立たずだと、城の伯父さん非常の立腹。

此家でも目的を達しないで、まる子は再だ往來へ出たが、何も今は仕樣が無い、どうせ耳へ入れるなら、一時も疾く入れて、他に算段の道をつける方が宜いかもしれぬ、疾く新聞社へ行つて良人に逢つて、今朝の一什始終を話をしやう、何の途皆崎へ拂はなければならぬのだからと、遂に其事に決心して、新聞社へ參つて話を致す、悅良も差あたり當惑の外はない。

悅良は今度書いた小說の原稿を賣らうと思つて、過日中から彼方此方と奔走して居るのだが、未だ引受けてくれる書肆が無い、生計にも困つてくる、そこへ今度の借金の催促だから、何にも此にも法がつかない、仕方が無いから行あたりばッたり當のないのを當にして、ドシヤ降りの泥濘を金の工面に出かけました、まる子に、此に居ても仕樣が無いから家へ歸つて待つてろと勸めたが、私は寧そ此社に腰を懸けて待つてゐる方がいゝ、家へ歸つても氣が氣でないからと、まる子其まゝ廊下の床几に腰をかけて待つてゐる、卽ち斯ういふ次第でございます。

九

米本は娘おなみが出ていつて了つて、まる子が一人床几に居るので、それでも深切氣に新聞を持つて來て、

『貴女御待遠のやうでござんすね、これでも讀んでいらしッたら。』

と云つたが、まる子は有難うと謝したりき、新聞を手に取らず、依然茫然考へてゐる、すると、此へ相良が入つて來た、まる子は相良へ厭な話を隱さうと、態と元氣な容子を作つて、少し面倒な用が出來たので、代りに良人に市中へ行つて貰つたと、自分が此に居る說明を話すと、庄兵衞は可愛い若夫婦と稱つて悅良夫婦に平常同情を有つてるのだから、まる子に、そんな所に居ずと私の室へ入つて待つてゐたらと云つたが、まる子は謝して斷わるので、庄兵衞も押しては云はず、其まゝ振返つて

行きかけた、すると出合頭に三田夫人、夫人は今し矢野の室から出て來たところなのでございます、が兩人は人前もあるから、只普通の挨拶したきり、内と外へ別れて了つた。

御話は他事に渉りました、さてかの三田男爵夫人は相變らず、株に關する見込を聞かうと、矢野を訪れたのでございますが、矢野は今日は最早自分は說を述べ兼ねると、斷然御免を被つた、が漸次と談話の裡に、矢張意氣地なく引張り出されて、云ふまいと思つた考をウカ〳〵と述立てた、自分は此程から萬國銀行に就いて少し疑を抱きはじめた、賣方が日に日に賣はたいて攻めつけてゐるのに、割合に株の調子が手堅いのは不思議である、が遲かれ疾かれ、萬國銀行は郡代に呑滅されるに決つてゐる、矢張財界は郡代のものだが、併し相良にしたところで、今日や明日の壽命ぢやない、未だ相等の生命はあらうから、一緒にくッついてやつてゐれば、恐らく金儲の機會はあらう、マア相良とも關係を破らず郡代の方にも巧く取入つて、一緒にやつてゆく容子をして、兩天秤でゐたら宜からう、一番宜いのは成丈け相良に眞實の容子を見せて、安心させて信用させて、而して其秘密の急所を握つておくのだ、イザといふ時には夫を利用して、相良にも思はせ振をし、郡代にも水心を差向け、兩方を綾なして巧妙に立廻れば、旨い汁は幾らも吸へると、曲者の矢野龍吉、明白地にこそ口外せぬが、戲談のやうに遠廻しのやうに夫人に云つて聞かせて了つた、すると夫人は悉皆聽取つて、儲かつたら山分けですと笑ひながら、到頭此室を歸つていつた。

庄兵衞は矢野の室へ入りながら、例の不作法で言放つ。

『夫人依然君のところへ附纏つてるね、今度は君の順番だなハ、、、。』

矢野は故意と空惚けて、

『誰ですか、ア、男爵夫人、戲談云つちやア不可ません、夫人は飽迄も貴方の崇拜家です、今も今として然う云ふてをられたです。』

『辯明は止し給へ、女が相場をしてゐる内は、本氣に相手になつてくれる人へ付くのは當然だわさハ、、、。』

矢野は遠慮會釋なく素破抜かれて閉口したが、流石に怒ることも出來ないから、笑ひに紛らして、而して夫人が此社へ來たのは新聞の事で來たのだと、何處までも言張つた。

此方に庄兵衞、故意と肩をいからかして、女の話は我輩はもう御免、面白くも利益にもならぬと云ひながら、起上つて室内を往つたり來たり、軈て窓の前へ立つて間斷なしに降る雨を眺めながら、喜悅で興奮してゐる頭腦を休ませた、本當に興奮だ、萬國株は昨日も亦二十圓の高値を出した、それを一體賣方は何をヂタバタ騷いでゐるのだ、氣が知れぬとは此事だ、未だ〳〵此んな事ぢやないと、庄兵衞獨りで大よがり、焉ぞ知らん自分隨一の味方たるかつ子は、兄が言置いていつた通り意味の無い勝貴を抑へやうと、今度又々所有株の内千株を賣つたのでございます。

が兎に角成功は益〻大きくなつていつてるのだから、庄兵衛何の不平も無い、表面非常な愉快氣を粧つてゐるのであるが、併し今日彼は何となく、内心憂慮を有つてる色がある、恐怖を抱いてゐる風がある、其不安不機嫌らしいのは顔の底に現はれてをります、抑も彼は何事を考へてゐるのであるか、云ふ迄もない、郡代の態度だ、彼の不潔な猶太人奴、誓つて自分共を破滅させやうとかゝつてるに相違ない、猶太の盜賊め、自らの賣方シンヂゲートの陣頭に立つて、飽迄も此方を粉碎しやうとかゝつてやがるに相違ない、其事は此迄幾度も取引所で人から聞いた、その話に由ると、賣方シンヂゲートは軍備金として三億圓を用意したといふことだ、畜生め！　勝手にしろ！

庄兵衛の此憂慮と此恐怖は、自分一人心に思つて、腹の裡に籠めて置く憂慮恐怖だが、猶此外に人の口に語り傳へられて秘密に出來ぬ憂慮がある、自分は隱しおうせても戸の立てられぬ世上の口がある、其風評は外でもない、どうも萬國銀行は危ないといふ風評、續々事實を擧げ證據を示し、近い内には内部の破綻が屹度暴露されるであらうと、此風評は大分人の口に喧ましく、夫が空漠たる噂でなく、だん〳〵取留めた噂になつてきた、尤も公衆一般は未だ盲滅法的に銀行を信用してゐるから、今のところ何の影響もないやうなものゝ、これには流石の庄兵衛も内心困却せざるを得ない。

が此時戸外から戸を押して入つて來たものがある、誰かと思つたら相變らず淡白を氣取つてる由利修輔、庄兵衛は見付けて、

『ヤア由利の大將。』

十

由利は大木が今度は彌〻相良を構付けぬことにするといふ事を聞いたので、然うされては大變、利害は早速自分の身の上へも及んでくると、急いで大木の所へ駈つけて、更に詫るやうに低頭平身して、纔と關係を繕つたが、自分丈の關係が癒つてもいけぬ、萬一相良が大木を敵に取るやうになつては夫こそ大變、相良一身のみか萬國銀行の破滅は避くべからざるものとなる、とすると其影響は當然自分へも回はつてくる、こりやア自分が仲に立つて、相良に對する大木の怒を和らげておくより外に法は無いと、然う考へたから由利は平謝罪にあやまつて又もや大木へ出入りをいたし、家人も同樣の態度を取つて、賴まれゝば使ひ歩行きは愚か打たれても蹴られても厭はぬと決心して、再び昵懇となつたのでございます。

由利は田舍漢式の厚ぼつたい顔に狡猾さうな笑を浮べて、

『大將でも少將でもいゝが、今日は君に傳へる大事の使命を帶びて來たのだ。』

由利は實は大木から内命を含められて此へ來たのでございます、庄兵衛は由利の言を故意と聞えぬ容子をして、其樣な事は何うでもいゝ銀行の勢を見ろと云はぬばかり、

『オイ何うだ、昨日は二千五百二十圓、今日は二千五百二十五圓、非常な勢だらう。』

『知つとるよ我輩は、だから今我輩は賣つたところだ。』

由利が株を賣つたといふのに、庄兵衛は大に意外、腹が立つて、憤然としたが、表面には故意と冷笑愚弄の顏をして、

『ナニ君は賣つた？　ハ、ア然うか、宜からう、大木の味方になり郡代の御用を務められて、それも宜からう、面白い。』

由利は少し驚怖の色をもつて庄兵衛を見詰めながら、

『郡代の御用？　何故か？　我輩は自分の利益から打算して行つとるんぢや、郡代も大木もありやせん、君も知つとる通り我輩には君のやうな冒險は爲し得ぬ、第一そんなに買込んだつて詰込むだけの胃腑を有たぬ、だから相當の儲け時と見れば賣つて了ふ、それで今度も賣つたのだ、我輩が今日迄未だ嘗て損をしたことの無いといふのは、卽ち之が爲なのだわハ、、、、。』

狡猾いと云へば云ふが、情に奔らず冷靜に見込を立て、賣る時を知つて賣るといふ能萬縣人特有の商賣巧手、中々賢かうございます、が庄兵衛は頗る面白くない、言葉が暴くなつて來て、

『オイ由利、君は何だ、銀行の重役ぢやアないか、重役たるものが賣るといふ奴があるか、平時でさへ賣るのは位地柄有るまじき事だのに、それが値段が騰つていつてる最中に賣るといふのは一體全體何ういふのだ、世間が見たら何といふ、成程銀行の重役に坐つてゐるものでさへ賣るんだから、銀行の隆盛は附景氣、人工的だと云はれても如何することも出來ぬぢやないか、破滅が近寄つてるなんど云はれても言說く術が無いではないか、宜しい、賣り給へ賣り給へ、君達が先へ立つて賣る位なら世間ではズン〳〵賣るだらう、終局には恐慌は必定だ、我輩は寂滅だ、宜しい構はぬ、賣り給へッ。』

由利は茫然した手容をして默つて了つた、腹の裡では最早庄兵衛を愚にしてかゝつてゐるのだ、何でも搆はぬから今は只大木に賴まれた使命を早く且つ双方に不快を釀さず自分にも迷惑を被らずに果して了ひさへすれば宜いと思つたから、

『相良君、今言つた通り我輩が今日來たのは大事の使命を君に齎して來たのだ、君大木君は非常に立腹しとるせ、熟く聞き給へ、君餘程注意をせぬと、大木君は君に對し君の行法に由つては、以後斷然搆付けぬと斯う云つとるのだぜ。』

庄兵衛腹は立つたが、實は兄に惡感情を有たれては面白くないから、

『ハ、ア、そんなら君は兄に其事を我輩に言へと賴まれて來たのか。』

由利は鳥渡躊躇つたが、寧ろ明白地に言ふ方が宜からうと、

『さうだ、大木君が然う云へといふのだ、此頃の希望新聞の攻擊記事は餘程大木君を激昂せしめたのだ、昨今の筆法は大木君の政治行動に對して大の妨害となつてるのだ、しかも一方羅馬事件で非常に

頭腦を惱ましてゐる其處へ、內國で又妨害を受くる苦境に陷るのだから、本人自烈ざるを得んぢやて
ねエ、ねエ相良君、大木君は君の親身の兄弟ぢやないか、其徑路に於て異なるものがあるにせよ、之
に向つて妨害的行動を採るといふのはこりやア良くはあるまいぜ。』

庄兵衞は依然嘲弄的の態度を含んで、

『イヤ全くだ、そりや我輩が惡い、一生懸命に大臣になつてゐたい許りに、昨日絕對に排斥してゐた
主義を、今日は之を迎へるといふ情ない境遇に居る彼奴は、氣の毒千萬といふものだ、それを苦しめ
るのは僕が惡い、併し隨分勝手な行爲をして、自分の位地を保たうとしてゐる、それは些と虫が好過
ぎる。』

とこれから庄兵衞は、萬國銀行は最早今日金融界にも政治界にも非常な勢力を有つてゐるから何をし
ても宜いことだの、それが兄の目の上の瘤だらうの、政府が國債を起すことがあつて郡代が斷つたら
誰に賴むの、兄が今になつて自分の政治上の好都合ばかりを考へて、少しでも位地の壽命を延ばしたい
爲に此方の筆法を何しろ此しろは、寧ろ人を愚にした行法だと罵倒して、

『歸つて言ひ給へ、どうも何分御望には應じ兼ねると、斯う明かに告つてくれ給へ、宜か、解つた
か。』

十一

此に至ると由利も意氣地が無い、只默つて下方を向いて了ふ、一端怒られるが最期それに逆つて爭
ふ勇氣は無いのだ、兎に角自分は言傳を賴まれて來た丈だから何も言爭ふ要は無いと、

『宜しい、承知した、其趣を云はう、云はうだが君、後の後悔先へ立たずだぜ、それは思つて貰ふが、
兎も角も君の隨意にしやう……。』

兩人は默つて了ふ、一寸靜になつて了つた、此時迄側に獨り校正をやつて居つて其方へ氣を奪られ
て兩人の話は全然聞かぬ風をしてゐた矢野は、眼を上げて相良と合はせて、如何にも貴君に敬服して
ゐるといふ容子を見せる、眼前强い方へ着くといふ小人的の悧巧者でございます。

由利は言葉を續けて、

『さうだ忘れてゐたが、檢事總長神村は君に惡感情を有つてるさうだね、其神村は君は未だ知るまい
が、今朝司法大臣に任ぜられたぜ。』

室內を運動的に步行いてゐた相良、ハタと步を止めて、不愉快な顏をして問返す、

『ナニ神村が司法大臣？　神村が？　立派な代物が出たものだナ、彼の男が司法大臣に！　併し神村
が司法大臣になつたつて我等には毫も關係は無い。』

由利は故意と淡泊な風を大業に見せて、

『だがさ、人間には不測の炎厄が起り勝のものだから、今後君の事業上、萬一何等かの不吉、蹉躓が無いとは限らぬ、其時肝腎の舍兄大木君が君を搆付けぬで、而して司法の當局者たる神村を旨く取繕つてくれなかつたら、何うだ、困ることもあらうぢやないか？』

相良は吼へるやうな聲で遮つて、

『べら棒な！　我輩は大木であらうと神村であらうと其樣な人間を當にするものぢやない、君だつても然うだ、愚言は大概に止めろよ！』

恰度宜い鹽梅に、此時醍醐が入つてきた、平生餘り新聞社へ來る人でない其醍醐が突如と入つて來たので、諸人は一寸驚いて、其方へ氣を奪られて、相良と由利の猶少しで議論になるのも止まつて了つた、醍醐は大變莞爾しながら、馬鹿丁寧に一々諸人に握手をしたが、これは巴里ッ子の如才ないところでございます、今日彼が此社へ參つたのは外でもない、今夜自分の家で夜會を催して、席上女房が自慢の咽を聽かせるといふので、矢野には特別に新聞へ書立てゝ貰ひたいから、自分自身態と歩を運んで平生餘り來たことの無い新聞社へ招待の旨を云ひに來たのだ、が恰度庄兵衛も居つたので、大層幸運だといふ風を見せて、

『これは、相良君、御機嫌好う。』

すると、庄兵衛は當の返事をしもせぬ先から、直ぐと斯う問ひかけた、

『ねエ醍醐さん、貴方は賣りやなさらんでせうな、エ？』

『賣る？　萬國株ですか、何して未だ〳〵、中々賣るこッちやござんせん。』

『決して賣つちやア不可ませんせ、我々の位地として到底賣る譯にはいかぬです。』

『左樣、私も然う云はうと思つてゐたところです、到底賣ることは出來ませんわ、我々は連帶の責任を有つてるのだから……、相良さん、私ならマア安心して居らッしやい。』

大方他の重役瀨藤も小部も福岡諸氏も同感であらう、第一行務は駸々として進んでゐるし、此に處して重役一同固く一致協力して行つてゆくことは誠に美しい事である、萬國銀行の樣な成功は滅多に無い、自分は大に滿足してゐる……、と醍醐は此んな程の好いことを述立てゝ、而して一人々々に萬遍なく愛嬌を振蒔いて、さて今夜は帝劇の立唱森二榮が來て連唱をやることになつてゐて盛會だと思ふから、是非共御入來を待つてゐると、言葉を番つて歸つていつた。

由利も歸ると立懸つて、

『では今のだけで外に我輩に返事をすることは無いのだね？』

『無い、夫ッきりだ。』

と庄兵衛にべもない挨拶、屢く由利とは一緒に出かけるのを、今日は故意と一人歸して、自分は跡へ

殘つてゐる。

矢野と二人限りになつた庄兵衛、

『到頭開戰か、もう斯うなりや遠慮も會釋も要らぬ、ドシ〳〵と行ッつける、思ふ存分戰鬪を續くべしぢや、構はぬ……。』

矢野の方は然うはいかない、心配が漸次增して來るばかり。

十二

廊下には依然としてまる子が良人の歸るのを待つてゐる、時計は未だ四時にしかならないが、執念くも降りつゞく霖雨に、日の暮るのも疾く、米本は既に光燈を點けに回はつてをります、彼はまる子の側を通る度に、何かしら一ト言二言言葉を懸けて氣を紛らせてゐるが、中々深切者でございます。

今日の新聞も軈て締切の時刻に近づいてきたから、記者連の出入は漸次激しく、彼處此處の室で種々の人聲、新聞社の夕景は中々忙しいものである。

此時まる子が偶然眼を上げて見ると、何時の間にやら悅良が前に來てゐる、見ると着物はズブ濡れ、活氣の無い茫然した顏で、身體もワク〳〵さしてをります、まる子は悅良の容子で悉皆と悟つて了つた、

『駄目でしたらう、エ貴夫？』

とこれもワク〳〵顏色を蒼くしてゐる。

『どうも困つた、一文もいかん、何處へ行つても駄目だつたッ。』

聞くまる子は全然血が上ずつて了つたやう、兩人共無言、只々溜息を洩すばかり。

恰度此時庄兵衛は矢野の室から出てきたが、まる子が未だ此廊下に居るので驚いて、

『オヤ、貴女未だ此處にお在の？　曾根君何をしてゐたのか、こんなに待たせて、……だから奧さん、私の云つた通り私の室へ入つて待つてお在なれば可かつたに。』

まる子は庄兵衛の顏を眺め入つてゐたが、此時偶然心に浮んだ一の智慧がある、宛然神から授かつた智慧のやう、別に之を練つてもみず、女氣の前後構はず、直ぐと庄兵衛に申出た、

『相良さん、私貴方に、折入つて一つ御願がございますんですが、此處では失禮でござんすから御室へ參つて申上げたいと思ひますが……。』

『御用？　宜しい、サ入來つしやい。』

悅良は、女房が相良への願といふのは大概斯うと察したので、金の事なんぞを申出して氣まづい思をされるのは極めて厭だから止めて貰ひたいと、袖を引いて留めかゝつたが、まる子はそれを振放し

て、庄兵衛に跟いて行きかける、仕方が無い悅良も後について參りました。

室へ入つて入口の戸を締めて、まる子は言葉を續けた、

『相良さん、實は私共五百圓丈是非お金の要る事がございまして、其金策をする爲に、良人は先刻から二時間も三時間も彼處此處駈づり回つて居るのでございます、が何しても出來ませんので、どうしたら宜からうかと、實は途方にくれてをりますので……、良人は貴方に御願いたしたらと申してをるのでございますが、自分からは願はれないと斯う申してをりますので、お恥しながら斯うやつて、私から御願申すのでございますが、御聽屆なすつて下さることは出來ませんでございませうか。』

とこれからまる子は、若い女の思込んだ一心を瓢輕な口調で勝手に決めて、今朝有つたこと、皆崎が突如踏込んで來たこと、恐ろしい三人の巨漢が所狹しと自分の室へ入つて來たこと、自分一人で一生懸命其人達を追退けたこと、金は翌日に拂ふと約束したことを話しした、本當に金が仇敵の世の中、穢い少しばかりの金の爲に、詰らない恥辱を晒し苦痛を受ける、考へると人間は意氣地の無い詰らぬものだと、付加へて愚痴を溪す。

『皆崎？　皆崎間齋の野郎が貴女方をそんなに苦しめるッ？』

庄兵衛側を見ると、悅良いかにも居溜まれぬ容子、顏を蒼白くして默つたまゝでゐる、心から同情した色を以て庄兵衛は直ぐに應諾した、

『宜しい、御用立しやう、五百圓用立ませう、初めから私に然う云へば宜かつたに。』

庄兵衛は直と卓に就いて、抽斗から小切手を取出して五百圓を書かうとしたが、鳥渡又考へて、執つた筆を擱いて了つた、さうだ皆崎から手紙が來てゐた、一遍行かなければならぬのだつたが、先方の用向といふ其底には曖昧な何か可厭な事を含んでゐるらしく感づいたから、日一日と打擲つといたが、さうだ丁度宜いところだ、態々行くのも厭なところなのだから、此曾根の借金問題の談判を主にする積りで、直に一つ行つてやらうと、斯う決心を致しながら、

『用立はするが、如何です斯うしたら、私は皆崎は少し識つとるから、私自身一遍先方へ行つて談判

して、減額られるものなら半分位にまけさせて來やう、どうです？』

まる子の眼は今喜悅に輝いてる、

『相良樣、本當に御禮の申上樣はございません、態々お御足まで運んで下さるなんて、どうぞ何分宜しく御願申ます。』

で悅良の方を向いて、

『本當に有難いぢやアございませんか！』

嬉しいの有難いのどころの沙汰ではない、女房の力で大助かり、物質的の金錢に關してはカラもう意氣地が無く、悉皆元氣をおとしてゐたのだから、悅良は兩手を合はさぬばかりでございます、庄兵衞は、

『そんなに私に禮を云はなくつても宜い、私だつて何んなに嬉しいかしらん、君達夫婦のやうに仲の好いのは外側から見ても實に愉快極まる、マア安心して家へ歸り給へ。』

これから庄兵衞待たしておいた車へ乘つて、ビシャ〳〵の惡路の中を、二分と經たぬ内に、笛田町の皆崎の家へやつて參つた。

十三

前申上た通り皆崎は此家の六階に住んでをります、早速呼鈴を押して案内を乞つたが、家内では何の音もしない、中々戸を開けさうにもない、或は留守かしらんと、庄兵衞歸らうと思つたが、猶一遍今度は戸を叩いてみやうと、疳癪半分拳固の先で激しく叩くと、室内で戸の方へ足を引ずり〳〵歩行いてくるやうな音がする、戸は内部から開いた、出て來たのは間齋の弟眞次。

『オヤ貴方でしたか、私は又兄かと思ひました、兄が鍵を忘れていつて外部から開けられぬでそれで叩いたのかと思ひました（譯者云、彼地では家人は各自其家の鍵を持つてゐる、入口には必ず鍵が支つてあつて戸外からは鍵が無ければ入れぬやうになつてをります）私は今迄斯うやつて取次に出たことなどは無いのです、兄は最早直に歸りませう、若し御逢ひなさる御用事なら少し御待ちなすつたら。』

足許も危なげに蹣跚して、先へ立つてゆく其跡に、庄兵衞跟いて參りますと、入つた室は例の眞次の、窓から取引所前の廣場が見えるところでございます、此室は至つて高いから、市中下界の、雨や霧で曇つて薄暗いのと違つて未だ明るい、室内は相變らずの伽藍洞、家具らしいものは一つも無い、有るものは鐵製の幅の狹い寢臺と、粗末な一脚の机と、椅子二つと、素地の板で作らへた棚臺、其上には書物や古雜誌が山のやうに積んである、只暖爐は壁に裝置してあるが使はないで、其前に小さな置暖爐がある、がそれも打棄り放しにしてあるから、火は絶えてをります。

サアマア御座はんなさい、兄は用を足して直ぐ歸つてくると云つて出懸けてッたのですから、最早程なく戻りませう。』

明るいところで久しぶりに面と向つて見るといふと、身長の高い眞次の顏容が、先時と著しく變つてゐるのに庄兵衞先づ以て驚かされた、腰も懸けないで見てゐる、肺病が漸次增進して來たものと見えて、色は蒼白く頰は焦け肉は落ちてゐる其顏が、手も入れない長い髮の毛の間に細く薄く見えてゐる、が眼容を見るといふと、相變らず他愛ない小兒のやう、何か夢想に耽つてるやう、其額には矢張中々きかぬ氣の精力に富んでゐる相が顯はれてゐる、が何しても冥土へ近寄つてる人間としか見えません、何を言出して宜いか當惑したから、庄兵衞は只訊いて見る、

『貴君、御病氣は快くありませんか？』

眞次は全然無頓着の挨拶、

『ハア、變りも無しでさア、此天氣の惡いので、一週間許り前は快くありませんでしたが、併しマア何か此かやつてます、此節は些とも眠られませんが、其代り勉强が出來るから宜ござんす、熱も時々少し位發ますが、其御蔭で體軀が溫まつて寒さが凌げます、ア、どうも忙しいので閉口！』

かう云ひながら、眞次は机の前へ直つたが、机の上には獨逸語の書が一冊廣げたまゝになつてをります。

『失敬します、起つて居られませんから……、昨日私は此書を手に入れましたが、それを讀むので昨夜は徹夜、イヤ實に巧く出來てゐる著述です、カール、マルクス先生が殆んど一身を賭し十年の日月を費して書かれた資本論、此が刊るといふので我々は一日を遲しと期待して居つたのです、これ御覽下さい、此書は實に我々に取つての聖典です。』

物珍らしげに庄兵衞書物の方へ眼をやつたが、ゴシック文字で表紙が書いてあつて解らないから止めて了つた、笑ひながら、

『私にや解らん、マア飜譯が出來るのを待つて拜見しませう。』

眞次は首を振るやうにして、飜譯を讀んだからッて其道の者でなければ蘊奧は究め難いと云はぬばかり、而してこれは解說書ではない理論を蒐めたもので、普通の學識の人には解らぬが、併し資本組織法を基として吾社會の避くべからざる改造を論じて、原理透徹論據頗る豐富であると、マルクス非常の崇拜でございます。

十四

眞次は本氣だが、庄兵衞は何處までも不本氣、

『ちや又例の社會顚覆といふやつですかね？』

『理論に於ては全く夫に相違ないです、いつぞや貴君に講釋して御聞かせした世の進化は革命に在るといふ理論は、悉皆此に書いてあるです、それは只理論に過ぎぬと云へば其迄だが、其理論を事實に實行してゆかんければいかぬです、人間の思想といふものは刻一刻非常な歩調を以て進歩してゐる、それが判らなければ盲目だが、だから貴君もだ、貴君は萬國銀行といふ機關を作らへて三年間に何億といふ世間の金を集めて活動させなさつたが、それは卽ち貴君が正に急轉直進社會公有主義（譯者云、私有權を抑滅して之を國家又は社會に移さうとする論）へ我々を導いて下さつた譯なのぢや、私は貴君が銀行事業をお始めになつてから、此薄暗い別世界のやうな私の室から、大なる利益を持ち注意を拂つて御進行を拜見してゐる、貴君の事業が何う何の位進行してゐるかは私貴君御本人と同じくらゐに知つてる積りぢや、貴君が洽く天下の區々たる資本を一手に收集し、社會唯一の金融機關を拵へ、普く國家公の便利の爲にしやうといふ實に吾人が懷抱してゐるところの主義理想に悉く適つたことを實行して下すつてるのは、我々大に感謝に堪へぬことであるです、社會公有主義の國家が行らなければならない夫を、貴君は一人で行つて、好い模範を天下萬衆に見せて下さつてる、實に私は貴君の先見の明に敬服し感謝に堪へぬでをるのです。』

斯う云つて眞次は笑つたが、庄兵衛は、理屈は兎に角飛んだところで褒められたので嬉しくつて、段々膝を進めて、併し自分の事業の成行に能くも斯う注意してくれたものだと感心して、益ゝ乘地になつて聞いてゐる、眞次は病人の、淋しいが一生懸命な笑を以て之を迎へながら直と又續けて、

『だがです、他日一朝吾々の國家が、國家の名に於て君の銀行を買收し君個人の利益に代ふるに萬人の利益を以てするやうな事があつたらば、君も覺悟をして貰はんければならぬです。』

と云つて卓上の書類を弄つてゐたが、偶々其書類の間から一錢銅貨が一つ現た、それを眞次は二本の指の間へ挾んで、直ぐと談話の種にして、

『相良君此を御覽なさい、これは所謂金錢だ、社會公有主義を實行すれば此金錢といふものは悉く廢止して了はれるです。』

『金錢を廢止するッ？　そんな、そんな狂氣じみたことを、馬鹿な。』

『否マア考へて御覽なさい、社會公有主義を行ふ國土に於ては貨幣の必要は無い、存在は不可能なのです、物を買つたり又は引取る其返償又は勞力の賃としては、貨幣――金錢に代ふるに勞力券といふものを以てすれば宜しいです、此券を勞力の程度に由つて作つて、物の價格を測量する一の道具と看做して使用すれば差支ないのです、御覽なさい實に恐ろしいぢやありませんか、人間が金を所有する、只之を溜る、彼方でも此方でも只だ金を積込んで自分一己の所有にして了つて、肝腎要めの社會公有物たる金の役目を奪つて了つとる、自由に不足なく流通さすべきものを、流通させなくして了つと

る、其揚句には、少數の者が壟斷的の醜惡な金力的權威を振舞はしたり、猥りに私人の權利を沮害したり、金融市場に跋扈して他人の不安不便を釀したり、社會共同の生産をも疵つけて安寧を妨害してをる、實に恐ろしいぢやありませんか、總て社會に於ける波瀾も恐慌も逼迫も窮困も、將又彼の無政府主義などゝいふことの起るのも、要之原因は金に在るです、人間が金を惡用するそれが原因となるのです、金錢は廢止して了はんければならぬ、滅ぼして了はんければならぬ……。』

十五

眞次の說に、金錢を生命と思つてゐる庄兵衞は腹を立つて、心裡に何金錢を亡くなす！　黃金を廢止して了ふ？　彼んな美しいピカ〳〵する明星の樣なものを何故廢める、自分が今日のやうな光輝ある身となつたのは金の爲だ、其金を社會から根絕させる？　馬鹿げきつた事だ、現金の富といふほど此世に好ましい美しいものは無いではないか、眼の覺るやうな新しい貨幣でこそ富といふことが出來る、春の村雨のやうに一面には太陽の日に映じて降つて來たり、又は霰のやうに落ちて地上に蔽ひ積つたり、金や銀やそれを圓鍬で抄ひ上げて其ピカ〳〵する色やチリン〳〵する音に目や耳を歡ばせる、只見てさへ好い心持のするものである夫を廢止して了うといふ、一體何たる呆言だッ……、人は一體何の爲に働いてる？　吾人が勵むのも、奮鬪するのも、生きてるのも、皆之れ金錢の爲ではないか、と、庄兵衞悉く大不滿。

『馬鹿々々しいッ、實に馬鹿々々しいッ、愚論の骨頂だ、そんな事は斷じて有る譯のもんでない、君もう其論は止し給へ。』

『そりや貴方には解らんのだ、何故それが愚論ですか、考へて御覽なさい、卑近い例が一家族內に於て我々は金錢といふものを使つてをりますか？　家族間には金錢の使用は無いでせう、必要が無いでせう、家人各自協同的に働らいて、而して物を使つたり取つたりしてゐる、卽ち社會を一大家族と見れば宜い、一家も一社會も毫も違つたところは無い、金錢は要らんぢやありませんか？』

『私はそれが呆言だといふのですよ、金錢を此世から奪つて了ふつたつて、金錢其物が生命なのだから、金錢を除いたら此世に何物も有りはしませんわ、何にもありはしませんわ！』

庄兵衞は少し激して、室の內を往つたり來たりしてゐたが、偶然窓の前へ立寄ると、相變らず取引所の建物の眼下に在るのが目に見える、先時に逢つたときには取引所なんぞ打毀して了はなければならぬ否近い時代に自滅するなどゝ眞次は放言して居たが、先づ〳〵無事であつたわいと庄兵衞は思ひながら、

『否そんな事は議論する丈け愚だッ、金錢を廢めて了ふなんて不可能の事、廢められるなら君一つ廢めてみたらば何ですか。』

『金錢に限らん、此世に在るもの、一として自滅せざるなく、變化せざるなく消滅せざるものはないです、現にコノ富の容といふものが變化をやつてゐる、一時土地の價値が下つた爲に、總ての土地原野山林等の不動産の代價がズウッと下つて、動産的工業的の株や公債の價などゝ比べものにならなかつたが、當今はコノ金の方の價が急に下つて、中々昔時のやうにいかず、金利五分は普通だと云つてるが、此五分の利子も中々難かしくなるに相違ないです、即ち金錢の價といふものが漸次下落をしてゐるので、此順でもつてゆけば金錢の價値は終局には零になる譯、金錢の影も容も消滅して了ふ譯、金錢に代はる何か新しい富の形式が出來て來んければならぬ譯、即ち明日の富財は何で成立つかといふと、我々が云ふ勞働其ものが基になるわけですわ。』

眞次は依然一錢銅貨を捻くり回して居たが、ア、此一錢銅貨も直に古代の遺物となり了はるであらう、此汚ない下等な一片の金屬の爲に、何の位人を笑はせたらう、泣かせたらう……、とこんな事を考へてゐる。

やがて又物和かに言葉を續けて、

『さうだ、貴方の御說も御道理には相違ない、到底吾人一生の内に是等の物を見ることは出來ぬのだ、今は理想に止まるのだから其實現を見るには幾多の星霜を閲さなければならぬのだ、只それは、近い將來には必ず到達する、吾人は眞理や正義が全く人類社會に行はれる幕開の時だけでも觀てゆきたいと、平生から願つてをるです。』

眞次は此時咳が出て咽喉が塞がるやうになつて、聲も發なくなりました、彼は死に對しては至つて冷靜な觀念を有つてるが、併し理想の社會の序幕だけでも觀る爲めには、長命をいたしたいと考へてをるのでございます。

『私は私が今日まで爲すべき丈けの仕事は悉く爲し得た積りです、私は何時死んでも搆はぬ、何時死んでも、私が夢想に描いてゐる社會改造に關する私の始終書いて置いたものは纒めて記錄にしてあるから、私の死後それを見れば、眞次が如何社會を改造したいと思つてゐたかの理想は判るでせう、明日の社會は文明の充分實つた結實物でなければならぬ、完全な、眞理と正義が行はるゝ社會でなければならぬ、完全な幸福は其處に在る、其等に關する理論は私は悉皆纒めて此帳に書いておいた、いつか一度見て下さい。』

と云ひながら、眞次は糸のやうな瘠細つた腕を伸ばして、取亂らかした書類の中から何やら綴たものを取出して、庄兵衞に指して、自分の夢想が必定行はれる時節が來ると、意氣軒昂たる容子をしてゐる、が然ういふ眞次今は何うか、食事も碌に咽喉へ通らず、眠れもせず、不治の肺病に惱みきつて、此荒涼な一室に徐々死目に近寄つていつてるのでございます。

が此時、物の言ひ方が至つて暴々しい不快な人聲が直き側で聞えたので、庄兵衞はオヤと思つた。

『眞次、其處で何をしてゐるのだ？』

十六

聲の主は誰でもない間齋其人、今市中から歸つて來たところなのでございます、入る匆々横眼にヂロリと庄兵衞を見たが、其眼の色で見るといふと、折角弟が安靜でゐるのを邪魔をして、口を利かして病氣に障らしたと云つた容子、彼は弟の返事を待たず母が兒を叱るやうに叱り付けた、

『何だ、又煖爐を打棄らかしにして消えさして了つたのか、不可んなアどうも、何故汝は己の云ふことを聞かぬ、此樣な濕つぽい所に居ては、毒なのは譯りきつてるぢやないか。』

と言ひながらハヤ既に、自分の太い膝を屈めて、其邊に在る焚付木を折つて煖爐へくべて火を熾す、それから又箒を執つて其邊を掃いて、而して藥瓶を取上げて、弟が二時間毎に飲む水藥を飲んだかどうかを調べてゐたが、弟が自分のいふことを聞いて床の上へ横になつたので、纔と安心したといふ風をして、遂に庄兵衞に口を利いた。

『相良さん何卒私の室の方へいらしッて下さい。』

間齋の室へくると、彼のおせんも參つてをる。おせんは纔た一つしかない椅子を占領してをります、間齋とおせんは二人揃つて今朝近所の或家へ出かけたが、其仕事の結果が旨くいつて今喜んで歸つて

來たところなのでございます、事の仔細は如何いふのかといふと、二人が永い間辛苦して探してゐた儲けの種それが今日不圖した事で發見つたので、卽ち前段申上げたる通り、芳村伯爵が在世中或時一人の娘を弄んだ其娘の名は黑田れんであるが、其れんに伯爵が與へた丁年に達したら一萬圓を贈るといふ書附、其書附を間齋手に入れてゐるので、おせんと二人して三年の間汗水垂らして、此れんなるものを探してゐたが、今度不圖したことから其女を探し出した、前に申上げたが間齋は、酒井といふ米穀商で金貸を渡世にしてゐるものから、安多摩の金錢仲立業者深澤の手を經て古證文一ト束を紙屑同樣の價で買つたのだが、其中から出たのが芳村伯爵がれんに與へた古證書、ところがれんの居所が判らないから、買取主の深澤へ聞きにやつたら知れやうと、問合はせたが判らない、只れんは今を去る十數年前に安多摩を出て巴里へ行つたが、巴里では何でも或執達吏の家へ奉公してゐたらしく、安多摩へは一度も歸つて來ず、兩親にでも逢つて訊いてみやうと思つたが、其兩親も歿して了つてるので、訊く便りもない、と斯ういふ深澤からの報告でございます、そこでおせんは一生懸命になつて其奉公してゐたといふ執達吏を探し出し、夫から夫へと尋ねたところが、れんは執達吏の家を暇を取つてから肉屋だの園者の家だの齒科醫の所だのへ流れ流れて下女奉公、遂に墮落に墮落を重ねて魔道の人間となつてた爲に、一時踪跡は不明であつたが、おせんは慾と道連れの熊鷹眼で、巴里中の桂庵や木賃宿やを探し廻つて、同名異人のれんに逢つたことも度々といふくらゐ、然るに

爰に、今は笛田町に住んでるが以前鍋屋横町なる自分の持家に店借をしてゐたものに三圓の貸が殘つてゐる其を取立てやうと、おせんが其人の所を訪ねると、其家は地獄屋みたやうな業を營んでゐる家で、其處で圖らずもれんに出會したのでございます、さて此報告を受けたる間齋、何條一刻も猶豫致しませう、直ちにおせんを促して共にれんの居る家へ參つて、取敢ず本人を見るといふと、芳村伯爵ともあらうものが手をつけて而して一萬圓の約束證文を與へた女とはどうしても受取れない、デクデク肥りの、頭髪の硬く粗くムシャ〳〵して眉の所まで下つてる、平たい間の拔けた顏容の人柄の如何にも下品な女だ、間齋は驚いた、併しそんな事は如何でも宜いのだから、これから種々と今迄の事を恩に被せて話をし、よく此んな辛い娼賣などをしてゐたと褒めたり煽てたり、遂に千圓與るから此證書を自分に讓つてくれと談判した、自體薄馬鹿なおれん、千圓と聞いて大喜悅、宛然子供が菓子でも給與はれたやうに嬉しがつて、一も二もなく承知した、これで本人が判つて證書が正式に間齋の手に讓られたので、此上もない武器を握つたも同樣、矢張果報は寢て待てだと、間齋とおせんは大有卦入り、此惡むべき恥づべき武器を振舞はして二人は之から芳村未亡人に食つてかゝらうといふ誠に恐ろしい企てゞございます。

十七

『相良さん、實は貴君を御待申してをりました、少し御談ししたい事がございまして……、先頃差上げた手紙は御受取になつたでござんせうねエ。』

いろ〳〵の文書や紙片で一杯になつて、其邊一面ハヤ暗くなつてるが、見窄らしい洋燈が只一つ、其油煙深い火光を放つてゐるきりな中に、おせんは口も利かず身動きもせず此室に唯一の椅子に固くなつてをります、此方に庄兵衞は突立つたまゝ、何んな威嚇をも恐れるものでないといふ風をして、而して直ぐと曾根の借金一件を發言した、物の云ひやうも無情に冷笑を帶びてゐる、

『イヤ御手紙も頂いた、が今日上つたのは外ではない、希望新聞社の記者の一人曾根が、貴君から借りてゐる金がある、其金の始末をつけやうと、それで參つた譯なのです、あの曾根といふ男は誠に人の好い罪の無い奴であるのに、貴君は隨分手嚴しい目に遇はせて、虐待めに虐待め拔いてござるが、それに承れば今朝も貴君は曾根の留守宅へ踏込んで、男子として婦人の前に爲すまじき事を妻女の前で爲さつたといふ、隨分烈しい事ですねエ。』

突如攻擊を食つたので流石の間齋も少し面喰つて、自分の方の交渉談を發言すのも忘れて、防禦の態度に出て了つた

『ナニ曾根の事？　曾根の事で貴君は御入來になつたのですか、男子が何の、婦人が何のと、そんな事は何うでも宜しい、貸があるから拂つて貰ふと、斯ういふ外に私は何にも知らんです、幾年となく

引張つておいてサン〳〵人に迷惑をかけ損をさして、而して今迄にチビ〳〵入れた金高が纔だ四百圓、本當に馬鹿々々しい好い面の皮でござんさあ、最早今度は待てません、今夜にも殘りの三百三十圓十五錢を耳を揃へて私の所へ持つて來なければ、明日は斷然公賣を執行して了ふばかりでござんす、本當に馬鹿々々しい。』

庄兵衛は方策として少し相手を毒氣拔いてやらうと思つて、元は十圓も出さぬで買取つた古證書に對してもう四十倍も取つてるのは全體怪しからぬと素破拔くと、間齋果して大怒り、

『貴君そりや何を仰有るんですか、元金は元金で外に利足といふものがあるぢやござんせんか、のみならず、費用といふものもあるといふもの、其等を加へるから、三百圓の貸が七百圓以上になつてるのですわ、それが何うしたんです、貴君は私が惡いと仰有るのですか、借人が貸人の私に返してくれぬから、貸人たる私は其人に法律上の制裁を行ふ、不當の事は無いぢやアござんせんか、法律手續に費用が餘計かゝるッたつてそりやア私の知つたこッちやアない、法律が惡いからだ、私が金を取るのぢやないです、元は十圓で買つたにしろ、費用が嵩みに嵩んで七百圓にもなつたんでございまさアー、何豈私に取つちやア元金さへ償つて頂けばそれで宜いのだ、それにしたところでゞす、私に取つては取扱上危險といふものもある、彼方此方歩を運んだこともある、それから又頭腦を使つたことも智慧を働かしたこともある、此んな事を一々勘定に取つたら何です、損をしやうと儲かるどころの沙汰ぢやござんせんや、此曾根さんの借金に就いては此に居るおせんさんが扱つてゝ能く知つてるから、御訊きなすつたら解るでせう、おせんさんは之が爲に、何れ丈け足を擂木にしたか知れやアしません、新聞社といふ新聞社は皆尋ねましたらう、幾つ階段を上り下りしたか解りやしません、靴を何足臺なしにしたか解りやしません、加之に何處へ行つても番地は判らないと斷わられた上、乞食のやうに追拂はれてさ、此んな埋らない話はありやしません、今日まで幾月といふもの、斯う我慢をしてゐるなア並大抵な事ぢやアないです、骨折りに骨折つて作らへた仕事、一時間五錢と見積つたつて大概の額ぢやござんせんや。』

滔々と辯じ立てゝ來た爲に間齋は大に意氣を昂騰させて、圖にのつて、側に積んである諸々の文書類を指して見せながら、

『相良さん此を御覽なさい、此室に在るのは私が握つてる證書類です、此證書の總債權額を金高に見積ると合計二千萬圓になるです、日附には古いのもあり新しいのもあり、債務者には貴賤老若又種々の職業の人があり、金高にも大きいのがあり小さいのがある、貴君欲しけりや、何うです殘らずで百萬圓許りで賣りませうか、此内には私が二十五年も待つてそれで取れないのもあるし、取るべき元金が纔か何百圓といふ高や、時々は又何十圓といふ小ッぽけなものさへあります、けれども捨てるのも惜しいから有つてゐて、其債務者が家産を恢復した時とか、又は親から財産を相續した時を待つて取

る、其他行方の判らないものやなど、夫が一番多いが、御覽なさい皆此隅に取纒めて、只寢かしてあるのです、どうです此が皆其書類です、例へて見れば之は未だ何の役をなさぬ我樂多同樣、ではない寧ろ材料中の材料、併し此から私は漸次と物を作らへ出して、所謂モノにしてゆく積り、否私自身の生を引張りだしてゆく積りなのです、之を役に立つまでにするには何の位の手數と努力が要りませう、到底御解りにはなりますまい、だからです、一つでもモノになると見るが最期、飽までも私は追究せぬでは置かぬです、如何です私の言ふことは道理でござんせう、貴君だつて然うでないとは仰有られぬでござんせう?!』

十八

此上只爭つて居ても仕樣が無いと考へたから、庄兵衞は懷中物を取出して、單刀直入の談判に立ち入つた、

『私は最早何にも理屈を云はぬ、此へ二百圓並べませう、これで悉皆棒を引いて、曾根の證書を返して下さい。』

間齋は驚いて飛上つて大立腹、

『二百圓ッ！　馬鹿な言を仰有つちや困ります、三百三十圓十五錢が鐚一文缺けても承知は出來ません。』

間齋の怒つたくらゐでビク〳〵する庄兵衞ではない、金の力を能く識つてゐる相良は相手の言葉を耳に聞かぬも同樣に、又二度三度繰返して、

『二百圓丈け拂はう、二百圓だけ拂はう。』

間齋も種々と胸算用をして見たが、年限も經つてゐるし、後影くないでもないし、此邊で手を打つが宜からうと、遂に承知と事を決めて、忌々しさ半分大聲で其旨を怒鳴つたが、眼には涙が浮いてゐた。

『相良さんどうも私は此んな事になると心が弱くなつて困ります、本當に可厭な職業、嘘ぢやございませんよ相良さん、損をして取上げられて裸にされて、合つたもんぢやアござんせんや……。』

書類は執達吏の手へ廻してあつて手許にないから、間齋は請取書を書いて庄兵衞に渡し、別に執達吏宛請求解除の屆を添へ、自分の卓の前へ坐つて一ト息ついた、餘り身心を使つたので疲勞れて落膽して、肝腎の自分の方の用向は忘れて了つて、今庄兵衞を歸さうとしかゝつたが、此時迄默つたなりでゐたおせん、間齋の袖をひいて、小さな聲で注意をした、

『例の一件は？』

おせんに氣を注けられて間齋、ハッと思ふと同時に、然うだ此事で一つ今の仇を取つてやらうと考

へた。

『さうだ〳〵忘れてゐた、大變な事を忘れて了つた。』

相良に向つて、

『相良さん、私は貴君に手紙を差上げて御目に懸りたいと申上げた用事を忘れて了つてゐたが、用事といふのは外でもございません、貴君に對して古い勘定がある夫を今日は一つ御片付を願ひたいので。』

手を差し伸べて數多の書類の中から「鹿戸書類」と書いてあるのを取出して、相良の面に擴げた。

『千八百〇十〇年貴君が原居町に間借りをしてお在になつた其時に、貴君は金岡はんといふ十七になる少女を或夕廊下で捉へて、無理强ひに御手を御つけなさつたことがある、其はん子に一枚五十圓宛の約束證書を十二枚書いて御渡しになつたでござんせう、卽ち此處に在るのが其でござんす、貴君は其十二枚の約束證書を一枚づゝ順次に御拂なさる約束をなすつたではありませんか、然るに最初の證書の期日が來る前に、貴君は疾くも妾を隱してお了ひなすつて、夫ッきり音沙汰なし、然かのみならず其證書には貴君の御本名を御認めなさらんで、貴君の最初の御妻の名の、鹿戸といふ名を御書きなすつた……。』

聞く庄兵衞の顏の色は看る〳〵と蒼くなる、只だ眼を睜つて見るばかり、舊惡悉く露顯に及んで、然ら眼の前に一々素破拔かれたから、殆んど身も魂もないばかり、只モグ〳〵と、

『ど、どうしてそれを知つて居らるゝ、何處から夫を御聞きで？……。』

斯うなつては金を拂つて、證據物件たる書類を此方へ捲上て了ふより外に良策はないと考へたから、一ト言も言葉を並べず、懷のく手を懷中へ入れて懷中物を取出しながら、

『元金の外費用は別に無いでせうな、宜しい合計六百圓、サア此に御拂する、言へば種々云ふ事もあるかも知れぬが、いさくさ拔きで綺麗に拂ふ、サ受取つて下さい。』

百圓札を六枚取出して、間齋に渡しにかゝつた。

間齋は其金を押返して、

『今迫々に頂戴するがマア待つて下さい、申上げる事は終了ぢやアない、未だあります、此處に居る此婦人の方はおはんの從姉妹でござんして、此書類は今は此方の所有になつて居るので、私が今其支拂を貴君に御請求申すのもツマリ此方に代つてするのでございます、金岡はんは貴君が手籠めになすつた折負傷した爲に、それから全く不具同樣の身體になりましたが、それからといふもの不幸に不幸が續いて、仕方がなく此婦人が引取つて世話をして居りましたが、揚句の果に悲慘な死方をして、此世を去つて了ひました、ねエおせんさん、後は貴女から一ト通り御話を申上げたら宜ござんせう。』

今迄口を緘んでゐたおせん、此時優しい作り聲を發して、

『貴君そりやお話にも何にもなつたもんぢやござんせん、餘り恐ろしく情くつて！』

庄兵衛此時迄餘り氣に留めぬでゐた爲に見もせぬで居つたのだが、此時初めて氣が付くと、豫て見識りのおせん、平素可厭な奴だと思つてゐた彼の大鞄を下げて人の生血を吸つて歩行いてゐる其女が此處に居るのみか、然も此不愉快な事件に關係してゐると知つたので、こりやア飛んでもない奴がゐると、非常に閉口したが、表面は何處までも平氣の色、

『イヤ本當に氣の毒な事でした、可憫想に……、併しはん子が歿なつて了つたとすれば、最早別に仕樣もない、では此に六百圓、此丈けは拂ひます。』

間齋は又もや金を突返して、

『六百圓御出しなすつたつてそりや貴君話を未だ半分しか御聞きにならんからです、貴君はん子には兒が生きたのでございますよ貴君の子が……、今年で十四になる子がある、そりや貴君に生寫し、何と仰有つたつて貴君は否むことは出來ません。』

驚いたの愕かないどころの沙汰ではない、今初めて小兒の事を聞くのだから、庄兵衛は茫然自失、思はず知らず打叫んだ、

『子供が！　子供が！』

『すると此途端、何と思つたか庄兵衛手に持つてゐた六百圓の紙幣を突如懷中へ逆戻し、其まゝ突と起上つて、平素の勇氣を其まゝに言放つた、

『ハヽア、子供がある？　皆崎さん、子供があるとすると些と話が違つて來ますね、戯談ぢやない、子供があるのなら私は貴君に鐚一文上げる理由は無い、受取るべき約束の金は勿論、夫に附屬する利子も皆當然子供が母から相續した金で、私は子供にこそ拂へ、貴君方に渡す謂はれはないですよ、子供があるとは有難い、結構だ、私は嬉しい、何だか又若くなつたやうな氣がする、困るどころか本當に悅ばしい、何、何處に居るんです其子供は、疾く見たいものだ、何故貴君直ぐと連れて來て下さらなかつた？』

逆拗に出て來られて、今度は間齋驚いて了つた、だが此容子で見るといふと、相良は今日まで子の有ることを知らずに居たらしく思はれるが、おかつは果して告はずに居たのか、何しろ飛んでもない理屈を云やアがると、これから間齋負けずになつて口角沫を飛ばして今迄の顚末を述べ立てる、おせんがおはんに賴まれるまゝ用立てゝやつた金と、おはんを引取つて世話をしたに就いて要つた金が六千圓、内二千圓は内金としてかつ子から受取つたが、あと未だ四千圓あること、幸吉の性質が末恐しい奴で持餘しものになつてること、養育院に入れてあることなど話した。

庄兵衛は此等新事實を聞く事毎に胸轟かして、更に又駭然たるばかり、加之に子供が惡性で養育院

に入れてあるなど、全く愕かずには居られなかつた。

が愕くと同時に庄兵衛は打叫んだ、

『最早鐚一文も拂へん、鐚一文も私の懐中からは出せん。』

之を聞いて間齋、顔を蒼白くして、自分の机の前に突立つたまゝ、

『拂はんなら拂はんで宜しい、法律に訴へるばかりだから。』

『馬鹿を云ひ給ふな、此樣な解りきつた事件を裁判所がナニ搆付けるか、此事で我輩から金を奪らうといふのは阿房の骨頂だ、子供があるとは耳よりの話、困るどころか大に自慢だ、有難い。』

と歸らうとすると、おせん婆、入口の戸の前に立はだかつて邪魔をするから、庄兵衛腕力を出して突のけ跳除け、遂に戸の外へ出た、おせんは喘ぎ〳〵、出てゆく庄兵衛の跡から怒鳴る、

『盗坊！　畜生！　義理知らずめ！……。』

何方が義理知らずだか判らない、間齋も、

『覺えて居やがれ。』

と云ひながら手暴く戸を締め切つた。

二十

庄兵衛非常に心が激してゐるので、小言でも云ふやうに車夫に直ぐ山屋町へ歸れと命令ける、車夫こそ宜い面の皮だ、庄兵衛は一刻も疾くかつ子に逢つて今日の顚末を話し、而して悉しい事を聞きたいので、歸ると匆々かつ子を呼つけて、一應話を聞き取つて、而して二千圓を拂つたことに就いて大に叱り付けた。

『ねェかつ子さん、一體金ッてものは其樣な風に使ふもんぢやアない、何故和女は其時私に一應相談をしなかつた、實に馬鹿馬鹿しい事ぢやないか。』

かつ子は到頭此事が庄兵衛に洩れて了つたかと思つて、只管に當惑して、暫しは言ひいづる言葉もなかつた、ア、先日來た手紙は矢張皆崎の手蹟だつた、あの手紙の用向は矢張幸吉の事に關してゞあつた、最早何もかも知れたに違ひない、此上隱すことは無用だと、かつ子思つてはみたものゝ、庄兵衛が思つたよりも手柔かに自分に事件を聞糺すだけなので、偖面と向ふと言ふことも言ひ惡く、兎角躊躇勝になつて了ふ、

『只貴郎に御氣の毒の思ひをおさせ申したくないと思つて……、本當に彼の兒の情ない容子ッたらそれは〳〵ありませんでした、疾から御話をいたさうと思つて居たのでござんすが、何だか工合が惡くつて、それで今日迄。』

『工合が惡い？　何の工合が惡い、私には一向判らん、如何工合が惡い？』

問はれたがかつ子は云はない、云はぬ辯明もいたしません、只々哀しい氣がするのと、事柄が事柄なので、沈みかへつて、平素元氣勝のが、今日は全然不元氣でをります、之に反して庄兵衛の方は愉快さうな面白さうな、又若返つたやうな風になつて、獨りで喋りたつてをりまする、

『可憫想な餓鬼ッたつて、私や之からは大に可愛がつてやる、和女が彼の子の人間を改良させやうッて養育院へ入れてくれたのは誠に宜い事だつた、御禮を云ふ、だが最早斯う判れば早速手許へ引取る、引取つて教師でも付けることにする、兎に角私は用の都合を見て明日にも養育院へ出かけて行つて、一度逢つてくることにしやう。』

翌日は會議があつて手が離されず、夫から二日ばかり、矢張何のかのと用事が出來て、今日こそはと思つてゐたのが到頭一週間ばかりといふもの、庄兵衛一寸の隙もなかつた。

其内に十二月へ入つたが、萬國銀行株は相變らずの大人氣、取引所に於ける買熱といふものは夫れは〳〵大變なもの、相場も遂に二千七百圓といふ高値になつて了ひました、が不思議な事には一方に警戒的の風評が、何處からとなく日一日と擴がつて、買方は今非常の苦境に在るとか、今に悉く顚覆して大變な慘況に陷るなどゝ、口へ出して公々然豫言するものさへ出て參り、相場が騰貴してゐる其底に、何となく不安な調子が見えすいて參りました、併し何しろトン〳〵拍子に、騰りに騰つて來てゐる人氣株の事だから、中々下る容子は見えず、大概な悲觀説は强氣配に打消されて、依然騰貴の唯一方、誠に素晴しい勢でございます。

庄兵衛は、金が湧いてくるやうな此中に立つて、意氣益〻揚々、大に鼻の先を蠢めかしてをりますが、内心は何かといふと、實は昨今は大變な心配、いろ〳〵惡い細工がしてあるのだから、一朝暴露たら往生寂滅、只だ昨今の勢では其樣な心配は萬々無いとは思ふものゝ、併し自分の住んでる地下が、悉皆穴のやうに掘拔いて、陷穽になつてゐて、何時なんどき其穴がミリ〳〵破壞して、其中へ顚覆するかも知れないと、懸念が無いでもございません、であるから毎月二度の受渡日には、いつも大變に儲かつて大變な勢であるけれども、其反對に賣人の方の損失は非常なものだから、其損が大きくなればなる程、賣方は猶々躍起となつて、自ら反對の策を講ずるだらうと、然う考へると庄兵衛は薄氣味の惡い考を出さぬ譯には參りません、併し一體何故彼の猶太人共は、斯くも執念く賣に出てゐるのだらう、金錢に拔目の無い彼等、眼前損に損をしてゐながら懲りずまに賣方針を變へぬといふ、合點のゆかぬ事である、併し此調子でゆきさへすれば、今に彼奴等を全滅して了ふことが出來るは定、此方には都合が好いが、しかし此に怪しからぬは、萬國銀行關係者が賣りをやつてるといふ事實、郡代は賣方の帳本人だから、其一派は仕方が無いが、同じ味方の銀行内のものが、賣に出てゐるに至つては打棄つては置けぬ事、彼等は相場の騰つたのを利用して金を取るに急なのから、賣を行るのかも知れないが、詰り敵に内通するのも同じこと、叛逆人も同じこと、これは實に怪しからぬと、庄兵衛

殊に平かでございませぬ。

二十一

一日庄兵衛かつ子と談話の中に、此事を語つて不平を告げると、かつ子は寧そ自分も賣つたことを明白地に告つておく方が可いと考へて、斷然悉皆と自白した、

『相良さん、何をお隱し申しませう、實は私も賣りました、昨日も、一番後で引受けた千株を、二千七百圓で賣りました。』

驚いたは庄兵衛、言葉も出ない、叛逆人が眼の前に現はれて、然もそれがかつ子其人であるのだから、殆んど茫然自失の容、

『和女が賣つた！　アノ和女が！　和女が？』

かつ子は些と氣の毒に思つたが仕方が無い、で庄兵衛の手を執つて、固く握つて、惡く解られては困るが此事は私や兄から豫々御話して置いたこと、今更考出したことではないと、辯解をいたしました、敏之は相變らず羅馬に居るが、始終手紙を妹へ寄越して、銀行の株の相場が不自然に騰るのは心配で溜らぬ、宜加減のところで見末をつけて賣つて了はなければ恢復のならぬ端目に陷らうと、何時も長々と書いて寄越す、昨日來た手紙にも其事が書いてあつて、今度は是非賣れと固い命令、それでかつ子は賣つたのでございます。

庄兵衛は二度三度念を押すやうに繰返して、

『和女が、和女が賣つたのか！　ぢや近頃市場で吾輩と輸贏を爭つたのは、鋒を交へてゐたのは、和女なのだね？　驚かざるを得んねどうも！　銀行筋の賣物だと感ずいては居つたが、眞逆和女とは知らなんだ、して見ると吾輩が仕方なく買取つた玉は、和女が賣つた玉其ものだつたのだな、どうも實に怪しからん！』

怪しからんとは云つたが、例時のやうには大怒りをやりません、かつ子は庄兵衛嘸ぞ大立腹をやるだらうと思つてゐたのに、夫程でないので、猶更工合が惡くつて言出し惡かつたが、併し心を定め道理を含めて、無謀に買煽つて不自然に値を高くさせるのは一時の付景氣、結果は大危險に陷ると說いて、

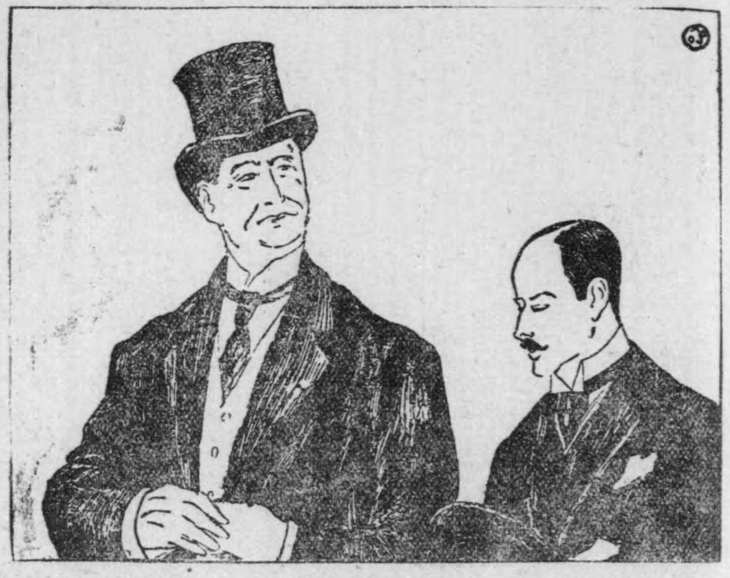
『貴郎マア私の云ふことを熟く聽いて下さい、私達の持株三千株は今七百五十萬圓といふ大した價段を生み出して、誠に結構な事には相違ございませんが、此利得は不意の、理屈に合はない所得と云はなければなりません、考へると實は私は餘り恐ろしくつて怖くつて、そんな大金は何う考へても私の所有ではないとしか思はれません、第一私は、私達ばかりの利害の點から云ふのではござんせん、世間の人の手都合から考へてもです、貴郎の手に、自分達の財產として有つてゐたお金を信用して託し

た人達の利害を考へて御覽遊ばせ、其額は何百何千萬といふ高になりませうが、其額に對しては貴郎は全然責任を背負つてお在の理屈でございます、それを貴郎は賣つたり買つたり買煽つたり、相場に其金を回はして使ふといふ、夫は實に危ない所爲ぢやございませんか、何の爲に一體貴郎は理屈に合はなくなるまで相場を引上げやうとなさるのでございますか、高い値の出るのはそりや結構な事には相違ありませんが、理屈も無い迄に高くするのは如何いふ御考へでございませう、それを其上にも煽つて激さして、上げやうとなさる、私には頓と合點が參りません、段々人の噂が私の耳へも入りますが、人は皆、トゞの詰りは屹度大破綻だ、大變な騒になると評し合つて居るやうでございます、何も株の値を無理に上げなくとも、天然自然に任して置いて、恥かしい事は無いではございませんか、無理に高くして置いたからッて、永持は致しません、自然と本當の相場に落着いて了ひます、其方が銀行に取つても又買ふ人に取りましても、何んなに安全で堅固だか判りません。』

言葉を盡してかつ子は説法したが、庄兵衛は頑として變じない、暴々しく突起上つて、

『吾輩は是非三千圓の相場を出させる、今迄も買つてるが此上にも買ふ、倒れる迄買續ける、倒れて後に止む決心だ、吾輩一人倒れはせぬ、三千圓の値を見ぬ内は皆共倒れは覺悟の前だッ。』

十二月十五日の受渡の翌日には相場は二千八百となり、それから引續いて遂に二千九百圓となりました、で超えて二十一日には、到頭三千圓の大ドタをも拔いて、三千二十圓の突飛相場を現しました



が、其日の取引所内の騒擾といつたら形容に言葉が無いくらゐ、人心の激動は凄じいものでございました、固より理屈も由來もあつたものでなく、標準も論理も立つたものでなく、只無暗に無鐵砲に無茶苦茶に買煽つたので、全で暴騰でございます、段々人の噂に由ると、例時愼重な態度を外れたことのない郡代も、今度は隨分冒險の立場に陷つたといふこと、固より此數ケ月飽までも賣にばかり働いてやつて來たのだから、相場が騰れば騰るほど受渡毎の損失は恐ろしい程大したものに相違ない、或人は今度はさしもの郡代も大々的損失に陷つて、金權大王の勢力も悉く失墜して了ふだらうとまで、噂をいたし、唯も彼も意外なトチ狂はせを期待する有樣となりました。

一方相良庄兵衞は、此時が全盛を極めた時で、其權力の絶頂、大王、彼の前には天も麾き地も震ふほどの威勢、其巍々たる馬車が、英町の勝誇つたる萬國銀行の宮殿的建築の前へ着輦すると、一人の從僕は總てへ美事な絨氈を敷きつらねる、相良庄兵衞は徐々と車扉を排して降り立つて、其上を堂々と乘入を致す、只の土や歩行道を踏まぬといふ帝王の尊嚴でございます。

金の戰ひ

一

此年の暮十二月の納會には、正午十二時半卽ち立會が始まる三十分前だといふのに、取引所場内はハヤ最早人で身動きもならぬほどの雜沓、尤も數週前から株式市場の人氣は非常に沸騰してをるのであるが、今日納會は一年中の最後の戰場であるから、諸人待構へて、今日こそは一番決戰的の勝負を行らうと、手ぐすねひいてかゝつてをるので、人氣の沸騰するのも無理はございません、今日戸外は恐ろしく寒いが、場内は人の氣で可なりに熱いくらゐ。

例の弱氣の本家元田は、ついぞ今迄見たことの無いやうな蒼い神經過敏の顏をして、其側に靑鷺のやうな長い脚を眞直に傲然と突立てゝゐる强氣の大將山縣と、頻に强弱論を闘はしてをります

『山縣君、人が云つてることを聞きましたか、エ？……』

云縣たが、四邊が騷々しいので相手が聞取れまいと思つて更に一段と聲を强めて、

『エ？　山縣君、人の噂ぢやア此四月には愈ゝ開戰になるだらうといふことですが、どうも私が考へても他に出る途は無いと思ひますね、獨逸が彼の大軍備を抱へてゐるのも、畢竟は戰爭を期待してゐる爲でさあ、今度我議會で議決になつた新陸軍法を實行されては溜らんから、此が實施を見ぬ内に戰爭を押始めやうといふ獨逸の計畫に相違ないです、第一ビスマークは……。』

山縣はカラ〳〵と打笑つた、

『ビスマークの話は最早澤山、私ビスマークが此夏當國へ來た時に五分間許り談話をしたことがあるが、至つて好さゝうな人間ですよ、中々戰爭のやうなことは好まぬ人らしい、今度の我萬國大博覽會は大々的成功だつたし、何が貴君、株の前途に對し悲觀すべき事がありませう、博覽會の御蔭で歐大陸に於る我帝國の勢望實權今や隆々たるものあるぢやござんせんか。』

元田は仍然力無さゝうな、時々喧騷で喧取れない聲を發して、種々の悲觀事を並立てる、市場の景氣が好過ぎるのは餘り人間が多血性になつて所謂投機熱が高まつた爲なのだから、危險は眼前に見えてゐる、博覽會騷ぎに人心が浮立つて、事業熱は過度に勃興、其結果は今に恐るべき慘害を釀すに相違ない、萬國株は昨今三千三十圓になつてるが之は本當の狂相場だなどゝ、盛に悲觀の弱氣說を言立

てると、山縣は大の元氣で、一々言葉尻に力を籠めて、

『君併し株は騰つてるんだから仕方が無い、萬國株は今日の大引には屹度三千六十圓にはなりますぜ、請合です、其時に貴君鯱子立をやつたつて追付きませんぜ。』

元田は最早爭はぬ、併し自分の見込が山縣の云ふやうに若し外れたら夫こそ本當に鯱子立をしたつて駄目だから、山縣に云はれて見ると心配で溜らない、が餘りそれを色に現はすことも出來ないから、參觀席の方や其婦人席の方やを宜加減に看回はして、誤魔化してをりました。

癪て元田は、上を見てゐた眼を下へ降ろして、見るといふと直ぐ前に佐藤が、年百年中變つたことの無い笑顔をしてをつたので聲を懸けて、

『オヤ君ですか。』

と云つたが、佐藤の笑顔の容子では、佐藤も矢張山縣の見込を賛成してゐるらしく見えたので、只さへハラ〳〵憂慮してゐる元田は、猶々氣が揉めて溜らない、

『佐藤さん、貴君何か知つてお在の事があるなら、私にも些と聞かして下さいな、私は斯うといつて別に相場に理屈は有つてませんが、さうですな、有つてると云へば單純なもの、卽ち私の主義といへば、郡代の筆法にならつてやつて行くことです、何故と云へばですね、郡代は、郡代の筆法を眞似てゐれば、結果は何時でも好いですからな、間違は無いですからな。』

側に山縣は冷笑しながら、

『だつて貴君、一體誰が郡代は弱氣に行つてるといふのですか？』

郡代が相良を附狙つて、萬國株に對して弱氣の態度を執つて、幾箇月かの終りに、時機が熟したら決然起つて、其何百萬の軍資を楯に市場を席捲し、萬國株を滅茶々々にして了はうと從事つてゐるといふ噂は、餘程以前から取引所の內外で人の口の端に懸つてゐることであるが、年末納會とは云へ今日のやうな稀に見る場の混雜は、諸人が彌々郡代の攻擊の火の手が今日揚がると見て取つた其爲で、容赦の無い大戰鬪、何方が勝つか負けるかといふ天下分け目の當日と信じたからでございます、が、此株式社會の事といふものは何が如何なるか判らない、虛僞と僞計と懸引と方便で固められてゐる世界で、屹度大丈夫と請合はれたことも、前以て觸ちらされた言も、一寸一ト吹風が吹けば、悉く變つて疑はしくなつて了ふといふ有樣だから、實は何にも當にならない。

二

元田はモグ〳〵と山縣に、

『貴君は然うでないと仰有るのですか、そりや私だつて固より郡代が注文を發したのを見た譯でないから、確固した言は云へないが……。』

今度は佐藤に向つて、

『併しねエ佐藤さん、貴君は夫に就いて如何御考へなさる？　此度は郡代も其まゝにしては置くまいぢやござんせんか。』

と云つたが、佐藤は只默つてニヤ〳〵笑つて許りゐて不得要領、元田は確とした見込が立たなくなつて了つた、すると此時、直ぐ側へ一人の大柄の男が通つたのを元田は發見けて、ア、此人ならば何か說があるに違ひない、此人は見越しが巧いから、一つ當つて探つてやらうと、近寄つて側へ行つた、此大柄の人といふのは外でもない、前段御承知の有名な當り屋雨宮剛藏、瀨之津銅山株が十五圓といふ棄値相場の時、馬鹿々々しい剛情を張通して身上有ッ丈を其に打込んだそれが大當りに當つて、後で其株を賣つて儲けた金が一千五百萬圓といふ一大暴富、考へてしたのでもなく、計算を立てゝ仕たのでもなく、全く一六勝負の成金、金之れ權の世の中とてそれからといふもの雨宮は財界の偉人、一言半句其口から洩れるものは財界の指針と云はれて、二六時中人に附纏はれてゐるのでございます。

山縣は冒險的の相場師だから雨宮主義が大好き、

『商内に見込も絲瓜も有るもんぢやござんせん、何でも運でさア、運が有るか運が無いか、それで損得が定るので、考へたりなんぞする必要は全然ありやしません、考へてやると屹度失敗なうに極つて

斯う言つてると、そこへ庄兵衛が入つて來たので、山縣は庄兵衛の方を指さして元田に示しながら、

『然うだ、元田さん、彼の人が如彼やつて彼所に頑張つてゐる内は大丈夫、御覽なさい彼の態度を、相良があの態度でゐる内は私はズン〳〵買ひますね。』

相良庄兵衛は例時の通り場へ入つて來て、いつも自分の居場所と定めてある左側の大壁の前の柱の下へ陣取つた、仲買の重なものは皆場内の居場所を定めてゐて、場が始まつてゐる時に、店の者なり客筋なり用があれば、何んな人混雜の中でも其處へ行さへすれば直ぐ判るといふ習慣に出來てゐる。

彼の郡代は、場などへ足を踏入たことは無いと高く留まつてをりますが、全く、彼は自分自身は勿論、代理人さへ派出してをりません、郡代一家としては誰一人取引所現場には出てゐぬのでございます、然るに、人々は何となく場内に郡代の主權が行はれてゐるやうに感じられる、郡代の一軍勢が現場に居るやうに感じられる、不思議のやうだが、不思議でない、といふのは何故かといふと、當の本人も代理者も固より現てゐるのではないけれども、其麾下に屬する幾多の仲買、才取、手先、外交、手下、これが殆ど其數が判らない、殆ど數へることの出來ない人間が、王座にいまさぬ陛下郡代の爲に、働いてをる譯なので、此秘密奧妙の兵士は、場内の過半を占めてるのでございます、さて此の如き捕捉すべからざる優勢なる郡代の大軍勢それに對して、彼れ相良庄兵衛は何うかといふと、相良は

本當の只の一人、しかも無手で對つてゆくのだから、考へてみると殆ど無謀、實に大の冒險でございます。

庄兵衞の居る後の所には長い床几が置いてあるが、彼は決してそれへ腰を下したことがない、場が立つてる全二時間といふもの、立つたまゝでをりますが、つまりこれは疲勞れたなんどいふことを見せまいとする一つの剛情、只時々身體の透いてる時に、丁度人の高さのところ迄手垢や脂で汚れて黒光りになつてる柱へ、一寸と肘を寄せかけるくらゐが關の山でございます、こんな風にして彼れ庄兵衞は、何時も儼然とした服裝に身を拵えて泰然自若、どこまでも罪のない愛嬌のある顏をして、自分の場所に構へてをります、誠にハヤ大膽不敵、しかし一方から申しますと中々偉いものでございます。

元田は少し小聲になつて、

『あの人は非常な買を行つて、一生懸命相場の下るのを喰止めてるといふ事だが、本當ですかな、萬國銀行が自分の行の株を賣買するやうぢやア、大變な話ですね。』

山縣は大に辯護する、

『そんな無茶な事がありますものか、一體誰が賣つて而して誰が買ふといふのですか、貴君それを云へますか、成程銀行が賣買もしませう、相場もするかもしれぬ、併しそれは銀行がするのぢやアなくつて銀行が得意客の爲にするので、當然の話でさア、又相良だつて自分一己の勘定で相場をやりもしませう、それが何も惡いとは云へませんわ。』

元田は山縣のいふ事に就いて別に爭はない……、成程山縣の云ふ通り、相良は銀行の名で買つてはゐない、藁人形の阪谷だの矢野だの其他の名義、殊に自分の自由になる支配人附使用人などの名でも買つてるのだから、表面からは何とも云へぬが、只だ人の耳から耳へと廣まつてゐる噂で見ると、どこまでも相良は銀行の株を弄んで、無理に相場を支持しやうとかゝつてゐるに相違ない、尤も此は中々難かしい藝當だから、庄兵衞も非常の細心を持つて行つてをる、只無暗に買つてばかり居ては人の疑惑を招く種だし、一つには又餘り資金を固定させて銀行の金庫を自行の株ばかりで埋めるのも打毀しの基と思ふから、機會を見ては賣りもしてゐる、が昨今の場合となつては、最早然ういふ事もしてゐられぬ、形勢甚だ不利になつて來た容子だから、たゞもう防禦一點張り、賣りを交ぜるどころか非常に買人氣を引立たせて、相場を支持しやうとばかり、ドシ〳〵買注文を出してゐる、其れで庄兵衞表面はと見ると、依然平日のやうな平靜と愛想とを保つてをります、けれども、最後の決着は如何だらう、斯う段々深味へ陷つて來るやうでは、恐るべき危險へ陷はせぬかと、腹の裡で庄兵衞考へて、昨今は内心頗るのビク〳〵ものでをるのでございます。

元田は雨宮が面容の醜い一人の小男と何か密々話をしてゐる後方へそれとなく立寄つて、何んな事

を話してゐるか立聞をしていたが、やがて慌だしく山縣の居るところへ取つて返して、

『聞いた〳〵、確に聞いた、雨宮は郡代の賣註文は正に三千枚を超えてると云つてますよ、さう聞けば私は賣る、賣る、裸體になるまで私は賣ります。』

少し聲音の變つて來た山縣は、

『ナニ賣が三千枚？　本當ですか、彌々眞劍ですね。』

三

場内は段々と混雜が增してきて、到るところ人の話聲で埋つてゐる、其話を纔との事で聞分けてみると、話は誰も彼も郡代と相良との猛烈な決鬪戰のことで持切り、實は別に一々人の言葉を聞取ることは出來ないが、喧騷の容子でそれと察せられる、宛然横綱と横綱の大勝負が始まる前に滿場ドヨメキ渡るといふ有樣、兩大力士の、一方は飽迄も冷靜沈着に何事も論理的に賣進んでゆくのに對し、一方は情熱に燃え立つて飽迄も買ひ通さうといふ氣勢、何方が勝つだらう、負けるだらう、イヤさうでない此うでないと、雜踏の狀喧號の聲、さしもの大取引所も埋沒されるかと思ふばかりでございます。

一寸と心を動かした山縣は、又固有の勇氣を出して、

『何方でも構はぬ、僕は矢張買だ、御覽なさい、太陽は此の如く曇らずに依然と光り輝いてゐるのではありませんか、株は只々騰る一方だと、僕は固く信ずるです。』

元田は哀し氣な剛情を飽までも、

『イヤ皆崩落してゆくばかり、雲行は確かに爲うだ、雨は眼前に控へてゐる、どうも昨夜の夢見が惡かつた……。』

二人は互に强弱樂悲の觀を言合つてをりましたが、側に居る中立の佐藤は、二人の話を聞いて平然と笑つてゐるので、其相も變らぬ不得要領に二人は矢張り迷つて了つた。

此方に相良庄兵衞は柱の前へ立つて場の景況を觀測してゐたが、自分の機嫌を取りにくるものや得意客やが段々と蒐つて來て、身邊は人の黑山、入れ代り立代り握手を求められると、庄兵衞は一人殘らず厭な顏せず力を籠めて握手をしてやる、其握つた手の裡に彼は平生のやうな沈着と安心を含ませて、萬國株ならば勝利は請合と云つたやうな味を感じさせてをりまする、急ぐ連中は一ト言二言言葉を交へる、庄兵衞から安心の言葉を聞いて嬉しがつて勢づいて歸つて行く、正直な人達でございます、中には一言二言で引下らずに、何時までも一緒になつて長話をしてゐるものも少くないが、そんな連中は相良庄兵衞のやうな豪い人と別懇だといふことを人に見せて、得意でゐる輩でございます、何しろ場合が場合だから、庄兵衞の如才ないこと一ト通りでない、識つてゐるとゐぬとに論なく、向

ふから話懸ければ名前を覺えてをらぬやうな人にまでも、左も嬉しさうな容子を作つて、愛嬌を振蒔いてをります。

例の毛利も挨拶にやつてきたが、庄兵衞名前を忘れて了つて、一緒に來た城大尉から毛利といふことを聞かされて始めて知つたといふ有樣、毛利は義兄城大尉に勸められて、今日有つてる萬國株を賣る積りでやつて來たのを、一ト度庄兵衞に握手されて、忽ちにグニヤリとなつて、賣るのを止める氣になつて了つた、それから次が重役の一人生糸屋の瀨藤健藏、一分間話がしたいといふ、其話の用向は何かと訊くと、自分の營業が昨今非常な悲況に沈淪してゐるが、一方家産の大部分が萬國株に卸してあるから、若し萬國株が低落でもしやうものなら自分は全くの破滅となる、心配で溜らぬ所へ、猶一つの心配は伜の團吉、增島信平の店へやつてあるが、全然不成功不評判で、內外彼是氣が氣でなく、眠る目も碌に眠られぬから、一遍逢つて見込を聞いて、そして安心したいのだと、斯ういふ次第でございます、此瀨藤健藏、庄兵衞に一寸肩を叩かれて、疾くもグニヤリ、安心と滿足の思ひを胸に滿たして颯々と歸つて參ります。

それから未だ後へ後へと人がくる、今迄も可なりに儲かつてゐるが此上とも幸運に行きたいと願ふ小部、自分は何處までも大華族であつて金などには頓着せぬが只だ面白半分時間潰し遊び半分やつてくると瘠我慢を云つてゐる福岡侯爵の代り〳〵にやつて參る、それから又由利もやつて來る、由利は過日關係を抽くして庄兵衞と別れたが、人と喧嘩をした儘でゐるのは大嫌ひ、自分は善かれ惡かれ飽迄も終始を友と全うすると標榜してゐるのであるが、其實何か儲け口でも落ちてはゐぬかと、キヨロ〳〵眼でやつて來たのだ、到頭醍醐もやつて來た、いくらか人間が異ふと見えて人が道を開いて通す、實際彼は中々悧巧者の勢力家でございます、で今庄兵衞と話してゐるところを見ても、平生と毫も變りなく、戲談を交ぜて云つてる風なので、そんな容子を見て居合はす强氣の面々は、心の裡に大喜悅、滅多に馬鹿をせぬ醍醐の彼の容子、不可と見れば先づ以て逃支度をする其彼れが、あの沈着工合なら萬國株も未だ〳〵大丈夫と、安心の體でございます。

跡へ跡へと人が引續いてくる、庄兵衞と鳥渡目禮したまゝで行くものもあれば、一ト言二タ言話をしてゆくものもある、其間には使用人が來る、手下がくる、用事を聞きにくる、注文を傳へに來る、何しろ相場といふ熱で、人の頭腦は夢が夢中、何かしら相場の變る種を早く嗅つけたいと、各自に鵜の眼鷹の眼兎の耳でをるのでございます。

例の阪谷も場內を迂路々々、彼處へ行つたり此方へ行つたりしてをります、かと思ふと數歩の此方には矢野龍吉、背を向けたまゝ振向きもせず、掲示場に貼出してある外國取引所の相場電報を一生懸命になつて見てをります、才取りの馬島小吉は場內をチヨコ〳〵駈ずり通し、人中を搔分けたり突貫したり、さも忙しさう、要之段々立會の時刻が近づくに隨つて、人は增してくる話聲は大きくなる、

まるで大潮の奔入してくるやうでございます。

四

今諸人は寄付の相場を待構へてをります。

增島信平と谷田部孝三は仲の好い友達みたやうに、打連立つて仲買人溜室から立會場へ出てきたが、兩人の商内からいふと、兩人は強弱正反對の敵と味方、本人同士其事は無論知つてるに相違ない、此幾週間、場の戰場へ出ては兩人に錦を削つて容赦の無い戰鬪を致し、いづれ一人は顚覆して了はなければならぬのだが、表面は何處までも親友でをります、一方增島は小柄の花車で優形の、それで中々活潑敏捷な、卅三で叔父から營業を繼承した好連者、片一方谷田部は舊と增島の店の支配人であつたのが、客の内から好い金主が出來て、獨立して開業した男、年齡は六十一の、大きな腹の、ボッタリした歩行つきの、頭髮の白い、所々禿のある、顏の大きい、遊びが好きといつた人物、見たところ全然異つてゐる此兩人は、二人共手に手帳を持ち、好い天氣だなどゝ天氣の話をしながら、澄してやつて參つたが、何ぞ知らん懷中にある兩人の手帳には、何千枚といふ賣と、一方には矢張大額の買が覺がしてあつて、今日の戰場に持出して輸贏を爭うわけなので、外面太平無事の其肚裡には、修羅の火焰を燃してゐるのでございます。

『好い霜でございましたね。』

『全く、今朝私は歩行いてやつて來ましたが、實に爽快でございました。』

當り障りのない天氣の話をしてゐるが、其實二人共隅々隈々周圍を窺つて、油斷の無い容子をいたしてをります。

場内の立會をするところは十字形に仕切つてあつて、周圍が低い鐵柵で圍んである、其眞中で正式の場が立つので、其處は神聖なる取引の場として、一般公衆は立入ることが出來ない事になつてをります、で其鐵柵の外の一方には又別に仕切りがしてあつて、其處は現物場で、係りの書記が三人、前の卓に各自大きな帳面を控へて、高い腰懸に腰をかけ、場面が見下ろせるやうに屯してをります、それから他の一方には片一方のよりも狹い間仕切りがあつて、取引所の人には俗に六弦琴と呼ばれてをりますが、それは其中の形が六弦琴に似てゐるからでございませう、此所へは仲買人の使用人でも客筋でも自由に入ることが出來て、此所からなら鐵柵内の本場に居る仲買人と直接に口を利き用が辨じられるといふ仕組に出來てをります、それから、場の後ろの方の、角になつたところは佛國公債類の取引場で、此場へは誰でも入れるやうになつてをります、仲買は現物取引場と同樣各自其代表者を出張らせてをつて、代表者は一人々々其用意の手簿を有つてをります、要之場内中央のところは相場熱の最も盛な定期の取引場、其前の一方の一ト仕切は現物取引場、後ろの一溜りは別に公債取引をする

ところと、斯うなつてをるのでございます。

増島信平が仕切内へ入ると、左の鐵柵のところに自分の店の支配人金森が來て、手眞似で一寸ととと招ぶので、増島は行つて小聲で何か話をいたす、増島は毎日取引所へ出る時には、自分の支配人金森と現物係の手代と公債係の手代とを一人づゝ、他に時として受渡係のものを一人連れて參るのでございます、それから時に由ると電報係の書記をも連れてゆくことがある、此電報係は永らく例のチビ福本が行つてをるが、此男の腮の鬚は益〻殖えて濃くなつて、まるで毛の中から顔が現てゐるやう、其僅に現てゐる顔から不似合な優しい眼が光つて見えてをります、福本はサドワ事件で一萬圓儲けた時大變な大風呂敷を擴げ贅澤の癖をつけたので、例の川村花子に悉皆つけ上がられて、それからといふもの金の無心引きもきらず、之が軍資を作る爲に如何かして又一當あてやうと、自分勘定で相場を行つてをりまする、が、其行法は盲滅法、只無茶苦茶に庄兵衛を信用して、庄兵衛の仕てゐる通りに行つて、他には自分が主任をしてゐるから毎日來る電報をちよい〳〵見る、店へ來た注文を聞取つてそれから自分の思惑を考へる、それくらゐのものでございます。

福本は今到着したばかりの電報を兩手に溢れるほど持つて、二階の電信局から駈け降りて、柵外のところへ行つて、守衛を頼んで主人増島を呼出して貰ふ、増嶋は今金森を還したところでございました。

『大將、電報を持つて參りましたが、一々調べて宜く別けて置きませうか？』

『大變に澤山來たのだから然うして貰はなくッちやいかんな、何がそんなに電報が入つたのだ？』

『大概萬國の買注文のやうでございます。』

増島は電報の集めたのを手に取つて、簡單と見て、大層喜こんでゐるらしい、全體増島は此頃から庄兵衛と深い關係が出來て、庄兵衛の買注文は殆んど皆増島へ出してまゐる、其高も中々大きうございますが、今朝も今朝とて庄兵衛からは巨額の買注文を出されるし、地方電報は皆萬國の買といつたやうな理由で、増島は全く萬國株の一手專賣屋になつて了つたのでございます、實は今迄萬國株に就いては少し疑つてみたこともあつたのだが、値段が馬鹿騰りにドン〳〵騰つてゆくに係はらず斯うどうも世間の買注文が引きも切らず生てくるのは、實際好い株であるからだらうと、信平今は悉く疑念を去つて了ひましたので……。

さて、數ある電報の内の一枚の發信人の姓名を見ると安多摩の取立業深澤の名が目についた、此男は此地方の百姓や僧侶やを相手にして商賣をしてゐるのだが、中々手廣く商内を行つてると見えて間斷なしに電報を寄越し、増島の店に取つては大事な得意客の一人でございます。

増島は福本に電報を返して、

『ぢやア此を場の現物係へ渡してくれ給へ、而して君は、電報を電信局から持つてくるのを待つて居

ずに、二階へ行つて待つて、自身に電報を受取るやうにして呉れ給へ。』

五

委細承知して、福本は混雑中を掻分けて、大聲で増島々々と店の名を呼びながら、現物の場の方へ駈けていつた、之に答へて現物場から出て來たのは瀬藤團吉、勿論此所では店の名で商内をするのであるから、増島と呼んだので増島の店員たる瀬藤が出て參つたので、此瀬藤は増島の店に二年許り働いて居たのを、中途で一遍怠けて退いたのであるが、父健藏に猶つと辛抱して勤めなければ借金を拂つてやらぬと云はれて、其條件で再び入店したのでございます、自分は現物主任ではないが、今日主任が缺勤したので、臨時に代理として場へ出ることになつたのだが、本人それが嬉しくつて面白くつて堪らない。

福本は瀬藤の耳元へ噛りついて、何かコチヨ〳〵話をしてをつたが、其出來た相談は外でもない、二人一緒になつて深澤の注文の頭をハネやうといふ、即ち深澤の買注文は大引であるのを幸ひ、それ迄ザラ場で自分達の相場に使つて、宜加減な相手を拵らへ、買つて而して又賣つて、其差を自分達で山分けにしやうと、斯ういふ惡計を考へたので、固より相場は騰ると見てかゝつての仕事でございます。

増島は福本に用を命令けて了つたので、場の方へ取つて歸して行くと、殆んど一歩毎に守衛が擁へては、誰から寄越したのかしらんが鉛筆で粗雑に書いた色の着いた紙片を渡される、これは他ではない客から出した注文票で、客は仲買の商内場へ入れないから、守衛に賴んで渡して貰ふのでございます、此注文票は此社會で賣買の注文に用ゆる傳票で、何店のは何色といふやうに、店に由つて紙の色が異つて、視易いやうに作へてある、増島の店のは青色で、西洋でいふと希望を現はす色だといふ事でございます、守衛の持つてくる注文票は漸次と殖えて參る、中には又客や店員から直接に渡すのもあつて、注文票は今増島の兩手に掴めないやうになつて了つた、大變な注文、しかもそれが皆萬國の買注文でございます。

増島が場の鐵柵に沿つて置いてある床几のところへ來ると、其處に谷田部が居たが、これも矢張手に注文票を一杯有つてゐる、而して其數は段次殖えて參る一方、谷田部の店の注文票は色が赤、生々しい赤色でございます、此注文は固より増島の手に在るのと反對な賣注文で、郡代と其一味の手から發たものに相違ない、といふのは、谷田部は弱氣の代表者で、殊に猶太銀行高等計畫の、主たる實行者として働いてゐることは、知れ渡つたことであつて、全くの郡代派でございます、今彼は立留つて頻と義弟にあたる仲買の土井と話をしてゐたが、此土井は耶蘇信者であつて猶太人の女を娶つたもの（譯者曰、耶蘇教の人は滅多に猶太人の女とは結婚しない風習になつてをります、）ヅングリムックリ

肥つた、頭の禿げた、屢く交際社會へ出て倶樂部などへ出入りしてゐる男、彼の醍醐久一郎は最初は增島へ注文を出してゐたのが、喧嘩をしてから谷田部へ變つた、其谷田部と又不和になつて今度は土井へ注文を出してゐるのでございます、土井の注文票の色は鮮かな空色でございます。

守衛が一人やつて來て增島に取次ぐ、

『增島さん、馬島さんが貴方に御面會を求められます。』

增島は急いで鐵柵の緣の方へ參つて、馬島に逢ふ、馬島は此頃は萬國株一方で商内をいたしてをるのであるが、今此所へ參つたのは、場外の仲買連が取引所内の廊下などで疾や既に相對づくで行つてゐる隨意場の其氣配を齎して來たのでございます、例の成瀨も相對屋の一人、今迄興業銀行で僅か許りの月給で勤めてゐたのを辭職して此職業に移つてから、少し仕事が面白くゆくので、大に一ト旗擧げやうと云つてをるのでございます、尤も此相對取引といふのは只私の取引であるからして、場内でするのではない、風がピユー〳〵吹晒す外廊下などの寒空で行るので、併しこれが中々勢力を有つてるのでございます、馬島は增島に早言で、萬國は弱氣組から大分ウリ聲が出たので少し下り氣味になつたが、相良は本場の立會以前に、相對で少し買煽つて、而して本場の寄付氣配を勢付けやうと務めてゐた、昨日の大引では萬國は三千三十圓だつたが、相良は今朝成瀨に百枚の買注文を出して三十五圓で買はせた、卽ち五圓高になつてゐると、斯う馬島は報告した。

『ハア然うか宜しい。』

と云ひながら、增島彌々場へ戻つて、來て見るといふと、最早仲買の顏ぶれは悉皆揃つてゐる、其數は合計六十名、未だ一時前で立會の時間にならないから、本當ならば規則違反だが、行つてる内には時間が來やうと、昨日の平均相場を基にして、そろ〳〵仲間商内を始めてをります、指價の注文は其値段が出なければ商内が出來ぬのだから、市場に何の影響を與へぬが、成行一任の注文は仲買の見込で計らうのだから、氣配が直ぐと場面へ現はれる、さて斯道で良い仲買と云はれるのは如何いふ性格のものかといふと、鋭敏で前見の明があつて、事を處するに滯らせずに、片ッ端からテキパキと處してゆくといふ風が無ければいかぬ、敏活といふことは由來成功の基となるものであるからして、手も足も頭腦も健でなければならない、そこへ以ていつて、大銀行に好い緣故を有し、少しづ

つでも可から廣く方々から諸種の報道を集める手段を有し、內外取引所 商況の電報を誰よりも先へ受取る、と斯ういふような力があれば成功は請合でございます、仲買には又相手の耳へ此方の云ふ言を熟く入らせるだけの丈夫な聲が必要でございます。

六

遂に時計の針が午後一時の所を指す、それと同時に立會開始の鐘が、人の頭の波動する上を越えて響渡つたが、其鐘の餘音が消えるか消えぬに、待搆へた谷田部仲買は獸の吼えるやうな、場內でも此より大きい聲はあるまいと思はれる大聲を放つた、

『萬國賣らう、成行き……。』

只だ賣らうとばかり、値段を云はない、聞かれたら云はうと思つてるのでございます、居合はす六十人の仲買は集まつて來て立會場の內へ圓形列を作らへる、種々の色の注文票は疾や既に闘々として人の視線を惹きますが、今此六十人の仲買互に顏と顏を見合つてばかり、默つて人の寄付相場を言出すのを待つてゐる、其光景は宛然多數の決闘家が今や決闘を始める前に互に探りあつてるのに異なりません。

谷田部は又もや叱りつけるやうな大聲を上げて、

『サア萬國株、萬國賣らう！』

諸人谷田部に應對するものが無かつたが、此時增島は一ト聲高く、

『値段幾許？』

と切出した、增島の聲は小さいが調音は至つて鋭く、此際殊に耳立つて、諸人の耳底に響きました。

すると此時土井が昨日の大引相場を發言して、

『三十圓買ひ。』

と叫んだが、直と又他の仲買が高値を入れて、

『三十五カイ。』

と叫びだした、此三十五圓は今通して來た場外相對の相場であるが、土井は疾く之を知つてるから急いで此場で三十で買つた、而して場外で三十五で賣つて、其差の五圓を儲けやうと、斯ういふ腹であつたのでございます、ところが、今申上る通り他の仲買から場外相場の三十五圓を素破拔かれて了つたから、土井は儲け損なつて了つた、さて此方に增島は大概のところで買はなければならないから、これなら相良にも褒められるだらうと思つて、此時口火を切つて、

『四十圓カイ、萬國四十圓カイ。』

と叫ぶ、すると谷田部、

『何枚？』

『三百枚。』

『ヨシ賣つた。』

と愛に手を打つて兩人は手帳へ書留める、取引が出來て、卽ち今日の寄付値段は三千四十圓、前日の引値と較べると十圓高といふことになりました、商内が出來たから增島は一寸場を離れて、帳簿の萬國株の頁を開けて待つてゐる書記の所へ行つて値段と玉數を屆ける、これで今日の口開が出來たのでございます。

サア人氣は湧いて來た、それから二十分許りの間といふもの、宛然洪水の關門を取除けたやうに、場内は大騷ぎ、他の株券の取引も大分の波瀾、値段の押問答、ウリカイの懸聲、仲買連が手に溢れる許りに握つてゐた注文が、待構へて實行されるのだから中々の混雜、耳も聾する許りの其間に、帳簿係の書記は一段高い書記臺に構へて、仲買や手代から疾言で報して寄越す新しい出來値と出來高を、聞洩らさじと懸命に書留める、早業と申さうか手練と云はうか、慣ぬ人には出來ることではございません、後の方には公債の場が、これも中々の活躍をやつてをります、何しろ此時刻に於ける取引所内の騷擾は宛然大河の岸を打ち岩に碎くやうなもので、物凄くも亦凄じいほどでございます。

相良庄兵衞は依然例時の柱近くへ突立つたまゝ、場内を見廻しながら、莞爾と笑つてをります、今日の納會には萬國株は弱氣の一撃の下に氣配を滅茶々々にされて了ふだらうとは、久しい以前から一部の人々に豫測されて居つた事、それが滅茶々々どころか寄付に十圓も高値を現はしたのだから、人氣を沸騰させた事は恐ろしく、從つて庄兵衞の圍繞連中も亦中々多くなつたのでございます、居合はせた由利は瀨藤と小部と一緒に庄兵衞の側へ寄つて、萬國株を二千五百圓の相場の時賣つて了つたが餘まり用心過ぎて今更殘念極まると、追從後悔の言葉を述立てる、醍醐は又一向株の事に無頓着なやうな容子をして、其處に居合はせた福岡侯爵と腕を組んでブラ〳〵歩行きながら、秋季の競馬大會で自分の持馬が敗北したことを元氣らしく話をする、其他種々の人間が居る中に、例の毛利は滿面に包み切れぬ笑を浮べて、終には一人で喜んで居られなくなつて、一緒に居る城大尉までも捉まへて乾燥ぎだす、其城大尉は依然と悲觀論者で、マアマア終局まで待つてみなくつては譯らぬなどゝ、泣言をいつてをります、此兩人と好い對照になるのは山縣と元田、山縣は大自慢、元田は大辛氣、一人は馬鹿々々しく株が騰つたので光り輝いてゐるに引換へ、一人は拳を握つて篦棒を叫んでをります。

時刻は一時間程經つたが、相場は殆んど同じところに留つてをります、新規注文も電報も入り方が少くなつたと見えて、活氣が始め程でなくなつた、尤も平時でも、立會の最初と引間際には商況が引立つて、其中間は一寸落着くもので、これは寄付當座には新しい氣配が立つのと引際では又一ト戰爭やらうといふ考へが諸人にあるので、自から然うなるのでございます、が谷田部の怒鳴聲は相變らず

聞えてゐる、增島の小さいが鋭い聲も其間に聞えてゐる、兩人とも今地方から入つた注文の賣買をやつてるのでございます。

七

追々取引は進んでいつたが、此時偶然流言が傳へられた、萬國株が五圓安だといふ風評、引續いた取沙汰が十圓安、十五圓安、遂に相場は三千二十五圓に落ちたといふ人々の觸れ言でございます。

恰度此時、一寸の間姿が見えなかつた矢野が再び現はれて、庄兵衛に耳打したが、其事柄は三田男爵夫人が馬車で來てゐて、萬國株は賣つたものか如何かと自分に意見を尋ねるが、何と返事をしたものだらうと、斯ういふ事でございます、恰度今相場が下つてゐつている折に此問合せをしられたのだから、庄兵衛甚だ以て面白くない、夫人め又先時のやうに往來の馬車の中で縣引をやつてるのだなと思ひながら、

『どうでも勝手にさせるが可い、が賣りでもしやうなら只は置かぬからと、然う返事をしてやり給へ……。』

矢野に夫人への言傳を言含めて了つたところへ、やつて參つたのは馬島小吉、萬國が又十五圓喰込んだといふ注進でございます、茲に於ては流石の庄兵衛、少し心配せざるを得ない、そこへ以つていつて猶一つの心懸りは、實は里昂の相場は今日屹度騰るに定つてゐるから場の引際に其里昂電報を此方へ屆かせて、此所の引相場を引締めて置きたいと、其手筈にしてあつた電報が今もつて入つて來ぬから、庄兵衛氣が氣でなくなつた、そこへ思も懸けない十五圓の低落といふのだから、心配は只だ增すばかり。

中々敏捷い男であるから、小吉は庄兵衛の目の前にマゴ〳〵などは致してをりません。

『大急ぎ成瀨に逢つて四百でも五百でも幾らでも必要な高だけ買つて喰止めろ。』

と庄兵衛に命令けられるのを聞くが疾いか、一目散に行つて了つた。

此注進と命令は刹邦の間に行はれたから、之を見たものは側に居た山縣と元田の二人限り、二人は之を聞付けたから急いで小吉の跡を踉けて探りに參る、中々油斷はございません、馬島小吉は萬國株係りにされてから、中々大切な重い人間になつて了つたので、人は彼に取入つて株の事を聞出さうとかゝる、顏色を見て何かを探らうとかゝる、從つて何かにつけて懷中都合も好くなつてきてゐるのでございます、斯うなると舊時の困つた時のことなど忘れて了つて、相場などは猶太人でなければ出來ぬと蔑すんでゐた事も平氣、今は自分で立派に行つてゆく氣になつてをります。

場外の相對取引は、取引所の外廊下の冷きつた空氣の吹晒す午後三時の蒼い太陽が光線を送つても一向に暖まらない所で行るのであるが、此處では萬國株は本場内ほどに急速な下りかたを致しません、

成瀨は幕下の才取りに勸められて、先刻土井の行損なつた鞘取を此でやつて、一ト儲をいたした、卽ち場内の本場で三千二十五圓で買つたそれを、直ぐと場外で三十五圓に賣つて、纔た三分間に三萬を儲けました、成瀨の此買が本場で現たので本場の値は下りかゝつたのが三十圓に引戻したが、之は卽ちこの法律的正式の場と默許的相對場とが兩々相待つて、自ら權衡を取つてゐる御蔭でございます、こんな鹽梅で、此兩場間の行く道は取引所の人や仲買人の往通で立會時間中は大變な混雜でございます。

で、場外の相場も自ら下りかけてきたが、此時庄兵衞は馬嶋小吉に傳へて、成瀨の手で買煽らせたので、三千三十五圓から引續いて四十圓の相場を持こたえて、卽ち寄付値段に立戻らせて了つた、併し元來無理な懸引で立戻らせたのだから、何時までも其値を支へてゆく事は出來ない、先づ第一に谷田部と其他弱氣軍の作戰計畫、此人々の商略は場の終りに近づくに從つて急に大に賣を發表して市場に恐慌の風を起し、立會最後の三十分間に敵をして生色なからしめやうといふ魂膽、中々危ないのでございます、庄兵衞は熟く此危ない事を知つてゐる、そこで豫て申合せておいた手眞似でもつて、二三間先に昨宵氣で少し疲れて茫然紙卷煙草を喫つてゐた阪谷に合圖をすると、阪谷は心得て例の六絃琴の仕切内へ行つて、急いで衣囊に用意して置いた靑色注文票を取出して、增嶋へ渡す注文を書入れた、こんな風に隨分防戰に務めたが、今日弱氣連の攻擊は頗る猛烈で、相良方の防禦其功を奏せず、こゝに萬國は又もや五圓を滑り落ました。

八

時刻は遠慮なく進んで今二時四十五分、大引迄には纔た十五分しか餘さない、十五分經てば遠慮會釋なく閉會の鐘が鳴るのだ、サア場に詰込んでゐる人衆は喚く、叫ぶ、突貫する、苦悶する、倒打廻る、宛然地獄で苛責の鞭で撻たれて苦しんでゐるやう、殊に本場内から聞える怒號叫喚は銅羅を破るやうな音響で、物凄じいほどでございます、が擾亂の絕頂といふ今此時に、庄兵衞が大の心配を以て待ちに待つた事件其ものが到達した、外でもない、里昂からの電報でございます。

福本は場の始まる前から十分毎に、手に一杯電報を持つては、二階に在る電信局から下に居る主人のところへ駈つけて來て、それを渡してゐたが、此時大急ぎに人を掻分けて出て來て、大層嬉しさうな一通の電報を讀んでをります。

すると誰だか一聲、

『增嶋、增嶋。』

と呼んだものがある。

福本は自分の店の名を呼ばれたから、誰かと思つて呼んだ方を見ると、其人は矢野龍吉、何んな電

報だか見たいのだといふ、併し福本は嬉しくて氣が急いで夫どころの場合でない、自分自身の商内から云つても誠に吉報な萬國株の高値を報じて來た里昂電報、里昂取引所で今日大手の買人が現はれて、萬國の相場が著しく騰つたが、其結果は無論巴里の相場にも及ぼしてくるといふ急報なのだから、中々返事などしてゐる暇はない、成程此電報許りでない、今日他の仲買へ來た諸電報にも同樣の報道が入り、同時に大分注文が入つてゐたのでございます。

影響は卽坐に且つ顯然と現はれた、例の尖つた鋭い聲で增嶋は幾度も繰返して、

『萬國株四十圓買ひ！　四十圓買ひ！』

すると土井も其手に溢れるほど注文を握つてゐるのだから、相場を驀上げて、

『四十五買ひ！　五買ひ！』

すると賣方の谷田部は直ぐと、

『四十五ヤリ、二百枚四十五ヤリ。』

『宜しい買はう。』

增嶋は更に五圓高に出て、

『五十圓買ひ。』

『何枚。』

『五百枚。』

『賣らう。』

『買つた。』

餘り人氣が湧立つて、狂亂的に騷がしくなつて、仲買同士の云ふ言迄が聞取れなくなつたが、凝固つた職業の熱心だから、終には手眞似腕づくで續けてゆく、遠くからだと、見えるのは大な口の開いてるのばかり、聲は些度も聞えないではない、實際言語は發しないで、只手眞似で話をしてゐるのでございます、其手の使ひかたは如何な風かといふと、自分の身體から手の先を向ふへ押やるのはオファー卽ち賣らうといふ意味で、手の先を自分の方へ上へ向けて折曲げるのは引受けた買取つたといふ標法でございます、それから指を擧げて數を示すのは賣買する玉數を見せるので、買ふとか賣らぬとか諾とか不承諾とかいふ事は、頭で云ふことになつてをります、總て素人に解らぬのは勿論、知らぬ人が見ると宛然狂氣じみてゐる、公債の場を見るといふと此場も大騷ぎ、まるで大喧嘩が始まつて毆合でもしてゐるやう、片一方に黑山のやうに人が蒐るかと思ふとそれが忽ちの中に崩れて又直ぐと側に黑山が出來る、出來ては崩れ崩れては出來る、何れも公債の立會でございます、現物の場と本場仕切との間には、高い椅子へ腰を懸けた三人の記帳方が卓を前に控へてゐるが、無數の人の頭の嵐のやうに荒れに荒れてゐる其大海原の上に、取遺されて遺棄物のやうに纔とこさで卓へ捉つて

足場を失はぬやうに泳ぎ浮いてゐるといふ體たらく、取引をしたものが投出すやうな聲で知らせてくる變動の恐ろしい相場を、轉手甲舞して聽取つて此を大な帳簿へ順々に記けてゆく、瞬く裡に一頁くらゐ記けて了ふ、其忙しさは目まぐるしい程でございます、殊に此現物取引場は今混亂の絶頂で、見渡す限り赤黑い人の頭ばかり、それも頭の上部ばかりで顏などは中々見えない、只手帳の紙片の翻々するのが鳥渡〳〵頭の上邊で見える位のものでございます、場面が激昂するときには參觀席も必ず大繁昌、殊に今日の强弱兩軍決戰的の戰況を見やうと、株商賣の人は勿論、株に趣味を有つてる人や彌次馬連、出たわ〳〵、狹い廊下も押かへされる大混雜。

が此時卒然と場内に鳴響いたのは閉會を報ずる鐘の音、此鐘の音でさしもの群衆悉く鳴を靜める、手眞似足眞似の音も止つて了ふ、本場も現物場も公債場も皆一樣、只殘つてるのは、一般公衆のザワザワ聲だが、これも漸次遠ざかつて、消えて亡くなつて參りまする。

で隨分と永く續いた混亂の揚句に、萬國株は幾許に引けたかといふと、三千六十圓といふ思ひも寄らぬ高相場、前日の引値よりも正に三十圓高になつてゐる、弱氣は全く敗亡して了ひました、此受渡は賣方に取つては更に一段の大苦痛、當半月受渡日に賣方が買方の手へ拂ふ差金は非常なものになるのでございます。

九

意氣頗る軒昂たる相良庄兵衞、歸りかゝつて自分を圍繞いてゐ群衆から能く見えるやうに足爪立て、出來る丈の背伸をして、一巡り眺めて見た、此時彼の容貌は實際大きくなつたやう、目覺しい大捷利に、持前の小柄も自と太つて、背高く伸びて、偉く大な人間になつて見えた、背伸して場内に居る人間の中から庄兵衞が眼下に見てやらうと思つたのは外でもない郡代、此方を倒さうとした三郎右衞門、どうだ此有樣は、屈して憫を乞ひたくないかと、思ふ存分無念を晴した氣になつた、が併し其郡代は無論此場には居ない、殘念には思つたが、しかし何しろ小氣味が宜い、郡代の一味の奴原、汚穢極まる彼れ猶太奴、人を禍害に陷れやうとばかりしてゐる人界の匪賊、今日の結果を目の前何と見ると、庄兵衞悉く心に驕つて、溜飲を下げてをりまする、實に彼に取つては今日は一大紀念日で、内心手の舞ひ足の踏むところを知らぬ程でございます。

サア斯うなると人は彌〻益〻追從阿諛してくる、得意客も友人も誰も彼も、庄兵衞に飛かゝるやうに隨いてくる、福岡侯爵も瀨藤も小部も由利も、寄つて蒐つて兩手を出して握手を求める、醍醐は例の通り世間馴れた如才無い風に、作り付けた笑を顏に見せて、庄兵衞を褒めそやす、其癖彼は腹の裡には、今日のやうな勝利は消えかゝつた燈火が寸時明るくなつたやうなものだと覺つてゐるのでムい

ます、就中毛利の嬉しさッたらない、飛かゝつて庄兵衛の兩頰を接吻いたす、城大尉は如何かといふと、依然肩を窄めて形勢を危んでをりまする、こゝに庄兵衛を神とも佛とも崇ひ立てゝ兩手で拜まぬばかりにしてゐるのは米本、今日の大引の相場を知りたい一心に僅の透時を拔けて新聞社から駈付けてきたが、三千六十圓と聞いて腰も拔かさぬばかり、嬉しいのか驚いたのか眼からボロ〳〵涙を流してをります、矢野は何時の間にか姿が見えなくなつたが、これは無論今日の氣配を、三田夫人へ注進に行つたのでございませう、それから馬島と阪谷は之も嬉しく、雀躍して騒立つてをります。

山縣は鼻蠢かしながら元田に、

『如何です私の云つた通りでせう？』

すると元田は長い顔を一層伸ばして、負惜み半分脅迫半分、

『未だ〳〵、行くところへ行かなければ判りません、墨西哥事件も未だ落着がつかんし、羅馬問題も懸案となつてるし、加之獨逸が今に何んな事をしてくるか判らん、それを圖に乘つて矢鱈無性に相場ばかり釣上げる、釣上げるは可が高く上げれば上げるほど、其處から落ちる痛さは烈しい理屈ですわ、マア〳〵見てお在なさい、後になつて判りますから。』

で佐藤が今日に限つて眞面目になつて自分の顔を見てゐるので、

『佐藤さん、貴君だつて然う御考へでせう？　要之急くものは必ず敗れ、進むを知つて退くを忘るゝものは必ず頓挫するですね……。』

此内に場内の人々は漸次去つて、跡に遺つたのは煙草の煙のドンヨリと青味がゝつたところへ有らゆる塵埃の厚い黄味がゝつたのが交つた一種不透明不愉快な色彩の空氣ばかり。

さて増島と谷田部は、威儀を正して又共に携へて仲買人溜室へと引取つて參つたが、谷田部が心の裡に、客のは兎も角自分の商内の大損耗に歸したのに大に激してゐるに引かへて、増島は自分の相場は行らぬ主義だが今日の相場の意外な高値に終つたのに感奮して、勇みかへつてをります、兩人は一寸立留つて土井と話をいたしたが、これは今日行つた取引の記帳や取運びの事で、今日中に始末をつけて明日は明日で又始める用意をしておく用でございます、此方に仲買使用人の控所を見ると、控所は他の室より一段床の低い、柱澤山の室であるが、能く手の屆かない學校の教場のやうに、幾つもの卓と椅子が不規則に置かれ、外套帽子の置場も亂暴に、明放しになつてゐる混雑、そこへ福本と瀬藤團吉は帽子を取りに來たが、何か戯談口を利き利き、側の卓の一つで組合の書記が作製してゐる今日の平均公定相場表の出來かゝつてるのを待つてをります。

三時半になつたので此表が場内定めの柱面へ貼出される、福本瀬藤兩人は駈寄つて主人の爲に之を寫す、寫しながらも些も默つて居られぬで、變な聲で鷄の鳴く眞似などして嬉しさうに巫山戯てをります、これは、今日兩人は、深澤の買注文を中途で狡く誤魔化して、久しぶりで儲けたのが嬉しくつ

て、それで凝乎としてはゐられぬので、暫らく强請事で攻めぬかれ通しでゐた花子へ、金剛石の指輪くらゐ買つてやつて、久し振で嬉しがる顏が見られると福本は喜んでをりますと、瀨藤は谷田部の手から一生懸命になつて横取りした此木糸枝へ――谷田部は糸枝を止めてからはヒポドラム座の曲馬女を月極めで抱へたいといふこと――六箇月分の給料を前貸にしてやつて、機嫌が取れると喜んでゐるのでございます。

使用人控所の喧噪は中々靜まりません、宛然學校生徒が遊戯時間に端目を外づして騷ぎまはつてゐるやうに、下らない笑談を云つたり眞似をしたり、若い血氣の青年が集つてゐるのだから、中々の賑かさでございます、廊下を見ると場外相對の場立も疾や引けて了つて、其處には、段々增してきた寒氣にもめげず後殿を務める株屋連が幾人か殘つてゐる、今日一ト當あてた成瀨も元氣らしく歸つてゆく、遂に六時を打つたが、最早六時になると今迄集まつてゐた相場師連も仲買連も才取りも客筋も、三々伍々退散して己がじゝ歸途に就く、儲けた人、損した人、勇む人、萎れる人、自暴になる人、負惜の人、サア之からは遊びの時間だと、自家へ歸つて衣服を着替へて、料理屋へ入るもの、劇場へ行くもの、情婦に逢ふもの、待合へしけ込むもの、貸座敷へ陷るもの、各自に遊びに務めます。

此夜市中は大層な景氣でございましたが、到るところ談話は今日の取引所に於ける郡代と相良との猛烈な決鬪戰で持切り、で何んな事が人の口の端に上つたかといふと、第一弱氣の位地の非常に不利で危急な事で、此幾箇月といふもの能く持こたへては來たものゝ、毎半月の受渡毎に要した金は大したものだらう、相場が騰れば騰るほど拂ふ金は大したもの、金や株を有つてゐる人ばかりなら可いが多くの相場師は夫だけ所有株も軍資も無くやつてるに違ひない、證據金追證據金を拂つて維持して置くにしてからが、些度やそつとの額ではない、一體如何する積りだらう、飽くまでも弱氣で通し此上まだまだ賣つてく積りか、終には賣崩して了ふつもりか、トゞの果に買方軍を微塵にして凱歌を

擧げる目算歟、併し實繫いでゐるにしろ、斯う騰貴が續いては資金は益〻多く要る、一方金融は緊縮してくる、一體如何する考案だらう、固より郡代は別者だ、賣方聯合軍の總大將郡代は、他のものとは譯が違ふ、彼は無盡藏の軍隊軍資を兵站に藏めてゐる、いくら殺しても使つても、長びかうと延びやうと、そんな事には頓着ない、要之不可抗爭の勢權を有つてゐる、敵軍の矢盡き弓折れて降を軍門に乞ふに至るまで實際儼然として搆へて居るのだらうと、噂はとり〴〵。

で一體郡代は是迄支持してくるのに何の位の資金を使つたらうと、世間は他人の疝氣を頭痛に病んで見る、今迄毎十五日受渡毎に拂出した金は並大抵なものではない、恐ろしい損に違ひない、金を米俵よりも大な嚢に詰めて之を山程積んだのをドシ〴〵焚付のやうに相場の火中へ投込んで溶して了ふ、軍隊が幾列にもなつてるところへ砲彈が來て飛散させて了ふやうに、其損害は大したものだらうと、諸人噂をいたしてをります。

全く郡代、今迄は殆んど唯我獨尊的無上の勢權を取引所社會に振つてをつて、此度のやうな手酷い打擊は被つたことはございません、平常好んで自分でも云つてる言だが、彼は單に金錢の商人、相場師ではない金商人、危道を踏まぬ商人でこそ、金界の主權者にもなり得ると、堅く信じてをりますので……。

彼は卽座に上つてくる一時的の利益は目懸けない、勢力權力の爲め、生の爲め、此世に奮鬪致してをるので、であるからして飽までも、沈着に、冷酷に、執拗に、思ひやりも遠慮もなく、只寧ろ慘酷一方に、財界に角逐してゐる、屢く彼が大通りだの上野町通りを歩行いてゐるのを見懸けるが、其蒼白い顏色には、私情に驅られぬ自若たる風を現はし、足許にこそ老の不確なところはあるが、露微塵心に不安らしい色は見せない、彼は唯只論理一方だから、何事も冷靜なのだ、萬國株は理屈から考へると二千圓以上に上る理由が無い、上がればそれは理由の無い一種奇怪の事實である、況んや三千圓を超えるなんど、全く以て狂亂沙汰、必定下つてくるに相違ない、天へ向つて石を投げても、それは必然地上に落ちてくる……と斯う彼は考へてる、今彼はそれを待つてる、默つて落着いてゐさへすれば、夫で可いと思つてゐるのだ、がそれにしても下る時期は何時と知れぬに、其知れぬにも係はらず資產悉くを盡してまでも、行つてゆく積りか何うか、何にしても郡代は豪い奴に相違ない、度胸の大な人間だ、討死するとしても嘸ぞ花々しからうと、世間は死際迄も見たがつてる。

之に反して相良庄兵衞、相良の方は人工的の附景氣、派手な藝者の口を藉つたり、相場社會を味方に入れたり、彼等に一寸儲けさせたり、又は加特力宗旨を招牌にするなど、樣々な狂言でやつてゐるので、今のところ兎も角に人望は有り景氣は宜いが、庄兵衞一個の懷中は最早大分の火の車、庄兵衞を圍繞いてゐる一般の人間は各自大儲を致してをるが、庄兵衞一個內實は漸次軍資は盡きてきてゐる、萬國株の高値を維持してゆく爲に彼は殆んど限り無い買を續けて、卽ち自分で高くさせて夫を自分で

買つてる事實、其額は莫大だ、之が爲には勿論銀行の資金も吐出して、今は最早空虛になつてるに相違ない、庄兵衞初には是等の用意に九千萬圓見積つておいたのだが、買又買で其三分二は固定して了つてゐるから、全盛を極めてゐる其裏は、實は悉く衰耗を極めてゐるに相違ないのだ、世間の銀行や會社などで評判や信用を好くしたい其爲に、自己の勘定で自己の株券を買占めて高くして、得意になつてゐるものがあるが、之は飛んでもない過りで、危險を招く因である、庄兵衞も此事は知つてゐる、知つてゐるから初には最も注意して其事の無いやうに務めたが、自體大夢想を描く彼れ、餘り事を大袈裟に、前途を大きく考へ過ぎて、段々深入して道具立を大きくし、冒險的の計畫を、詩的空想に組立つて、それで兎に角思の通り進つたから、猶ほ我を忘れて增長して、益〻事業を大きくしたが、今日の實際は我ながら持餘してゐるといふ、それが樂屋の有樣だ、ア、若し彼れ相良が、彼の醜族猶太人のやうに、有餘る金を絕えずに有つてゐたらば如何だらう？　未だ〳〵大戰鬪を行らねばならぬに、現在彼れに餘すところは僅か一二百萬、兵站の餘裕は盡きんとしてゐる、騰貴してゐる株が若し低落し始したら如何だらう、鞘を拂つてゆかねばならぬのは、今度は反對に彼の番だ、株は引取れぬ、さりとて資金は無い、仕方が無い證據金を積む、それが出來れば差支ないが、悉く怪しいのだから、彼は深淵に臨んでゐるのだ。

今の庄兵衞の大成功は、見た目は堂々たるものではあるが、一寸でも重い重量物が反對の方へ着、と、宛然秤量が一厘一毛違つた爲に權衡を外れて、皿が顚覆落下つて了ふやうに、如何な大きな彼の機關も直と顚覆して了ふのだ、口に云はねど世間では皆然う思つてゐる、彼の一味のものでさへ、此事を思はぬ人は無い、或は此上株が騰らう、がトドの詰りは顚覆と、皆內心に思つてゐるのだ。

今巴里人士は我も人も此事を語草にして、郡代相良兩人の大決鬪に目を峙てゝをりまする、財界兩怪物の對戰、一か撥かの大決鬪、龍虎相搏つ大壯觀、幾多の生血を流すであらう、幾千の犧牲を拂ふであらうと、人々は皆夢中。

十一

一月二日は去年納會迄の受渡諸勘定を決濟する日になつてをるが、其翌日の三日になると、萬國は俄然五十圓の大暴落となつた、サア諸人の動搖は大變、尤も下つたのは萬國ばかりではない總體が下つた、實は市場は餘程以前から品支がして供給が過剩になつて居つたので、それが新甫立會になつて一時に爆發した譯で、出來かゝつてゐた疑はしい新會社などは幾つも其まゝ解散した位、尤も人は此位な相場の高下には馴れてゐる、宛然船の羅針盤の針が大風雨に遇つて位置を狂はしたのと同じやうに、一日の內一取引所內で百圓位の高下にはさして驚きもしないが、併し疾くから內心に氣遣を以つをつた場合だから、五十圓前後の此高下でも普通の高下とは思はない、何か市場大擾亂の兆候では

あるまいかと、人々は案じ顔「萬國は下つた！」聲は夫から夫へと傳へられる、驚いたものもあり、喜んだものもあり、恐れたものもあり、人の心は總體に動搖をいたしました。

超えて一月四日、庄兵衛は顔色も容體も崩さず、微笑をさへ浮べて、場内の例の場所に陣取つてをつたが、今日は疾くも手を廻して多額の買をやつた爲に、萬國は又もや三十圓を引戻したが、翌五日には、庄兵衛種々と苦心した甲斐もなく、相場は四十圓方滑り落ちて、到頭三千圓になつて了つた、サアこれからといふもの、毎日の高下、六日には少し上つたが七日八日には更に下る、下落の傾向は止めても止まらず、少しづゝだが下向一方、小川の水の流れるやうだ、が庄兵衛は氣を屈さない、寢ても覺ても、策戰に頭腦を使ふどころか此頃は碌に眠りも致さない、而して毎日缺かさず例の居場所へ陣取つて、如何しても勝は此方のものとばかり、飽までも固執してゐる、何豈一勝一敗は戰場の常、負けることがあつても退くのは一歩數歩、たとへ人で壘を築かうと、金錢の俵で障害物を設けられやうと、最後の一兵を殺す迄も、銀行の金庫に一錢を餘すまでも、斷じて我は死守すると、決然と構へてをります。

九日に至つて相場は少し上つて、庄兵衛は聊か安堵、が驚いたのは弱氣連、此分では相場が後戻りして、十五日の受渡には又もや大苦痛を見ることかと、大ビクものでをりました。

が表と裏とは全で反對、庄兵衛の方でも表面丈は大景氣を見せてゐるが、懷中都合は最早全くの骨ばい、自分の手には勿論、銀行の金庫にも今は殆んど一錢の資金も餘つてゐぬ、實際樣々工夫をして他から金を借りる迄になつたが、それも中々引足りるどころの話でない、偖てかうなると窮鼠却つて猫を嚙む結果になつて、寧そ買つて買つて、有ッ丈の萬國株を買占めて、現物の見込なしに賣つた弱氣の奴原を受渡に困らせて、手も足も出せぬまで苛めてやらうと、斯う庄兵衛は考へた、若し然うなつたら如何だらう、郡代奴元來品物無しに賣つてやがるのだから、金を積んで差出して、自分の生命を繋ぐ牛乳一杯の代だけは御慈悲に殘して殘金を取つて解合つてくれと縋つてくるに相違ない、オメオメ軍門に哀を乞ひに來るに相違ない、さうなれば愉快此上もない事だが、さて此一擧を遂行するには少くとも一二億の金が要る、今迄で既に一億近くを溝の中へ棄てたのだから、此から飽迄も續けて敵を全滅させるには未だ一二億の金が要る、其丈けあれば一擧に猶太人を掃滅して、自分が取つて代つて金權王、世界の實權者になれるのだと、庄兵衛の考へは恐ろしい樂天的、將棋で勝敗を決するくらゐの事に考へて、全然金錢といふものゝ價値を忘れて了つたやうだ、所謂妄想所謂夢想、が實際彼は眠られぬ時には、此樣な事ばかりを考へてゐる。

十日、庄兵衛に取つて恐ろしい日が到着した、彼は取引所の場へは平素の通り憎いほど元氣らしく且沈着いた容子で出てゐたが、今日は人々の心の底が不安不確で充たされてゐたと見えて、暗鬪が非常に盛、討死をするものがある、支拂停止をするものがある、暗擊に遇ふものがある、伏兵にかゝ

るものがある、市場の内面いかにも暗憺、此金錢の戰鬪は性質多くは陰險で、弱いものは音もなく眞先に鎗玉に上げられる、そして關係者であらうと親族であらうと、友情も親情もそんなことは構はない、只强い者勝の腕力自然法、人に喰はれぬ其先に此方から喰つてかゝるといふ之が金錢やりとりの方法、味方も何もあつたものでない、有るのは貪婪の慾といふ道連れが只一人。

相良は受渡の前日の十四日が心配で溜らない、十三日迄の軍資金は何か此うか有るとしても、十四日から十五日へかけて一の關門を越えるやうなものだから、大に危んでをりましたが、十三日迄は依然買つて引締めてゐた爲に、十五日の受渡日には下りは下つたが纔かの低落、二千八百六十圓卽ち前月暮の納會相場から見るといふと、纔に百圓安で落着いた、庄兵衞實は內心には、十五日には悉皆襤褸が出はしまいかと心配してゐたのだが、表面には飽迄も勝利を粧つてをつたので、是位の低落は寧ろ意外に思つたのでございます、賣方は今迄殆んど相場が上り通しで受渡毎に損ばかりしてゐたのが今日は始めて利得をした、其と反對に相良は始めて其直間を拂ふので、增島の手を經て相手方へ支拂を致させたが、之を初として增島は段々手許を拂つて參る、其事は追々に判ります、偖て十五日の受渡は何か此か無事に濟したが、三十日の受渡は果して如何なものだらう、多分決戰的大勝負と成ることでございませう。

十二

如斯日々の仕事が危殆くなつて、片時も心の休まる隙が無くなつたので、庄兵衞は夕方やなんど何か勝手な眞似をして氣を紛らす事が必要なやうな感じを起した、どうも一人で家に引込んで居られない、市中料理店などへいつて飯を食ふ、女を買つて一夜を過す、其他演劇へ行つたり珈琲店へ出入りしたり、成だけ人中へ顏を現し、人前で贅澤に贅澤して、虛勢を張つて大の餘裕があるやうに見せかける、斯樣な事は今迄に無い事でございます。

さて此頃庄兵衞はかつ子とは何んな風になつてるかといふと、庄兵衞ば成たけかつ子を避けて出會はないやうにいたしてをる、此頃の容子で見ると、氣の爲かかつ子が何だか氣ぶせいだ、顏を合はせさへすれば銀行の心配事を持出す、兄敏之から來た心配の手紙の事を話始める、銀行株を餘り買高めて終了には飛んでもない端目に陷らうと、其心配を顏に顯はす、だから庄兵衞はかつ子の顏を成たけ見たくないでゐる。

それから又、三田男爵夫人の方は如何なつたかといふと、庄兵衞は夫人とは此頃又屢く例の幸丸町の別宅で出會をいたしてをります、之は夫人が又氣に入つて來たからではない、要之昨今種々と頭腦を使ふのを、場所を變へて、此家へ來ては休めて氣苦勞を忘れてをるので、然うかと思ふと又此家を